埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第247集

北埼玉郡騎西町

小沼耕地遺跡II

環境科学国際センター関係埋蔵文化財発掘調査報告

1999

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

遺跡遠景（南から）

第 2 号住居跡出土土器

第77号土壙出土土器

巻頭図版 2

序

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じています。

現今では、都市・生活型公害、地球環境問題などの複雑・多様化する環境問題に対して、適切に対処する必要が生じています。そのため、環境科学の試験研究を充実させるとともに、環境学習の推進、環境情報の提供、環境面での国際貢献などの新たな要望に対応した、環境科学の総合中核機関として、環境科学国際センターを騎西町に整備することとなりました。

環境科学国際センター建設用地内には、埋蔵文化財包蔵地が所在しており、これまでに騎西町の調査を含めて数次の調査が行われてきました。その結果、古墳時代を中心とする遺跡であることがわかっています。

その取扱いにつきましては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。調査につきましては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、環境科学国際センター整備室の委託を受け当事業団が実施いたしました。

騎西町は、私市城跡をはじめとして城館跡が多く所在し、中世の遺跡が豊富なところであります。また、近年の発掘調査では古代の遺跡も発見され、多くの成果が上がっております。

今回の発掘調査では、関東でも検出例の少ない縄文時代前期末葉の土器が発見されるなど、貴重な知見が得られました。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及や教育機関の参考資料として、広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、騎西町教育委員会、環境科学国際センター整備室並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成11年12月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　荒　井　　桂

凡 例

1．遺跡全測図におけるX・Y座標値は、国土標準平面直角座標第IX系に基づく座標値を示す。また、遺構図における方位は、全て座標北を示している。

2．グリッドは9ｍ×9ｍ方眼で設定し、グリッドの呼称は、南東隅の杭番号である。

3．遺構番号は、調査時に平成3年度刊行の報告書の続き番号とした。本報告では現場の番号を優先し、遺物の註記、図面等の混乱を避けるため、遺構番号等の変更は最小限に留めた。

4．遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構図　竪穴住居跡・竪穴状遺構・周溝・井戸跡・掘立柱建物跡・土壙…1/60
溝跡…1/200

遺物図　土器…1/4　石製品・木製品…1/3
拓本…1/3　土製品…1/2

上記に合わないものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度示している。

5．全測図等に示す遺構表記の略号は以下のとおりである。

SJ…住居跡　SB…掘立柱建物跡
SK…土壙　SD…溝跡　SE…井戸跡
SR…周溝　SX…竪穴状遺構

6．遺物実測図のスクリーントーンは赤彩を示す。

7．遺構図中のドットは、遺物の出土位置を示す。

8．遺構断面図における水平数値は、海抜高度を示しており、単位mである。

9．遺物観察表の内容は次のとおりである。

・胎土は、肉眼観察で次のように示した。
A…赤色粒　B…石英　C…長石
D…角閃石　E…白色粒　F…白色針状物質
G…雲母　H…砂粒　I…片岩　J…礫

・焼成は、肉眼観察によって以下の分類とした。
I…良好　II…普通　III…不良

・色調については、小林・竹原　「新版標準土色帖」1992に拠った。

10．本書に掲載した地形図は、以下のものを使用した。
国土地理院　1/50000地形図「鴻巣」

例言

1．本書は、北埼玉郡騎西町に建設される環境科学国際センター事業地内に所在する小沼耕地遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡番号、略号、代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

№71―017

KNMGUT

北埼玉郡騎西町上種足字４番889番地他

平成８年４月22日付け教文２―17号

3．発掘調査は、環境科学国際センター建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、環境科学国際センター整備室の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が主体となり実施した。

4．本事業は、第Ⅰ章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、元井茂、濱野美代子、木戸春夫が担当し、平成８年４月１日から平成８年12月31日まで実施した。整理報告書作成作業は木戸が担当し、平成11年４月８日から平成11年12月28日まで実施した。

5．遺跡の基準点測量と航空写真は、中央航業株式会社に委託した。口絵カラー写真は、小川忠博氏に委託した。自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

6．発掘調査時の遺構写真撮影は各担当者が行った。遺物写真撮影は木戸が行った。

7．出土品の整理・図版の作成は、桜井元子の協力を得て木戸が行い、縄文土器は細田勝が行った。本文の執筆は、Ⅰ―１を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、Ⅱを桜井が、Ⅳ―１及びⅤ―１を細田が、それ以外は木戸が行った。

8．本書の編集は、木戸が行った。

9．本遺跡に関する刊行物は、当事業団年報17等があるが、内容については本書が優先する。

10．本書にかかる資料は平成11年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

11．本書の作成にあたり下記の方々からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)

山川守男　奥野麦生　松崎慶喜

島村範久　嶋村英之　坂本征男

目 次

口　絵
序
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　発掘調査の概要
　1．調査に至る経過……1
　2．発掘調査・報告書作成の経過……2
　3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織……3
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1．地理的環境……4
　2．周辺の遺跡……4
Ⅲ　遺跡の概要……9
Ⅳ　遺構と遺物
　1．縄文時代
　　(1)　住居跡……21
　　(2)　包含層出土遺物……26
　2．古墳時代
　　(1)　住居跡……29
　　(2)　竪穴状遺構……29
　　(3)　周溝……34
　　(4)　掘立柱建物跡……54
　　(5)　井戸跡……55
　　(6)　溝跡……56
　　(7)　土壙……56
　　(8)　風倒木痕……61
　3．中世
　　(1)　掘立柱建物跡……62
　　(2)　井戸跡……62
　　(3)　溝跡……63
　　(4)　土壙……81
　　(5)　ピット……91
　　(6)　グリッド・その他出土遺物……94
　　(7)　木製品……94
Ⅴ　まとめ
　1．小沼耕地遺跡出土縄文土器について……96
　2．古墳時代の遺構について……102
付　編……108

挿 図 目 次

第1図　埼玉県の地形……4
第2図　地形分類図……5
第3図　周辺の遺跡分布図……7
第4図　遺跡周辺の地形……10
第5図　関連遺跡遺構分布図……11
第6図　基本土層図……13
第7図　遺構全測図……14
第8図　遺構配置図(1)……16
第9図　遺構配置図(2)……17
第10図　遺構配置図(3)……18
第11図　遺構配置図(4)……19
第12図　遺構配置図(5)……20
第13図　第2号住居跡・遺物分布図……22
第14図　第2号住居跡出土遺物……23
第15図　包含層出土遺物分布図(1)……24
第16図　包含層出土遺物分布図(2)……24
第17図　包含層出土遺物分布図(3)……25
第18図　包含層出土遺物分布図(4)……25
第19図　包含層出土遺物分布図(5)……25
第20図　包含層出土遺物(1)……27
第21図　包含層出土遺物(2)……28
第22図　第3号住居跡・出土遺物……30
第23図　第4号住居跡・出土遺物……31
第24図　第1号竪穴状遺構・出土遺物……32
第25図　第2号竪穴状遺構……33
第26図　第2号竪穴状遺構遺物分布図……34

第27図　第２号竪穴状遺構出土遺物 ……35
第28図　周溝分布図 ……36
第29図　第６号周溝・出土遺物 ……37
第30図　第６号周溝遺物分布図 ……38
第31図　第７号周溝 ……39
第32図　第８号周溝 ……40
第33図　第８号周溝出土遺物 ……41
第34図　第８号周溝遺物分布図 ……42
第35図　第９号周溝 ……43
第36図　第９号周溝遺物分布図(1) ……44
第37図　第９号周溝・第84号溝跡遺物分布図(2) …45
第38図　第９号周溝出土遺物(1) ……46
第39図　第９号周溝出土遺物(2) ……47
第40図　第84号溝跡出土遺物 ……47
第41図　第10号周溝 ……48
第42図　第10号周溝遺物分布図 ……49
第43図　第10号周溝出土遺物 ……50
第44図　第182号土壙出土遺物 ……51
第45図　第11号周溝 ……52
第46図　第12号周溝 ……53
第47図　第10号掘立柱建物跡・出土遺物 ……54
第48図　井戸跡・出土遺物 ……55
第49図　第86・87・88・90号溝跡 ……57
第50図　第90号溝跡遺物分布図・出土遺物 ……58
第51図　土壙・遺物分布図 ……59
第52図　第77号土壙出土遺物 ……60
第53図　第78・171号土壙出土遺物 ……61
第54図　第１号風倒木痕 ……61
第55図　第11号掘立柱建物跡 ……62
第56図　井戸跡 ……63
第57図　溝跡獣骨出土分布図 ……64
第58図　溝跡平面図(1) ……67
第59図　溝跡平面図(2) ……68
第60図　溝跡平面図(3) ……69
第61図　溝跡平面図(4) ……70
第62図　溝跡断面図(1) ……71
第63図　溝跡断面図(2) ……72
第64図　溝跡出土遺物(1) ……73
第65図　溝跡出土遺物(2) ……74
第66図　土壙(1) ……84
第67図　土壙(2) ……85
第68図　土壙(3) ……86
第69図　土壙(4) ……87
第70図　土壙(5) ……88
第71図　土壙(6) ……89
第72図　土壙(7) ……90
第73図　土壙(8) ……91
第74図　ピット ……92
第75図　グリッド・その他出土遺物 ……93
第76図　木製品類 ……95
第77図　前期後葉から末葉への変遷模式図 ……100
第78図　県内出土土器と比較資料 ……101
第79図　小沼耕地遺跡の周溝 ……103
第80図　小沼耕地遺跡の周溝と井戸の分布 ……104

表目次

第１表　第３号住居跡出土遺物観察表 ……30
第２表　第４号住居跡出土遺物観察表 ……30
第３表　第１号竪穴状遺構出土遺物観察表 ……32
第４表　第２号竪穴状遺構出土遺物観察表 ……33
第５表　第６号周溝出土遺物観察表 ……37
第６表　第８号周溝出土遺物観察表 ……41
第７表　第９号周溝出土遺物観察表 ……47
第８表　第84号溝跡出土遺物観察表 ……48
第９表　第10号周溝出土遺物観察表 ……50
第10表　第182号土壙出土遺物観察表 ……51
第11表　第10号掘立柱建物跡出土遺物観察表 ……54
第12表　井戸跡出土遺物観察表 ……55
第13表　第90号溝跡出土遺物観察表 ……58
第14表　第77号土壙出土遺物観察表 ……59
第15表　土壙出土遺物観察表 ……61
第16表　溝跡出土遺物観察表 ……75
第17表　溝跡計測表 ……80
第18表　土壙計測表 ……81
第19表　ピット計測表 ……92
第20表　グリッド・その他出土遺物観察表 ……93

図版目次

図版１　第３号住居跡
第４号住居跡・勾玉出土状況
第２号竪穴状遺構
図版２　第２号竪穴状遺構遺物出土状況
第６号周溝
第６号周溝遺物出土状況
図版３　第８号周溝
第９号周溝西側
第９号周溝東側・第84号溝
図版４　第10号周溝・第83・92号溝遺物出土状況
第11号周溝
第12号周溝
図版５　第10号掘立柱建物跡遺物出土状況
第17号井戸跡遺物出土状況
第77号土壙遺物出土状況
第193号土壙
第197号土壙
第１号風倒木痕
図版６　包含層出土縄文土器(1)
包含層出土縄文土器(2)
図版７　包含層出土縄文土器(3)
包含層出土縄文土器(4)
図版８　包含層出土縄文土器(5)
包含層出土縄文土器(6)
図版９　第３号住居跡出土遺物（第22図１）
第４号住居跡出土遺物（第23図１）
第４号住居跡出土遺物（第23図２）
第182号土壙出土遺物（第44図４）
第182号土壙出土遺物（第44図５）
第182号土壙出土遺物（第44図６）
第２号竪穴状遺構出土遺物（第27図５）
第２号竪穴状遺構出土遺物（第27図６）
図版10　第２号竪穴状遺構出土遺物（第27図９）
第２号竪穴状遺構出土遺物（第27図12）
第２号竪穴状遺構出土遺物（第27図15）
第２号竪穴状遺構出土遺物（第27図18）
第２号竪穴状遺構出土遺物（第27図19）
第２号竪穴状遺構出土遺物（第27図21）
第６号周溝出土遺物（第29図４）
第６号周溝出土遺物（第29図５）
図版11　第６号周溝出土遺物（第29図６）
第６号周溝出土遺物（第29図７）
第６号周溝出土遺物（第29図８）
第８号周溝出土遺物（第33図７）
第８号周溝出土遺物（第33図９）
第８号周溝出土遺物（第33図10）
第８号周溝出土遺物（第33図11）
第９号周溝出土遺物（第38図１）
図版12　第９号周溝出土遺物（第38図２）
第９号周溝出土遺物（第38図４）
第９号周溝出土遺物（第38図５）
第９号周溝出土遺物（第38図７）
第９号周溝出土遺物（第38図９）
第９号周溝出土遺物（第38図10）
第９号周溝出土遺物（第38図11）
図版13　第９号周溝出土遺物（第38図12）
第９号周溝出土遺物（第39図26）
第９号周溝出土遺物（第39図27・28・29）
第90号溝出土遺物（第50図６）
第10号周溝出土遺物（第43図16・17）
第10号周溝出土遺物（第43図９）
第10号周溝出土遺物（第43図10）
第10号周溝出土遺物（第43図11）
第77号土壙出土遺物（第52図１）
図版14　第77号土壙出土遺物（第52図２）
第77号土壙出土遺物（第52図３）
第77号土壙出土遺物（第52図５）
第77号土壙出土遺物（第52図６）
第77号土壙出土遺物（第52図７）
第77号土壙出土遺物（第52図10）
第171号土壙出土遺物（第53図４）
図版15　溝出土遺物(1)
溝出土遺物(2)
溝出土遺物(3)
図版16　第76図木製品類

遺構新旧対照表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SJ 2	SJ 20	SD 92		SK 66		SK 131		SK 196	SE 23
SJ 3	SJ 24	SD 93	欠番	SK 67		SK 132		SK 197	SE 24
SJ 4	SJ 2	SD 94		SK 68		SK 133		SK 198	SE 25
SX 1	SJ 4	SD 95		SK 69		SK 134		SK 199	SE 26
SX 2	SJ 18	SD 96		SK 70		SK 135		SK 200	SE 28
SR 6		SD 97		SK 71		SK 136			
SR 7		SD 98		SK 72		SK 137			
SR 8		SD 99		SK 73		SK 138			
SR 9	SD 89	SD 100		SK 74		SK 139			
SR 10	SD 91	SD 101		SK 75		SK 140			
SR 11	SR 9	SD 102		SK 76		SK 141			
SR 12	SD 93	SD 103		SK 77		SK 142			
SB 10		SD 104		SK 78		SK 143			
SB 11	SE 30・31	SD 105		SK 79		SK 144			
SE 15		SD 106		SK 80		SK 145			
SE 16		SD 107		SK 81		SK 146			
SE 17		SD 108		SK 82		SK 147			
SE 18	SE 27	SD 109		SK 83		SK 148			
SE 19	SE 29	SD 110	—	SK 84		SK 149			
SD 46		SD 111	—	SK 85		SK 150			
SD 47		SD 112	—	SK 86		SK 151			
SD 48		SD 113	—	SK 87		SK 152			
SD 49		SD 114	—	SK 88		SK 153			
SD 50		SD 115	—	SK 89		SK 154			
SD 51		SD 116	—	SK 90		SK 155			
SD 52		SD 117	—	SK 91		SK 156			
SD 53		SD 118	—	SK 92		SK 157			
SD 54		SD 119	—	SK 93		SK 158			
SD 55		SD 120	—	SK 94		SK 159			
SD 56		SD 121	—	SK 95		SK 160			
SD 57		SD 122	—	SK 96		SK 161			
SD 58		SK 32		SK 97		SK 162			
SD 59		SK 33		SK 98		SK 163			
SD 60		SK 34		SK 99		SK 164			
SD 61		SK 35		SK 100		SK 165			
SD 62		SK 36		SK 101		SK 166			
SD 63		SK 37		SK 102		SK 167			
SD 64		SK 38		SK 103		SK 168			
SD 65		SK 39		SK 104		SK 169			
SD 66		SK 40		SK 105		SK 170			
SD 67		SK 41		SK 106		SK 171			
SD 68		SK 42		SK 107		SK 172			
SD 69		SK 43		SK 108		SK 173			
SD 70		SK 44		SK 109		SK 174			
SD 71		SK 45		SK 110		SK 175			
SD 72		SK 46		SK 111		SK 176			
SD 73		SK 47		SK 112		SK 177	欠番		
SD 74		SK 48		SK 113		SK 178	欠番		
SD 75		SK 49		SK 114		SK 179	欠番		
SD 76		SK 50		SK 115		SK 180			
SD 77		SK 51		SK 116		SK 181	欠番		
SD 78		SK 52		SK 117		SK 182			
SD 79		SK 53		SK 118		SK 183			
SD 80		SK 54		SK 119		SK 184			
SD 81		SK 55		SK 120		SK 185	欠番		
SD 82		SK 56		SK 121		SK 186			
SD 83		SK 57		SK 122		SK 187			
SD 84		SK 58		SK 123		SK 188			
SD 85		SK 59		SK 124		SK 189			
SD 86		SK 60		SK 125		SK 190			
SD 87		SK 61		SK 126		SK 191	SE 18		
SD 88		SK 62		SK 127		SK 192	SE 19		
SD 89	欠番	SK 63		SK 128		SK 193	SE 20		
SD 90		SK 64		SK 129		SK 194	SE 21		
SD 91	欠番	SK 65		SK 130		SK 195	SE 22		

・旧番号に記入のないものは、新番号と同じ。

Ⅰ　発掘調査の概要

１．調査に至る経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。

都市・生活型公害、地球環境問題など、複雑・多様化する環境問題に適切に対応するため、環境科学の試験研究を充実させるとともに、環境学習の推進、環境情報の提供、環境面での国際貢献などの新たな要望に対応した環境科学の総合中核機関として、環境科学国際センターを騎西町に整備することとなった。

事業者より埋蔵文化財の所在についての照会があり、これを受けて県文化財保護課では、平成７年12月６日～８日に試掘調査を行った。事業用地内に縄文・古墳時代の遺構・遺物を確認し、小沼耕地遺跡の範囲が拡大することが確認され、工事計画上やむを得ず現状変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の３の規定による発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施する必要がある旨を回答した。

事業の計画変更が不可能であることから、造成地区について記録保存の措置を講ずることとした。試掘調査の結果をふまえて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団・環境科学国際センター整備室・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画・調査期間などについて協議した。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって平成８年４月１日から平成８年12月31日まで発掘調査を実施した。

なお、発掘調査届に対する指示通知番号は、次のとおりである。

平成８年４月22日付け　教文２―17号

（文化財保護課）

2．発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

小沼耕地遺跡の発掘調査は平成８年４月１日から平成８年12月31日まで実施した。調査面積は当初9,000㎡の予定であったが、調査の結果、東側に遺構及び遺物の散布が認められたため、調査の範囲を拡大した。最終的な調査面積は12,000㎡である。

４月　現地で事業者と打ち合わせを行い、調査範囲、排土の分別及び置き場等について確認する。その後現場事務所の建設及び調査区の囲柵工事を並行して行い、続いて表土掘削に入る。ある程度の面積を掘削し、補助員を入れて調査に入ったのは下旬からである。確認面が深いため表土掘削と並行して作業が進められた。

５月　調査区西側から遺構確認を行うが、土量が多いため表土の掘削が間に合わない。溝を中心に遺構を掘り始め、ある程度表土掘削が進んだ段階でまた遺構確認をする。前半に雨の日が多く、調査区が低く水が溜まりやすいため、水中ポンプを使っての作業となる。

６月　気象庁は、上旬の後半に入梅と発表。雨の後は、調査区内はぬかるんで一輪車が押せなくなることもしばしばであった。また、後半には排土置き場も水が溜まるようになり、ここにも排水溝を掘り巡らせることとなった。調査は西側の比較的高いところを中心に進められた。中世の溝を調査した後、順次古墳時代の遺構へと進んでいった。確認面は北側及び東側にかけて低くなっていた。遺構の多く検出されるのは、西側の高いところであり、低くなるにしたがって遺構は少ない状況であった。北側のやや低くなる部分では縄文土器が検出され、包含層があるものと思われた。

７月　調査は東及び北へと順次進められた。第２週目は台風５号の影響で相当量の雨が降り、周辺から調査区内へ水がさしてくるため１週間作業ができなかった。下旬には重機による表土掘削もほぼ終わりになり、調査区東側へと遺構確認を進めていった。

８月　天気が比較的安定し、調査は順調に進む。特に土壙を中心に井戸、溝および縄文の遺物包含層の調査を行う。この時点で溝40条、土壙130基を超える。下旬には十三菩提式の住居跡の調査に入る。

９月　調査区北西側はさらに下がることがわかり重機を入れて下げる。その部分の遺構確認を行い、溝、掘立柱建物などを検出する。中旬からは雨が多くなり作業のできない日が続く。特に下旬には台風17号の影響で調査区は全面にわたって水没した。従来まで使用していたポンプでは間に合わず、新たに６インチの水中ポンプを２台導入し排水に努めた。しかし、排水先の水路が狭く水田に水が溢れるなどの問題が生じ、復旧には１週間以上を要した。

10月　前半は遺構の調査及び実測を行う。後半は県道からの取り付け道路部分について表土掘削を行う。県道に接する部分については土取り或いは土の入れ替えが行われたらしく、表土から２ｍ以上まで破壊されていた。それより奥は遺存状態が比較的良く、中世の溝、古墳時代の遺構が検出された。

11月　道路部分について、中世の溝から掘り始める。溝の覆土は粘質で水が湧くため作業効率が悪い。古墳時代の遺構からは、多くの破片が出土したため遺物については点を取って調査した。

12月　道路部分の実測を行い、埋め戻しをする。建物部分については、旧石器の調査を行ったが遺物等は確認できなかった。残りの遺構の実測を行い、遺物、遺構図の確認・整理を行って全ての調査を終了した。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成事業は、平成11年４月８日から平成11年12月28日まで実施した。４・５月は遺物の接合・復原を行い、作業の済んだものから遺物実測、拓本取りを行った。続いて実測図のトレース、遺物写真撮影を行い８月半ばまでかかった。並行して遺構実測図、写真等の記録図面類を整理し、第２原図を作成してトレースを行った。７月から版下の図版組みを始め、原稿執筆、割付を行い９月末には割付を完成した。その後、入稿し３回の校正を行って、12月末に本書の印刷を終了・刊行した。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)　**発掘調査**（平成８年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	富田真也
専務理事	吉川國男
常務理事 兼管理部長	稲葉文夫
理事兼調査部長	梅沢太久夫

〈管理部〉

庶務課長	依田　透
主査	西沢信行
主任	長滝美智子
主任	菊池　久
専門調査員 兼経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二

〈調査部〉

調査部副部長	高橋一夫
調査第二課長	大和　修
主査	元井　茂
主査	濱野美代子
主任調査員	木戸春夫

(2)　**整理事業**（平成11年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事 兼管理部長	広木　卓

〈管理部〉

庶務課長	金子　隆
主査	田中裕二
主任	江田和美
主任	長滝美智子
副部長 兼経理課長	関野栄一
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池　久

〈資料部〉

資料部長	高橋一夫
専門調査員 兼資料部副部長	石岡憲雄
専門調査員	市川　修
統括調査員	木戸春夫

II　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

小沼耕地遺跡は、北埼玉郡騎西町大字上種足４番889番地他に所在する。騎西町は埼玉県北東部に位置しており、北東を加須市、西を行田市と川里村、南を鴻巣市と菖蒲町に接している。人口は約21,000人（平成11年６月末現在）で、田園風景豊かな地域であり、近年は首都圏のベッドタウンとしても発展しつつある。

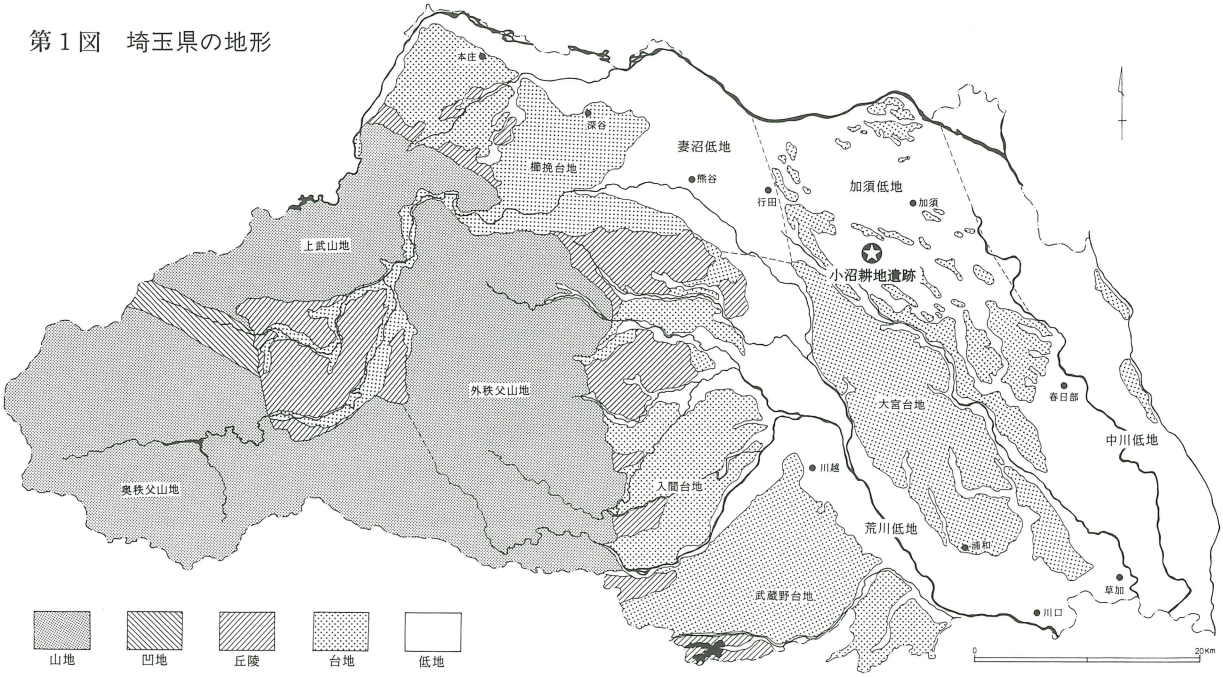
遺跡は騎西町の南部にあたり、地形的には大宮台地の北辺部、加須低地に位置している。周辺地域は荒川及び利根川の両河川、及びそれらの支流が乱流しており、台地は北西から南東方向に細長く、或いは小さい島状に侵食されている。また自然堤防も数多く形成されている。この地域は、関東造盆地運動による地盤の沈降現象も見られる上、河川の氾濫土に厚く覆われており、現状では水田が大きな面積を占め、台地と低地の区分が明瞭ではなくなっている。近隣の行田市や羽生市などの利根川右岸においては、水田下に数メートル埋没した古墳群が発見されるなどの例も報告されている。小沼耕地遺跡も、このような低地に埋没した洪積台地上に立地している。遺跡北側には騎西町南部を南東流する見沼代用水（星川）が、南側には野通川が流れている。遺跡の標高は約13ｍである。

2．周辺の遺跡

ここでは、小沼耕地遺跡の位置する加須低地を中心に、周辺の遺跡を概観する。

旧石器時代では、従来から若干の資料が採集されてきたが、この周辺は河川の氾濫土に厚く覆われているため、遺跡の所在を確認することが難しかった。しかし、近年の発掘調査によって良好な資料が検出されるようになってきた。埋没台地上に立地している鴻巣市中三谷遺跡では、石器集中ブロックが２地点検出され、ナイフ形石器や切出形石器等が出土している。また、大宮台地北縁部に位置する鴻巣市新屋敷遺跡では、岩宿II期の石器集中ブロック６地点、礫群10基が検出されている。石器集中ブロックからはナイフ形石器や角錐状石器等が出土しており、その総数は569点に上る。さらに、礫群を多数伴う例は荒川低地を挟んで隣接す

第１図　埼玉県の地形



第２図　地形分類図

利根川
羽生
加須
中川
行田
旧忍川
忍川
騎西
川里
小沼耕地遺跡
野通川
菖蒲
荒川
柴山沼
元荒川
北本
市野川
0
2Km
1:100000
火山灰台地
谷底平野
自然堤防
現河道
台地谷
旧流路
被覆砂丘
氾濫原
扇状地

る武蔵野台地でも良好な比較資料が得られておらず、大宮台地全体の中でも有数の遺跡として注目すべき遺跡となっている。

縄文時代では、現状として遺跡数が前期に少なく、中期後半から後期にかけて増加する傾向が見られる。

前期では、若干の土器を伴う遺跡が知られる程度で、低地部での遺構の検出例は少ないが、行田市馬場裏遺跡からは関山式期の住居跡が検出されており、周辺では稀少な例として注目される。騎西町私市城跡の調査では、花積下層式から諸磯b式までが確認されている。鴻巣市根際遺跡では、前期末葉の十三菩提式土器片の出土が報告されている。

中期から後期にかけては、大宮台地北縁部に遺跡数が増加していく傾向が認められる。荒川に面した舌状台地上に立地する鴻巣市赤台遺跡は、加曽利ＥＩ式を中心として、中期から後期にかけての良好な土器群が出土しており、加曽利EIV式の土器を伴う柄鏡形住居跡が検出されている。埋没台地上に立地する菖蒲町菖蒲城跡からは加曽利EIII式が出土している。同じく埋没台地上に立地する騎西町修理山遺跡では、中期から後期にかけての住居跡等が多数の土器と共に検出されており、加曽利EIII～IV式と、堀之内II式の二時期が主体となっている。特に堀之内II式の土器群は、精製土器と粗製土器が一括して出土しており、該期の土器組成を示す良好な資料といえる。

後・晩期では、周辺地域の拠点的な遺跡が調査されている。中三谷遺跡では堀之内Ｉ～II式期の住居跡や土壙等をはじめ、安行IIIａ式期の住居跡を検出している。ここでは加曽利B式土器が出土しておらず、後期中葉から晩期初頭にかけて集落形成が断絶される時期があったと考えられている。川里村赤城遺跡も埋没台地上に立地するもので、加曽利B式～安行Ｉ・II式期を中心とした大規模な集落跡が確認されている。祭祀遺物集中地点からは大量の土偶や耳飾が出土しており、この中に遮光器土偶も含まれていることから、東北地方の影響を少なからず受けていると考えられる。大宮台地北端部に立地する桶川市後谷遺跡では、後期後半の住居跡が検出されると共に、加曽利Ｂ～安行IIIｃ式土器が出土している。さらに、台地上の集落から水辺に下りるための木道や杭列といった特殊遺構が良好な状態で検出されている。菖蒲町地獄田遺跡も埋没台地の縁辺部に位置しているが、晩期安行式土器を中心として、土偶・土版・石棒といった各種の土製品・石製品が出土している。自然堤防上に立地する羽生市発戸遺跡は、安行IIIａ～IIIｃ式を中心とした時期の土器が出土しており、関東地方では類例の少ない土面も発見されている。この地域の後・晩期遺跡からは、何らかの祭祀を執り行う遺構や遺物が検出されており、新たに祭祀儀礼を必要とする社会が形成されていることを示すものと思われる。

弥生時代では、加須低地周辺では遺跡はほとんど知られていないが、妻沼低地の自然堤防上に立地する深谷市上敷免遺跡では、縄文時代晩期終末から弥生時代初頭にかけての土器が出土している。とりわけ遠賀川式と考えられている土器は、県内初出の例となっており、その存在意義は重要である。

中期では、大宮台地南部や櫛挽台地・本庄台地、秩父盆地付近に、それぞれ比較的まとまって遺跡が分布する傾向が見られるが、低地部では妻沼低地に集中して確認されている。熊谷市池上遺跡、横間栗遺跡、行田市小敷田遺跡、深谷市上敷免遺跡、妻沼町飯塚遺跡等はいずれも自然堤防上に立地しており、須和田期の再葬墓が検出されている。このうち池上遺跡では環濠と見られる溝や、多量の炭化米が出土した住居跡等も確認されている。これらの遺跡は位置的にも近く、稲作を生活基盤とした、ある種の小文化圏を形成していたと考えることもできる。

後期では、県内の遺跡数が急増するが、低地部で確認されている遺跡は少ない。墓制としては、中期で盛行した再葬墓が衰退し、代わりに方形周溝墓が出現する。すでに小敷田遺跡においては、中期の段階で再葬墓から方形周溝墓への移行が見られる。吹上町袋・台遺跡は自然堤防上に立地するが、第３号方形周溝墓は前野町併行期の土器を伴っており、古墳時代前期に継

第３図　周辺の遺跡分布図

続する様相が明らかになっている。

古墳時代前期から中期では、低地部においても遺跡数が増加する。騎西町修理山遺跡では方形周溝墓３基が検出されており、そのうちの１基には中央部に長方形の土壙が検出され、埋葬施設である可能性も指摘されている。行田市高畑・武良内・鴻池の各遺跡は自然堤防上に立地し、竪穴住居跡及び方形周溝墓等が検出されている。集落跡としては、鴻巣市新屋敷遺跡Ｃ区で五領式終末から和泉式期にかけての竪穴住居跡が17軒調査されており、比較的規模の大きな集落が形成されている。さらに近年、埋没台地上に立地する羽生市大道遺跡においては、一次調査だけでも15軒の古墳時代前期の住居跡が検出されており、加須低地における該期の様相が明らかになりつつある。

後期になると、古墳が各地に多数造られるようになるが、中でも行田市埼玉古墳群は関東屈指の大型前方後円墳を有する古墳群として広く知られている。この周辺には、菖蒲町栢間古墳群や羽生市樋鑓川古墳群、鴻巣市安養寺古墳群といった小型の円墳群や、菖蒲町東浦古墳や行田市真名板高山古墳等の中・小型の前方後円墳が所在している。新屋敷遺跡では、小円墳を中心とした総数100基を超える大規模な古墳群が調査されている。集落跡では、行田市築道下遺跡において多くの住居跡や掘立柱建物跡が検出されており、行田市小針遺跡、吹上町袋・台遺跡などでも、住居跡や掘立柱建物跡等が検出されている。生産遺跡としては、鴻巣市生出塚埴輪窯跡が挙げられる。生出塚産の埴輪は、埼玉古墳群をはじめとして、遠くは千葉県市原市山倉１号墳等にも供給されている可能性が指摘されている。小沼耕地遺跡においても、前方後円墳である第１号墳で、生出塚産と考えることができる埴輪が出土している。

奈良・平安時代は、古墳時代に比べて遺跡数はさほど多くないが、注目すべき大規模な遺跡が存在する。新屋敷遺跡では、９世紀後半から10世紀初頭を中心とした時期の100軒以上の住居跡が検出されており、小鍛冶跡も確認されるなど、元荒川流域における中核的な集落と考えられる。自然堤防上に立地する加須市水深遺跡では、奈良から平安時代にかけての住居跡や掘立柱建物跡、65基に及ぶ土師器焼成遺構や土器捨て場等が検出されており、武蔵国内における北武蔵型坏や武蔵型甕といった土師器の生産と流通を検討する上で、重要な遺跡となっている。

中世以降では、城館跡の所在が以前から知られているが、最近の発掘調査によって詳細な実態が明らかになりつつある。平安末期から鎌倉時代にかけての騎西町周辺では、武蔵七党に属した道智氏と多賀谷氏の勢力下にあって、建久元年（1190）源頼朝上洛の際には、道智次郎がこれに従っている。小沼耕地遺跡の所在する騎西町種足周辺は、古くは「種垂」と記され、13世紀末頃は伊賀氏の所領であると考えられている。また戦国時代には小沼耕地遺跡の南側一帯に、菖蒲城主佐々木氏が築いた種垂城の所在が想定されている。騎西町根古屋に所在する私市城（騎西城）は、文献上の初見は15世紀といわれ、永禄６年（1563）に小田助三郎の守る私市城は上杉謙信により攻め落とされている。その後松平康重、大久保忠常らが城主となり、寛永９年（1632）廃城になっている。この私市城や私市城武家屋敷跡の発掘調査では、13世紀代の龍泉窯系青磁から18世紀代までの多種多様な陶磁器類が出土している。新屋敷遺跡では、13世紀から17世紀を中心とした時期の多数の陶磁器類が出土しており、特に江戸時代の遺構は、武士階級の屋敷地に関連するものであると考えられている。また中三谷遺跡では常滑系の甕破片が多数出土している他、若干の舶載陶磁器の出土が報告されている。菖蒲城跡においては、多数の国産陶磁器類に加え、中国陶磁の赤絵破片も出土している。

小沼耕地遺跡や上種足三番遺跡における中近世遺構の性格については、種垂城や近隣の私市城などとの関連も念頭に置きながら検討する必要があると思われる。

Ⅲ　遺跡の概要

小沼耕地遺跡は北埼玉郡騎西町上種足地内に位置する。遺跡の立地する地形は自然堤防及び低地に分類されているが（第２図)、調査の結果ではいわゆる埋没ローム上に立地していることがわかっている（田中1991)。加須低地は関東造盆地運動による沈降の進んでいる所であり、沖積層の下から遺跡が検出されるのが特徴となっている。

遺跡の現地形は星川の後背湿地にあたり、窪地状に低くなっている。現状は水田で、第２～４図・巻頭図版１でも明らかなように、周囲を集落を乗せる自然堤防によって囲まれているのが読み取れる。地表面での標高は約13ｍである。

本遺跡で人間の活動の痕跡が辿れるのは、今回の調査によって撚糸文系土器が出土したことから、縄文時代早期まで遡ることとなった。以後、古墳時代と中世にその痕跡が最も良好に残っている。遺跡の調査は、過去４回行われている。最初の調査は昭和63年から平成元年に、当事業団が県立騎西養護学校の建設に伴い行っている。次いで平成５年及び平成７年には騎西町が埼玉中央学園の建設に伴い調査している。平成８年には、本報告の環境科学国際センターの建設に伴い調査している。さらに、平成10年には、南に隣接する上種足三番遺跡が騎西町によって調査されている。第５図は、騎西町教育委員会の協力を得て、今までに調査された遺構を地形図に嵌め込んだものである。これらの調査によって小沼耕地遺跡の全体像がかなり明らかになってきたと言える。

以下に、各調査の概要を記す。

昭和63・平成元年の調査

調査面積は10,000㎡である。

検出された遺構は、古墳時代前期の方形周溝墓５基、住居跡１軒、古墳時代後期の前方後円墳１基、円墳１基、鎌倉時代の基壇状遺構１、掘立柱建物跡９棟、その他に溝45条、井戸14基、土壙31基と報告されている。

方形周溝墓とされたもののうち、２基に方台部に４本柱穴（うち１本は溝により壊されていた）があり、位置関係から方形周溝墓に伴う可能性が非常に高いとされ、「方形周溝墓の葬送儀礼の中で、盛り土以外の上部構造を持つ一例」(田中：1991)として報告されている。

前方後円墳は主軸長約39ｍである。前方部は西に向き著しく細く、断続的ながらも二重の周溝を持つという特徴がある。

中世では、基壇状の遺構を囲む溝の造り替えから最低３時期の変遷が捉えられている。また、掘立柱建物跡の柱穴には礎板が残っているものもあった。

遺物は五領期の高坏・器台・甕・壺等、古墳からは円筒埴輪の他、人物・水鳥・猪・馬・盾などの形象埴輪が多く出土している。これらの埴輪の中には、生出塚埴輪窯跡で生産されたものもあることが指摘されている。

中世の遺物は青磁の他、常滑などの陶器片が多く、下駄・曲げ物などの木製品も出土した。

平成５・７年の調査

騎西養護学校の西側に隣接する。調査面積は2,500㎡である。

検出された遺構は、古墳時代前期の周溝(註１)、住居跡、中世の溝などがある。

周溝は平成元年の調査で検出されたものと類似しており、１箇所乃至複数箇所が切れ、中に４基のピットを持つものが見られる。住居跡も、周囲に断続的に溝が廻っているようである（註２)。

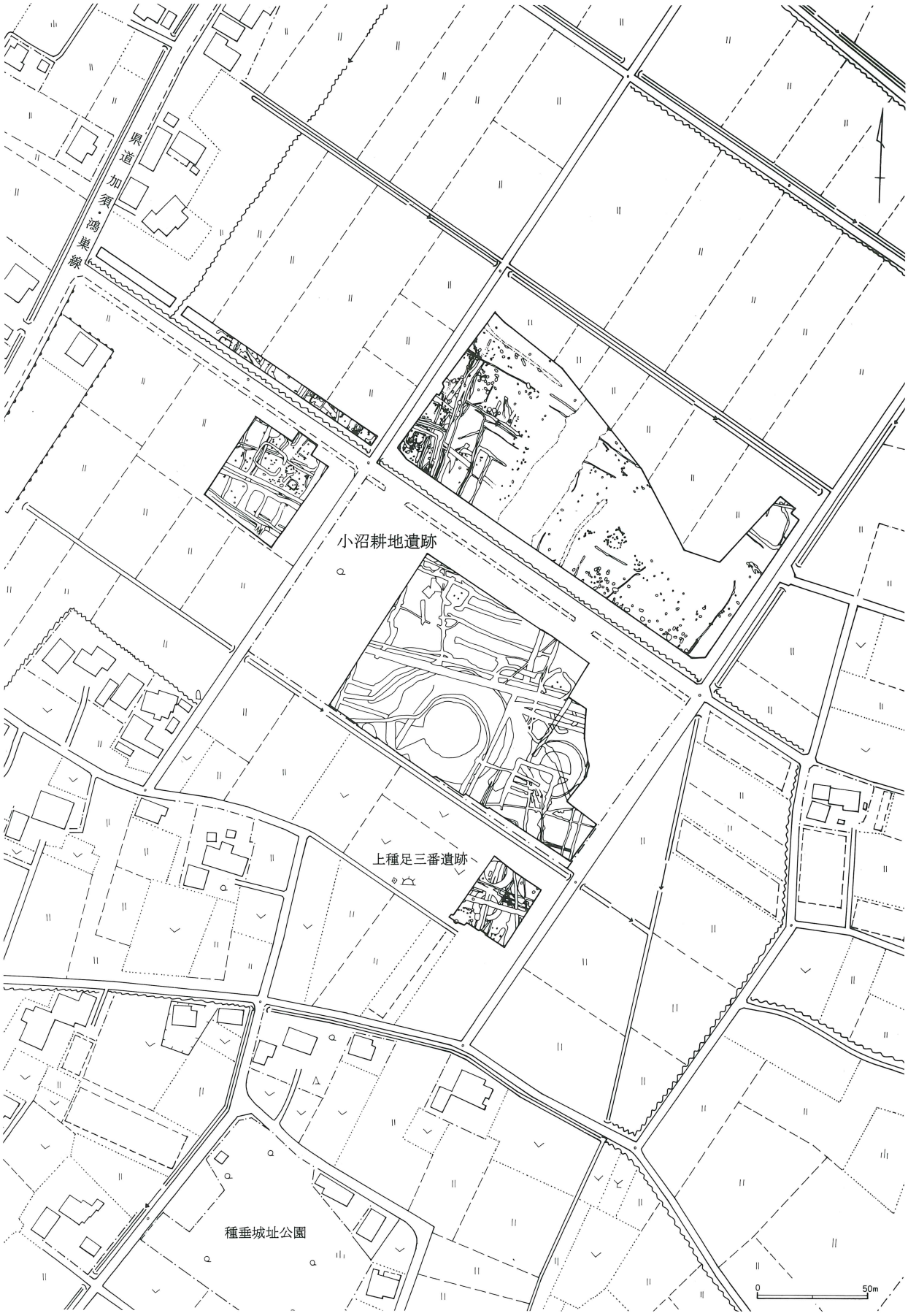
平成10年の調査

上種足三番遺跡で、988㎡を調査している。調査した部分は、昭和63・平成元年の調査区の南に隣接しており、遺跡名は別になっているが内容的には同一の遺跡である（註３)。

検出された遺構は、古墳時代後期の円墳を含む古墳５基、中世の掘立柱建物跡、溝状遺構、土壙、井戸状遺構などで、中世前半と中世後半～近世に分けられて

第４図　遺跡周辺の地形

第５図　関連遺跡遺構分布図



いる。

円墳のうち１基は、埴輪を伴うもので、鴻巣市生出塚窯跡のものと共通性が指摘されている。

遺物は、円筒埴輪の他に土師器坏が、中世では、青磁、常滑、古瀬戸の他に12世紀代の白磁水注が出土しており注目される。他には、加曽利Ｅ式の縄文土器片や、近世の志野小皿・かわらけ・下駄・漆碗等が出土している（島村1999）。

今回の調査

今回の調査区は遺跡の一番北側にあたる。調査面積は12,000㎡である。遺構は埋没ローム層上面で検出した。検出面の地形は、道路部分を含む西側及び東側が高く、中央部から北側にかけて低くなる。北側の調査区外にかけてすり鉢状に低くなるのは、現地形と一致する。現在遺跡は、表層地形図で見る限り低地に区分され、南東方向に野通川に向かって開いている。遺跡北側には星川に沿って自然堤防が発達している。しかし、周辺の沖積化が進んだのは中世以降に顕著であり、それ以前は低地とある程度の比高差を持つ台地であったと思われる。

層位は第６図に示したとおりである。柱状図３の第Ⅷ層は腐植質土で層厚が厚く、また、Ⅳ層は葉理が発達しており、この時期に水の影響を強く受け、沖積が進んだことを示している。

今回検出された遺構は、縄文時代前期末の住居跡１軒、縄文時代前期を中心とした遺物包含層、古墳時代中期の住居跡４軒、竪穴状遺構２基、周溝５基、掘立柱建物跡１棟、井戸跡２基、溝跡７条、土壙４基、中世以降の溝跡70条、掘立柱建物跡１棟、井戸跡３基、土壙は時期不明のものを含めて168基が検出された。この他に、風倒木痕が多数検出された。

先土器時代についてはテストピットを設定して調査したが、遺物は検出されなかった（第６図）。

縄文時代の遺物は平成元年の調査では破片がわずかに検出されたのみで、遺構は今回の調査で初めて検出された。住居跡と考えられる遺構は前期末の十三菩提式期のものである。この地域において該期の遺構・遺物は、検出例が殆どないため貴重な資料である。包含層は調査区東側と西側に検出された。調査区中央の低い部分には遺物の散布は認められず、周辺のやや高い部分から出土している。ただし、遺物量は少なく散布が認められるというものであった。遺物は、前期関山式期を中心として、早期撚糸文系土器から後期堀之内Ⅱ式まで見られる。

古墳時代の周溝としたものは、いわゆる「周溝を持つ建物跡」とされるものと共通点が多い。平成元年度に調査されたものは「方形周溝墓」と報告されているが、今回調査されたものと同じ性格のものも含まれると考えられる。住居跡としたものにも、或いは建物跡と捉えられそうなものも含まれる。遺物は高坏・甕・壺等が出土している。第３号住居跡からは勾玉が出土した。第77号土壙からは高坏・甕等がまとまって出土した。

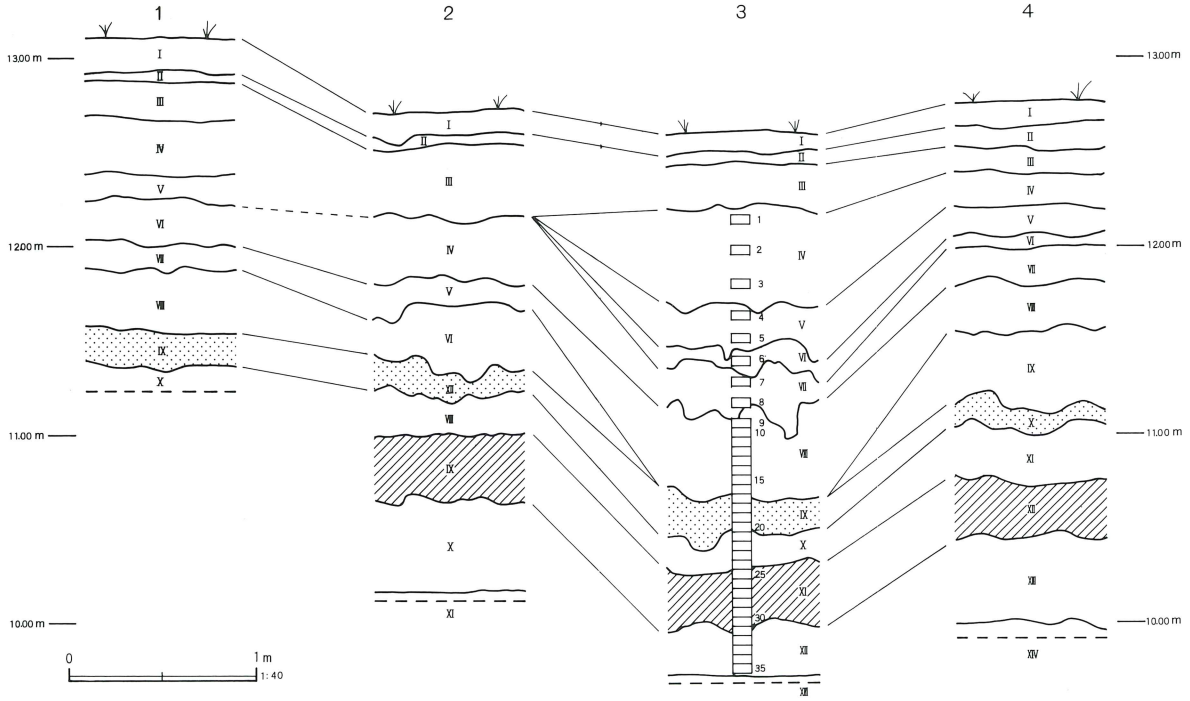
中世の遺構は溝が中心である。重複が激しく、軸がずれるものが見られ、時期差があることを示している。遺物は常滑甕、青磁碗などのほかに、溝跡から木片、骨片などが出土した。

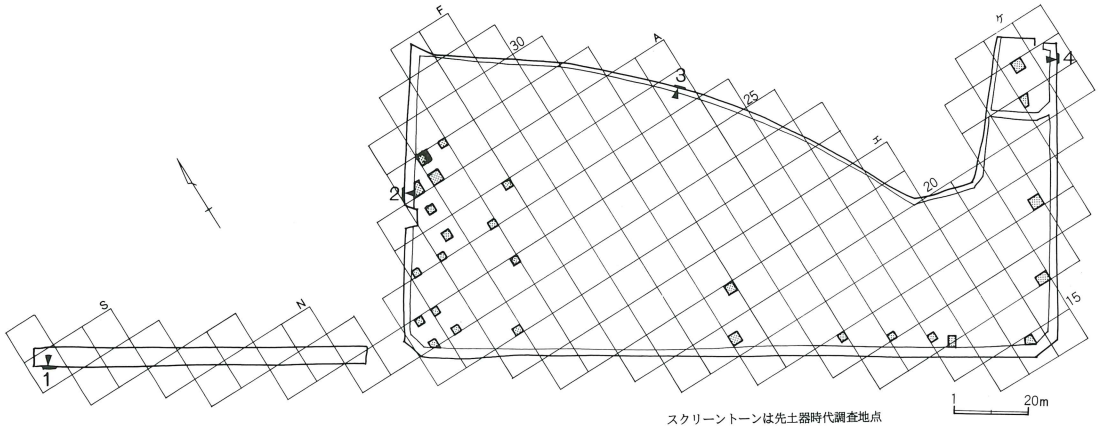
風倒木痕は大小87基検出された。状態の良いもの２基について半裁調査したが、ひとつは木根が遺存しており、放射性炭素による年代測定の結果、古墳時代前期頃という結果が得られた。

遺跡周辺の環境復原の試みとして、科学分析を実施した。その結果、古墳時代頃までは台地地形を保っており、河川との比高差もあったと考えられ、沖積が進んだのは中世以降というこれまでの周辺遺跡での調査成果についても追認する結果が得られた。

（註１）報告書が出されていないため遺構の性格については断定できないが、ここでは周溝としておく。
（註２）騎西町島村氏の御教示による。
（註３）「小沼耕地遺跡」と「三番遺跡」は本来同一の遺跡であるが、種々の事情から、町教委では養護学校の南側の水路から北側を「小沼耕地遺跡」、南側を「三番遺跡」と呼称している。

第６図　基本土層図





スクリーントーンは先土器時代調査地点

基本土層

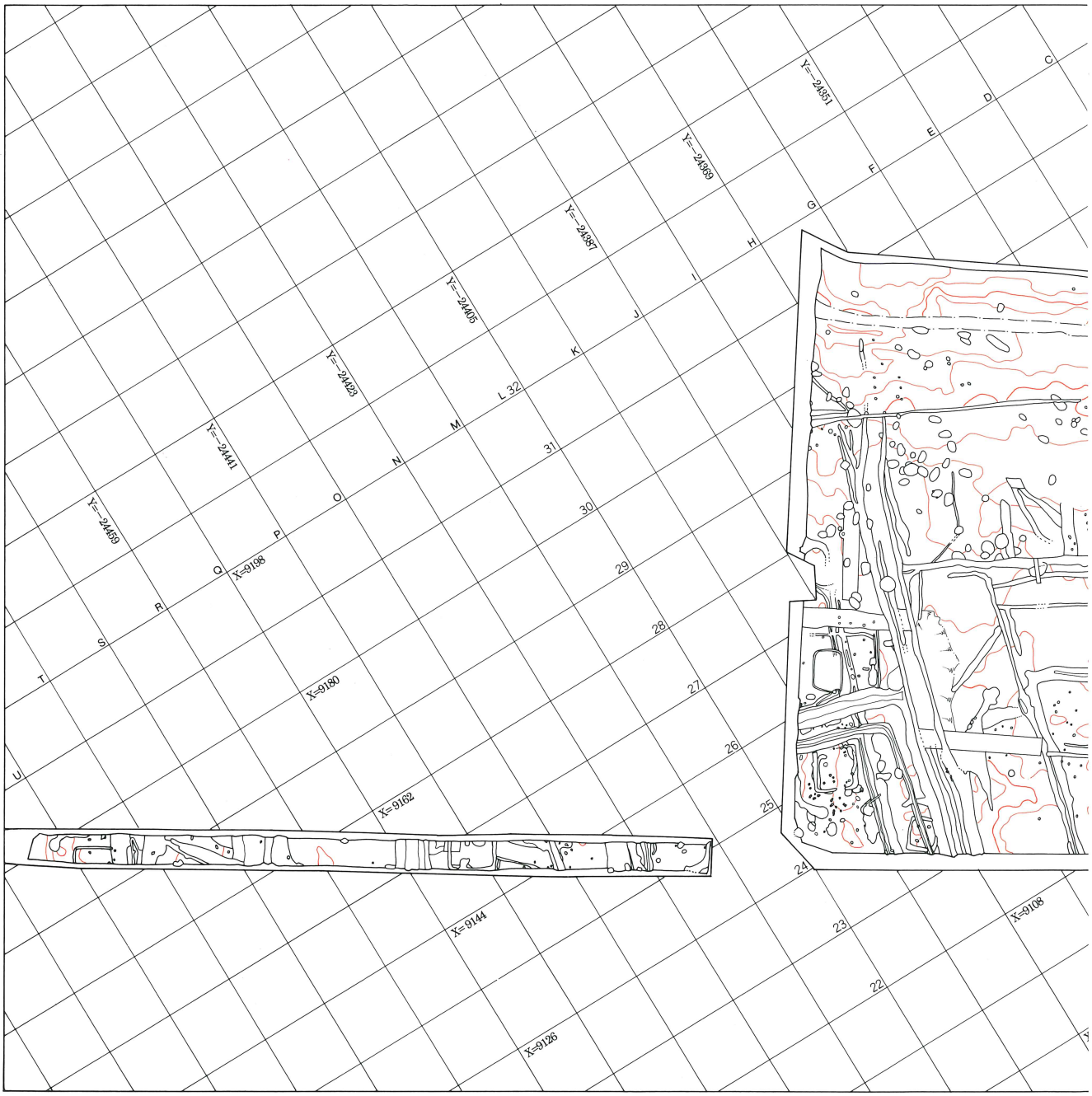
1
- Ⅰ　灰色土　　しまり強　粘性あり　耕作土、浅間A含む。
- Ⅱ　灰色土　　しまり強　粘性あり　浅間A少量含む。
- Ⅲ　白灰色土　しまり強　粘性あり　酸化鉄　Mn少量含む。
- Ⅳ　灰色土　　しまり強　粘性あり　酸化鉄、Mn含む。
- Ⅴ　暗褐色土　しまり強　粘性あり　酸化鉄、Mn少量含む。
- Ⅵ　暗褐色土　しまりあり　粘性あり　酸化鉄、粘質土ブロック多量含む。
- Ⅶ　黒色土　　しまり弱　粘性弱
- Ⅷ　暗褐色土　しまりあり　粘性あり
- Ⅸ　ソフトローム
- Ⅹ　暗黒褐色土　ハードローム

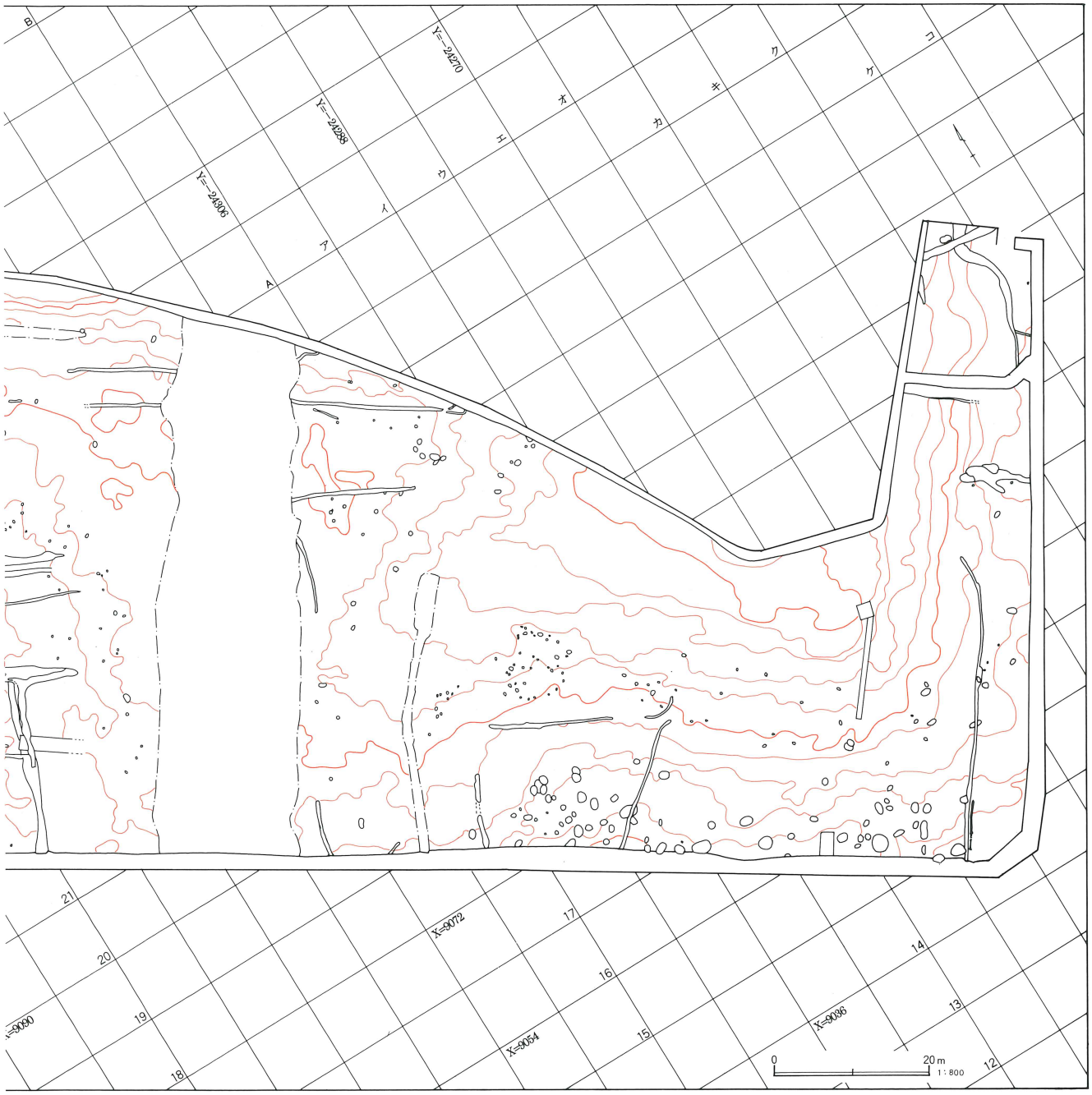
3
- Ⅰ　灰色土　　しまり強　粘性あり　耕作土、浅間A、酸化鉄少量含む。
- Ⅱ　灰色土　　しまり強　粘性あり　浅間A少量含む。
- Ⅲ　黄灰色土　しまり強　粘性あり　Mn、酸化鉄多量含む。
- Ⅳ　黄灰色土　しまりあり　粘性あり　葉理発達している。
- Ⅴ　黄灰色土　しまりあり　粘性あり　浅間B微量含む。
- Ⅵ　オリーブ灰色　しまりあり　粘性あり
- Ⅶ　黄灰色土　しまりあり　粘性あり　炭化粒微量、酸化鉄少量含む。
- Ⅷ　黒色土　　しまりなし　粘性なし　有機質多量含む。
- Ⅸ　灰白色土　ソフトローム
- Ⅹ　黄褐色土　ハードローム
- ⅩⅠ　暗褐色土　黒色帯
- ⅩⅡ　黒褐色土　黒色帯
- ⅩⅢ　暗灰黄色土　　粘質土

2
- Ⅰ　灰色土　　しまり強　粘性あり　耕作土、浅間A、酸化鉄少量含む。
- Ⅱ　灰色土　　しまり強　粘性あり　浅間A少量含む。
- Ⅲ　黄灰色土　しまり強　粘性あり　Mn、酸化鉄多量含む。
- Ⅳ　黄灰色土　しまりあり　粘性あり　炭化粒微量含む。
- Ⅴ　黒色土　　しまり弱　粘性弱　有機質多量含む。
- Ⅵ　灰黄褐色土　しまりあり　粘性あり　酸化鉄、植物根含む。
- Ⅶ　明黄褐色土　ソフトローム
- Ⅷ　にぶい黄褐色土　ハードローム
- Ⅸ　暗褐色土　　黒色帯
- Ⅹ　黒褐色土　　黒色帯
- ⅩⅠ　暗灰黄色土

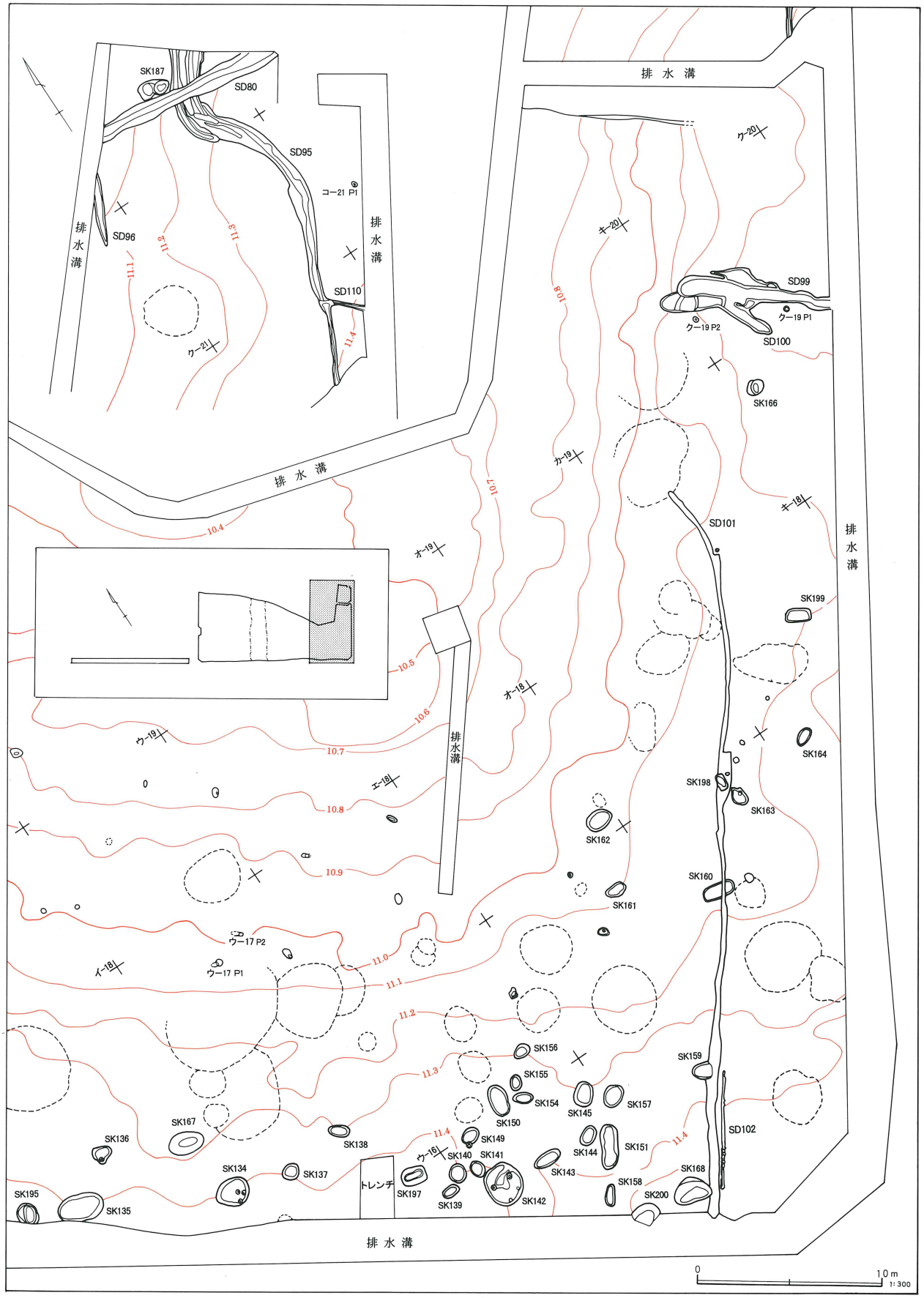
4
- Ⅰ　灰色土　　しまり強　粘性あり　耕作土、浅間A、酸化鉄少量含む。
- Ⅱ　灰色土　　しまり強　粘性あり　浅間A少量含む。
- Ⅲ　黄灰色土　しまり強　粘性あり　Mn、酸化鉄多量含む。
- Ⅳ　黄灰色土　しまり強　粘性あり　葉理発達している。
- Ⅴ　黄灰色土　しまりあり　粘性あり　浅間B微量含む。
- Ⅵ　オリーブ灰色土　しまりあり　粘性あり
- Ⅶ　黄灰色土　しまりあり　粘性あり　炭化粒微量、酸化鉄少量含む。
- Ⅷ　黒色土　　しまりなし　粘性なし　有機質多量含む。
- Ⅸ　灰黄褐色土　しまりあり　粘性あり　酸化鉄、植物根含む。
- Ⅹ　灰白色土　ソフトローム
- ⅩⅠ　黄褐色土　ハードローム
- ⅩⅡ　暗褐色土　黒色帯
- ⅩⅢ　黒褐色土　黒色帯
- ⅩⅣ　暗灰黄色土

第７図　遺構全測図

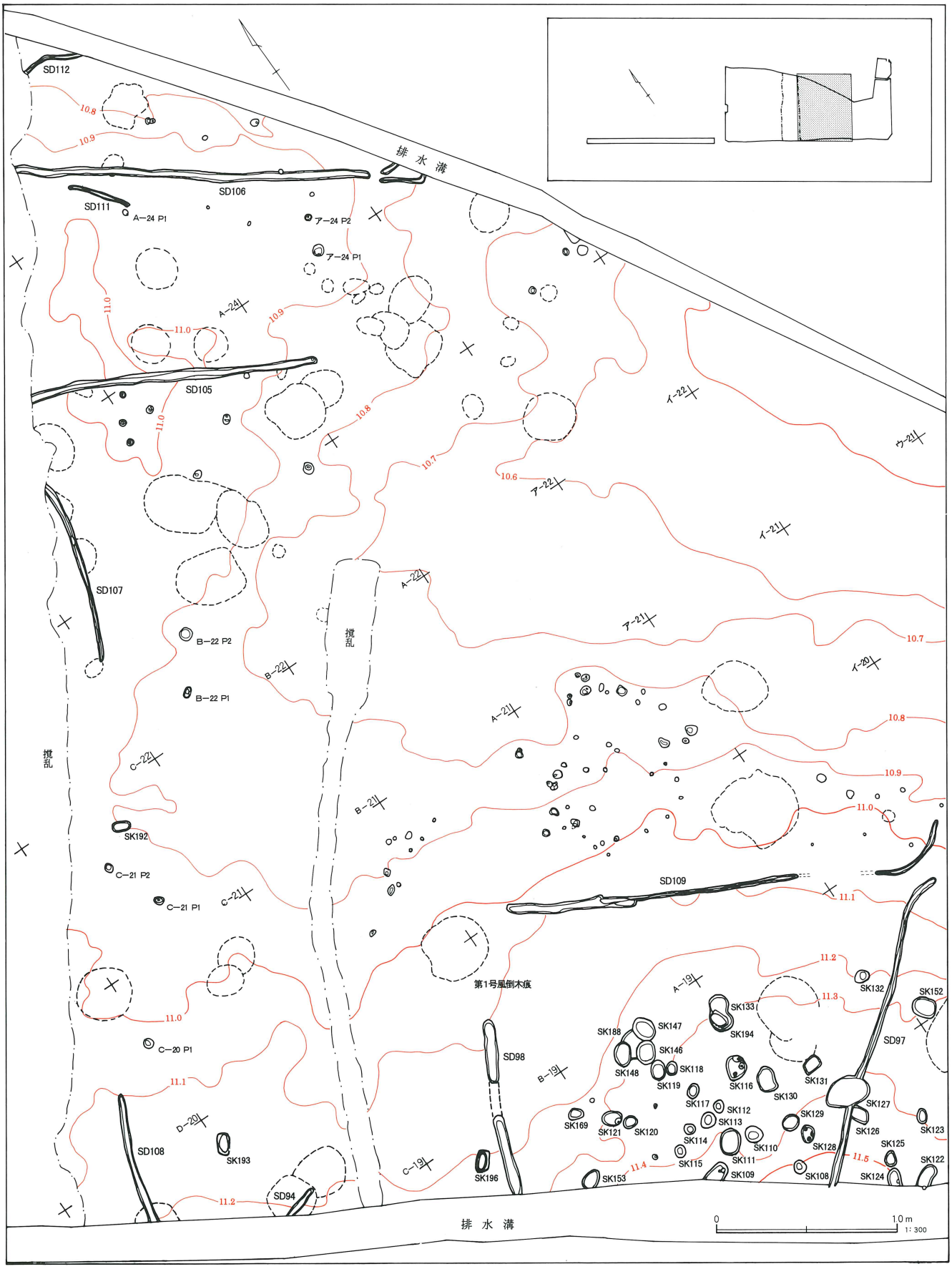

Y=-24459
Y=-24441
Y=-24423
Y=-24405
Y=-24387
Y=-24369
Y=-24351
X=9198
X=9180
X=9162
X=9144
X=9126
X=9108
U
T
S
R
Q
P
O
N
M
L 32
K
J
I
H
G
F
E
D
C
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22


B
A
Y=-24306
Y=-24298
Y=-24270
ト
チ
リ
ヌ
ル
ヲ
ワ
カ
ヨ
タ
レ
ソ
ツ
ネ
ナ
ラ
ム
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
X=9090
X=9072
X=9054
X=9036
0
20m
1:800

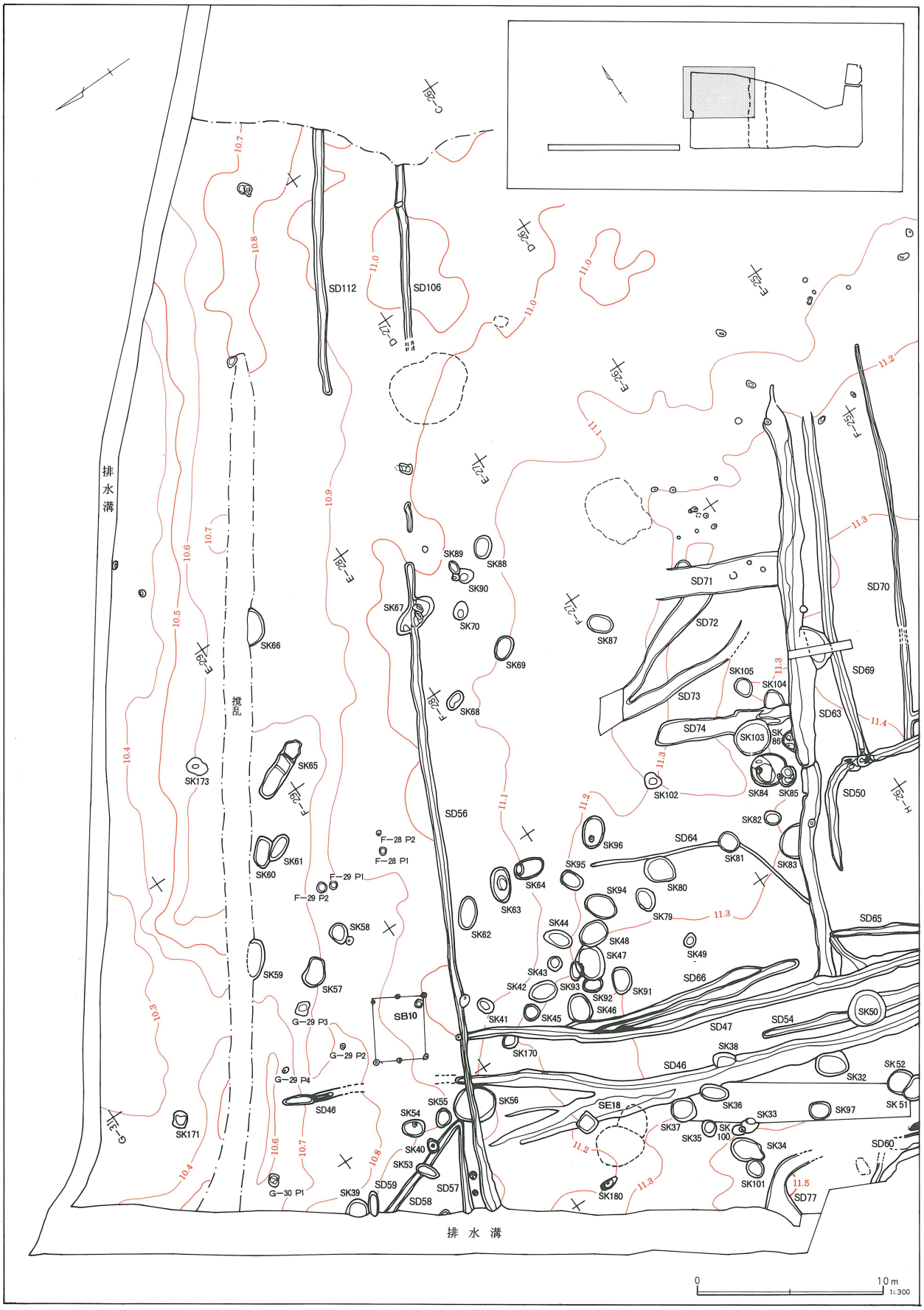
第８図　遺構配置図(1)


SK187
SD80
SD95
コ−21 P1
排水溝
SD96
SD110
ウ−21
排水溝
排水溝
ク−20
キ−20
SD99
ク−19 P2
ク−19 P1
SD100
SK166
カ−19
キ−18
SD101
排水溝
SK199
オ−19
オ−18
ウ−19
エ−18
排水溝
SK164
SK198
SK163
SK162
SK160
SK161
ウ−17 P2
イ−18
ウ−17 P1
SK156
SK159
SK155
SK154
SK145
SK157
SK150
SK167
SK136
SK138
SK149
SK144
SK151
SD102
ウ−16
SK140
SK141
SK143
SK168
SK134
SK137
トレンチ
SK197
SK158
SK200
SK195
SK135
SK139
SK142
排水溝
0
10m
1:300

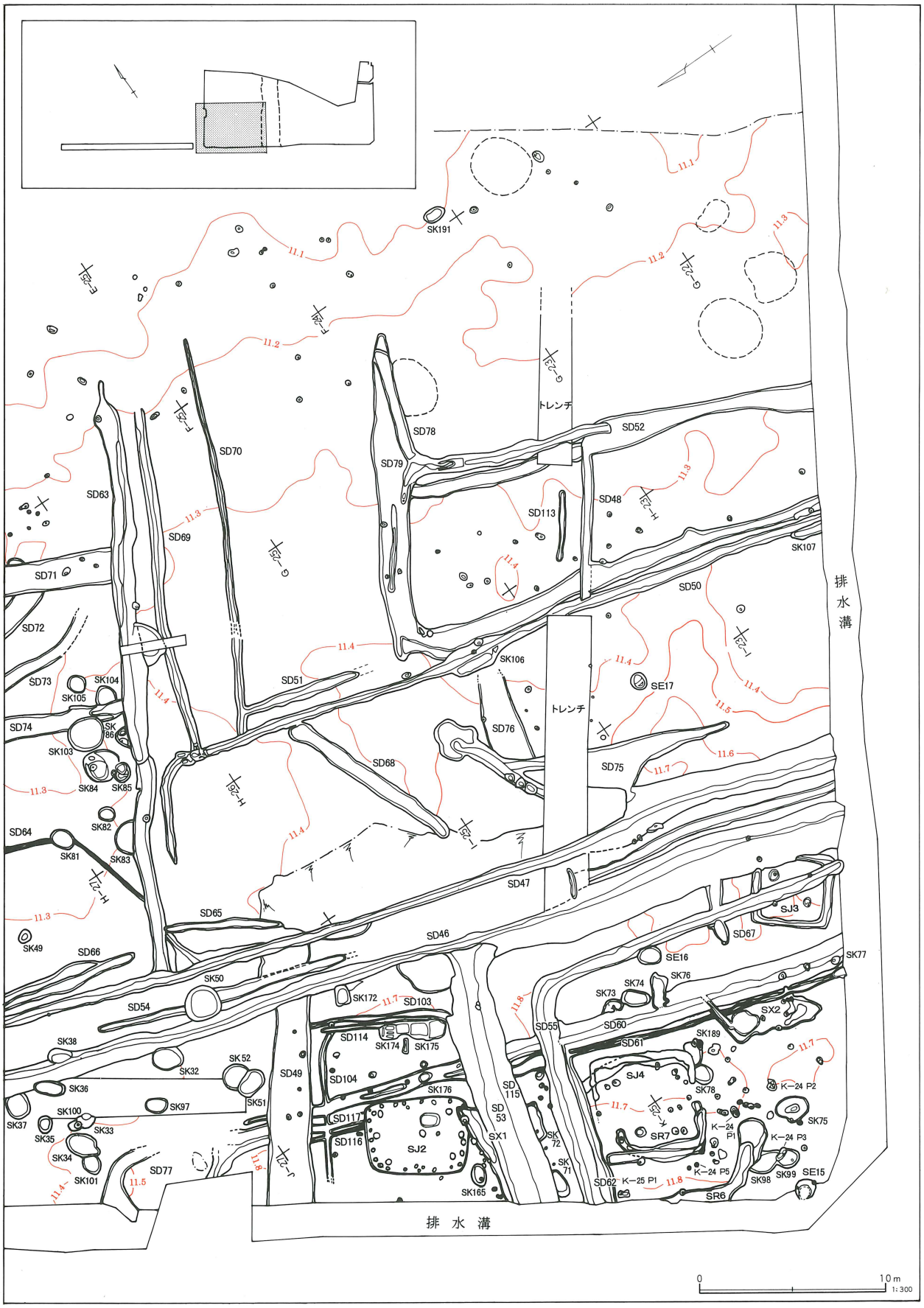
第９図　遺構配置図(2)


SD112
SD106
SD111
A−24 P1
ア−24 P2
ア−24 P1
SD105
SD107
B−22 P2
B−22 P1
SK192
C−21 P2
C−21 P1
C−20 P1
SD108
SK193
SD94
SD98
SK196
第1号風倒木痕
SD109
SK132
SK152
SD97
SK133
SK194
SK188
SK147
SK146
SK148
SK118
SK119
SK116
SK130
SK131
SK117
SK112
SK113
SK129
SK127
SK126
SK123
SK169
SK121
SK120
SK114
SK110
SK128
SK125
SK122
SK115
SK111
SK109
SK108
SK124
SK153
撹乱
撹乱
排水溝
排水溝
10.8
10.9
11.0
10.7
10.6
11.1
11.2
11.3
11.4
11.5
0
1.0 m
1:300

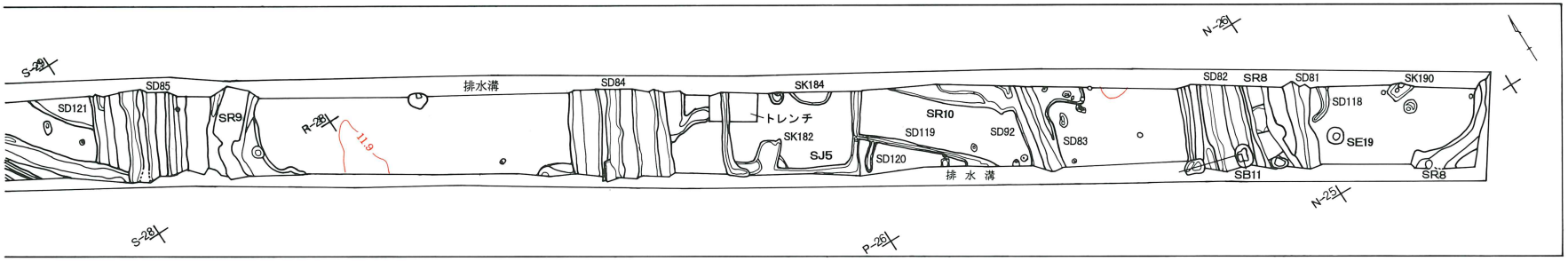
第10図　遺構配置図(3)

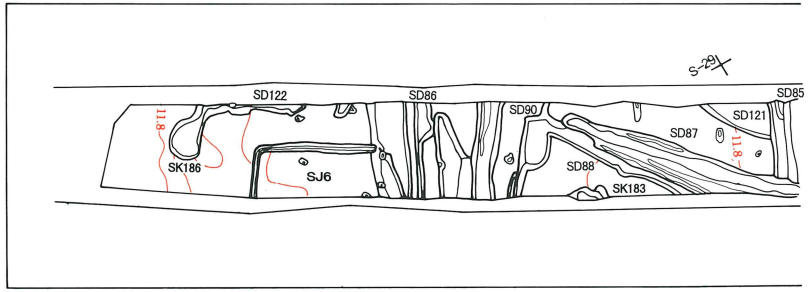

排水溝
撹乱
SD112
SD106
SK89
SK88
SK90
SK67
SK70
SK69
SK68
SK66
SK65
SK173
SK61
SK60
SK58
SK59
SK57
SK171
SD46
SK54
SK55
SK40
SK53
SD59
SD57
SD58
SK39
SB10
SD56
SK64
SK63
SK62
SK41
SK45
SK170
SK87
SD71
SD72
SD73
SD74
SK105
SK104
SK103
SK86
SK102
SK84
SK85
SK82
SK81
SK83
SD70
SD69
SD63
SD50
SD64
SK96
SK95
SK80
SK94
SK79
SK44
SK48
SK47
SK49
SK43
SK42
SK93
SK92
SK91
SK46
SD66
SD65
SK50
SD47
SD54
SK38
SD46
SK52
SK32
SK51
SK36
SK33
SK97
SE18
SK37
SK35
SK100
SK34
SK101
SK180
SD60
SD77
SD58
排水溝
F−28 P2
F−28 P1
F−29 P1
F−29 P2
G−29 P3
G−29 P2
G−29 P4
G−30 P1
10.7
10.8
10.9
11.0
11.1
11.2
11.3
11.4
11.5
10.6
10.5
10.4
10.3
0
10m
1:300

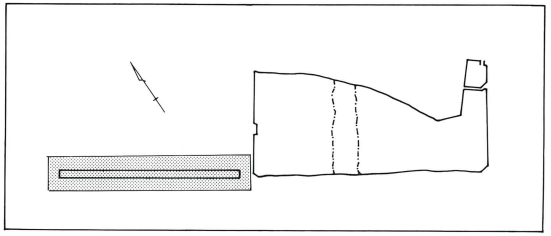
第11図　遺構配置図(4)


SK191
SD78
SD79
SD70
SD63
SD69
SD71
SD72
SD73
SK104
SK105
SD74
SK86
SK103
SK84
SK85
SD64
SK82
SK81
SK83
SK49
SD66
SD65
SD51
SD68
SD76
SD113
SD48
SD52
SD50
SK107
SK106
SE17
SD75
SD47
SD46
SD67
SJ3
SE16
SK77
SK76
SK74
SK73
SX2
SD60
SD61
SK189
SJ4
SK78
K−24 P2
SK75
K−24 P1
K−24 P3
K−24 P5
SK98
SK99
SE15
SR6
SR7
SD62
K−25 P1
SK50
SD54
SK172
SD103
SD114
SK174
SK175
SK38
SK32
SK52
SD49
SD104
SK176
SK36
SK97
SK51
SK100
SK37
SK35
SK33
SK34
SK101
SD77
SD117
SD116
SJ2
SK165
SX1
SD 53
SD 115
SK 72
SK 71
SD55
トレンチ
トレンチ
排水溝
排水溝
0
10 m
1:300

第12図　遺構配置図(5)







0　10m
1:300

Ⅳ　遺構と遺物

1．縄文時代

小沼耕地遺跡からは縄文時代早期から後期までの遺物が出土した。このなかで出土量が比較的多い遺物に、早期末の条痕文系土器と前期前半の関山式がある。早期末の時期では、調査区西側、H～G―27～28グリッドに比較的遺物が集中する。前期前半の時期では調査区の北西から西端、H―29・I―28グリッドと、北東端のケ―20～21グリッドの３箇所から集中して出土した。調査途上では住居跡の可能性も考えられたため、慎重に作業を進めたが、いずれも住居跡等の遺構を確認することはできなかった。地形的に見て、窪地状となっている部分に、遺物が流れ込んだ可能性が高い。しかしながら、遺物を観察する限り、風化による損傷を免れたものが少なからず存在することから、調査区域以外にこれらの時期の遺構が存在する可能性が高いといえる。

縄文時代の遺構は、K―27グリッドで確認された、縄文時代前期末葉の住居跡の可能性が高い遺構１軒だけである。この時期の住居跡の検出例は、小沼耕地遺跡が存在する埼葛地域はもとより、県内全域でも知られておらず、現時点で県内初の検出例となろう。

前期終末に後続する時期の遺物は確認されておらず、調査区からは後期前半の土器片が少量出土したにすぎない。

(1)　住居跡

第２号住居跡（第13図）

小沼耕地遺跡では、K―27グリッドで縄文時代前期末葉の土器が集中して出土した地点があり、精査の結果、住居跡である可能性が考えられた。

第13図に示すように、この時期の遺構は、確認面から10～15cmの掘り込みで床面にいたる極めて浅い遺構である。壁は部分的に不明瞭であったが、おおむね垂直な立ち上がりである。南東壁の一部が後世の遺構によって破壊されているが、長径5.2m×短径4.1mの隅丸長方形のプランである。覆土は１層のみであったが、自然堆積と思われる。床面はほぼ平坦で、貼床などの造作は見あたらなかった。壁に沿って、径が20cm程度の小ピットがめぐり、その内側に径が30cm程度のピット５基が検出されたことから、後者が主柱穴と推定される。小ピットは、床面から15～20cm程度、主柱穴はそれよりやや深く掘られていた。

床面中央部には２箇所に浅い円形の掘り込みがあり、その東側には、長径１m×短径0.8mの隅丸長方形の土坑がある。遺物分布からみて、土坑は住居跡構築以前の所産であろう。

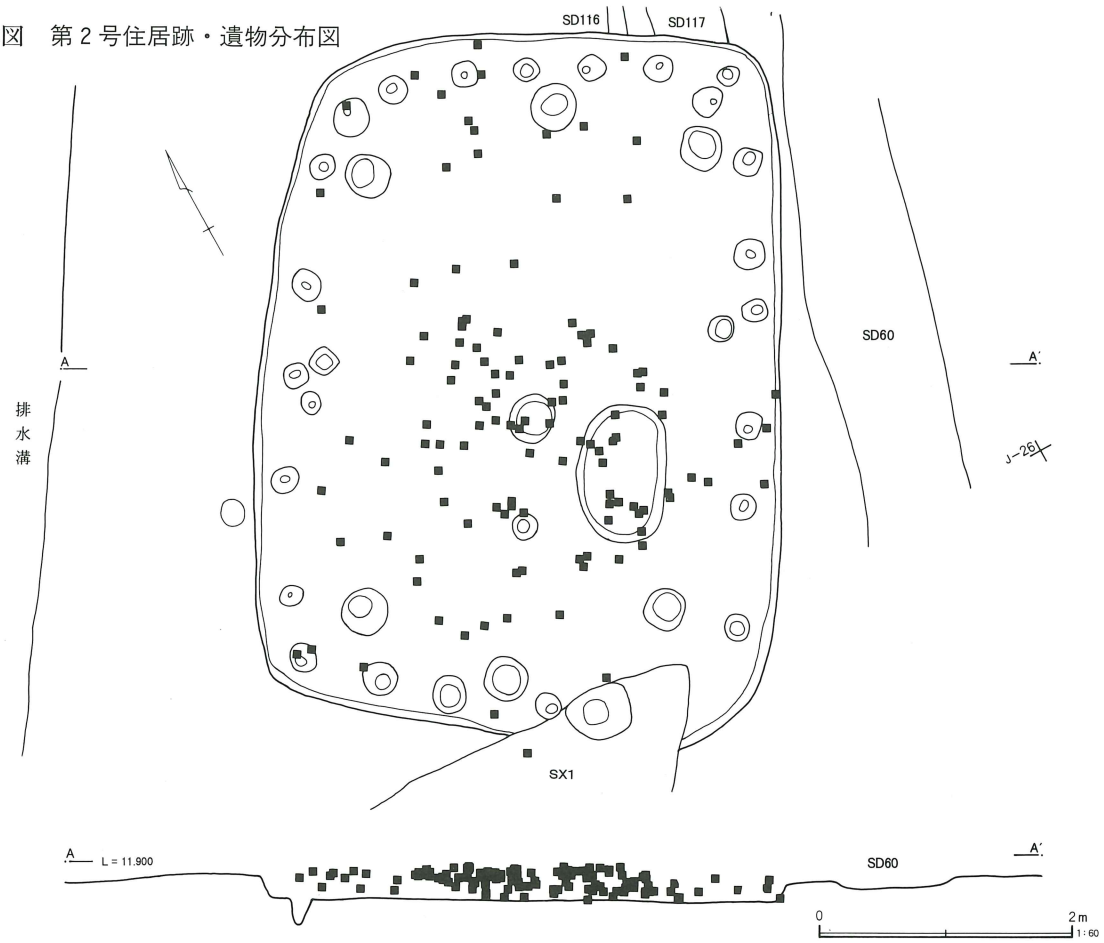
遺物分布からもわかるように、遺物は遺構中央部に集中の度合いが高く、壁寄りに移行するに従い希薄となる。遺物を取り上げた後に床面を精査したが、炉と断定できる箇所は確認できなかった。従って、報告時点では、住居跡の可能性が高い遺構として評価しておきたい。

出土した遺物はすべて土器片で、大型の胴部破片や口縁部破片を交えた総数118点が出土した。なお、石器・剥片類は出土しなかった。出土した土器は、すべてが接合関係にあるわけではないが、胎土・色調・施文具・施文形態などからみて、同一個体である可能性が極めて高い。

第14図が器形復元した土器である。遺構から出土した破片数は多いが、破片同士が接点に乏しいことや、前期末葉の土器文様が幾何学的で、同一文様の規則的な繰り返しを行わない文様構造であることから、モチーフ全体の構成が把握しがたい。従って、一部に推測を含めつつも、全体としては空白部位が多い復元となった。

復元した器形は、口縁部が強く内湾し、頸部以下では、胴中央の分帯付近でやや張るものの、ほぼ直線的に底部に至る深鉢型土器である。各部の計測値は、口

第13図　第２号住居跡・遺物分布図



径が約35cm、器高が約45cmである。文様帯は、口縁部・頸部・胴部の三帯で、胴部は格子目文帯を境に上下に二分割される。口縁部全体の把握はできないが、口唇上に突出した突起があることから、口唇部にも文様帯の意識を伺うことができる。

口縁部は約５cmと幅が狭く、典型的な該期のキャリパー型の口縁部といえる。頸部の印刻文帯と胴中央部の格子目文帯は幅が２cm程度、胴上半が14cm程度、胴下半が20cm程度である。文様帯の区画線と文様の施文具は半裁竹管で、内面によって描かれている。区画線は重ね描きの二条を基本とし、胴部では印刻部分を挟んで、文様接点から次の文様の懸垂部位までが三条の重ね描きとなっている。

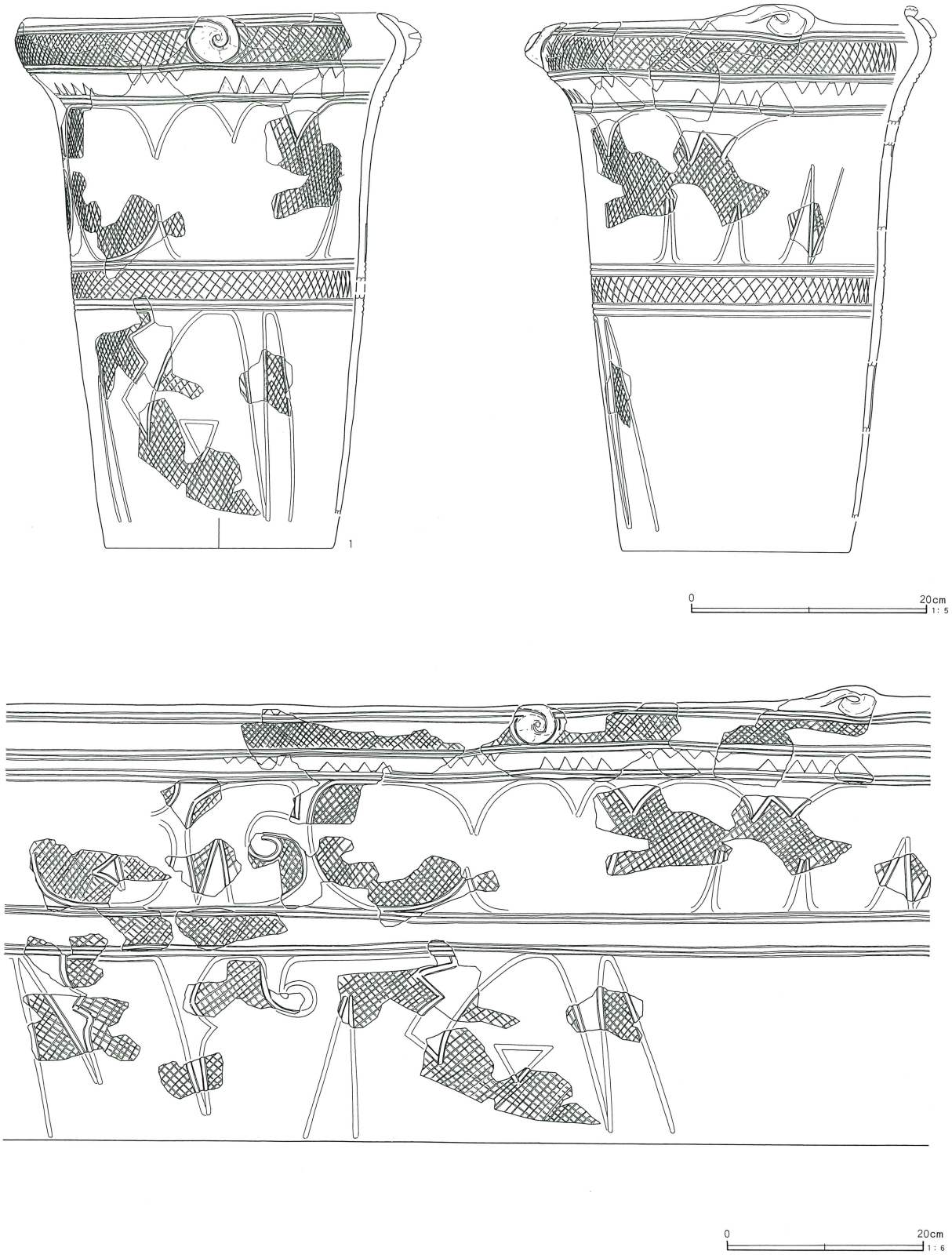
口唇部の突起とそれに接した鋸歯状印刻文は口縁部文様帯区画線によって、口縁部文様に干渉しない。また、口縁部には渦巻き状沈線をもつ円錐状の突起を有している。突起の数は不明だが、口唇部と口縁部とが各々２個で、計４個の突起を有するものと推定される。いずれも頸部・胴部文様が共に横帯文構成であることから、文様構成に干渉していない。

口縁部と胴中央部には、格子目文のみ、頸部は４個１単位の印刻鋸歯文が上下交互に施文されている。

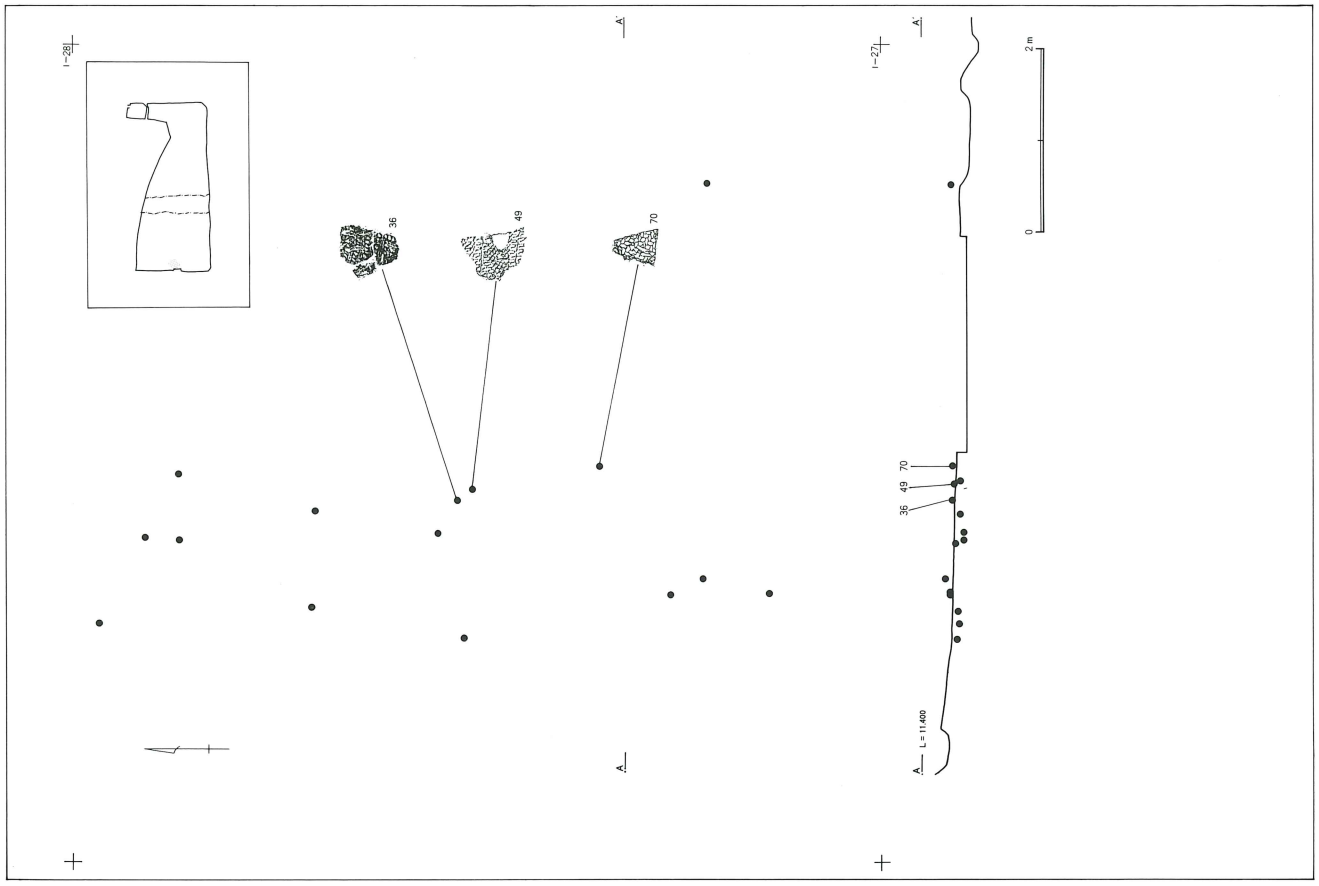
胴部は、出土点数は多いものの、小破片が多く接合関係に乏しいこともあり、文様の展開は不明瞭である。二帯に分帯された胴部のうち、上半部では、２個を単位とする鋸歯状印刻文間に、渦巻き状などのモチーフが描かれるようである。モチーフ中位には三角印刻文をもつらしい。胴下部では縦長鋸歯状の印刻文が上下交互に貫入し、下方に向かう印刻文の中位で突出するモチーフをもっている。文様の描出法は、モチーフの下書き後に格子目状沈線文を充塡し、さらに、竹管内面でモチーフを描いた後で、内部に印刻を施している。

胎土は砂粒を多く含むが、焼成は良好で、暗黄褐色から暗灰色の色調である。内面は二次的被熱によって、特に口縁部に剝落が顕著であるほか、胴下部には部分的に煤が付着している。

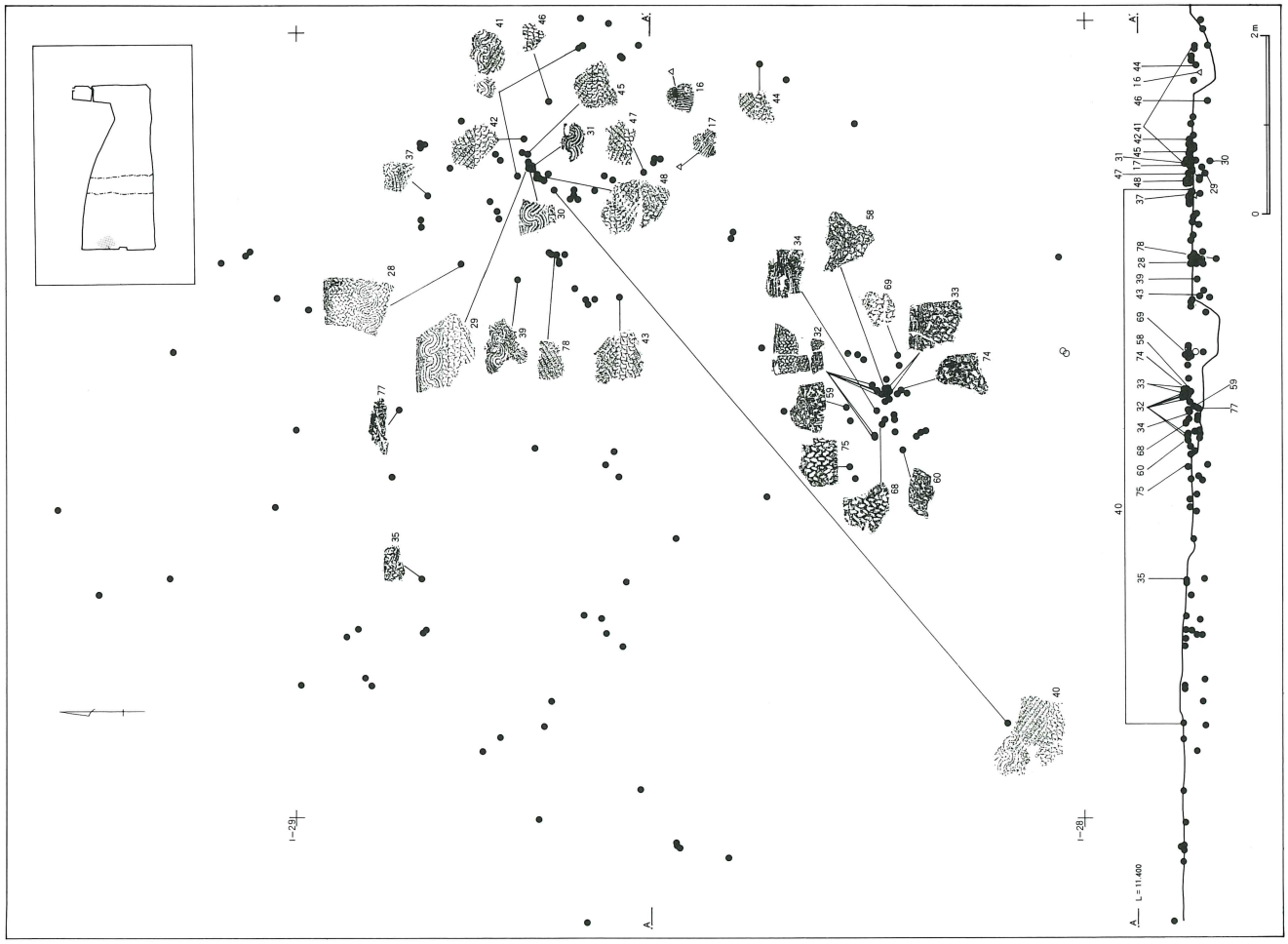
第14図　第２号住居跡出土遺物



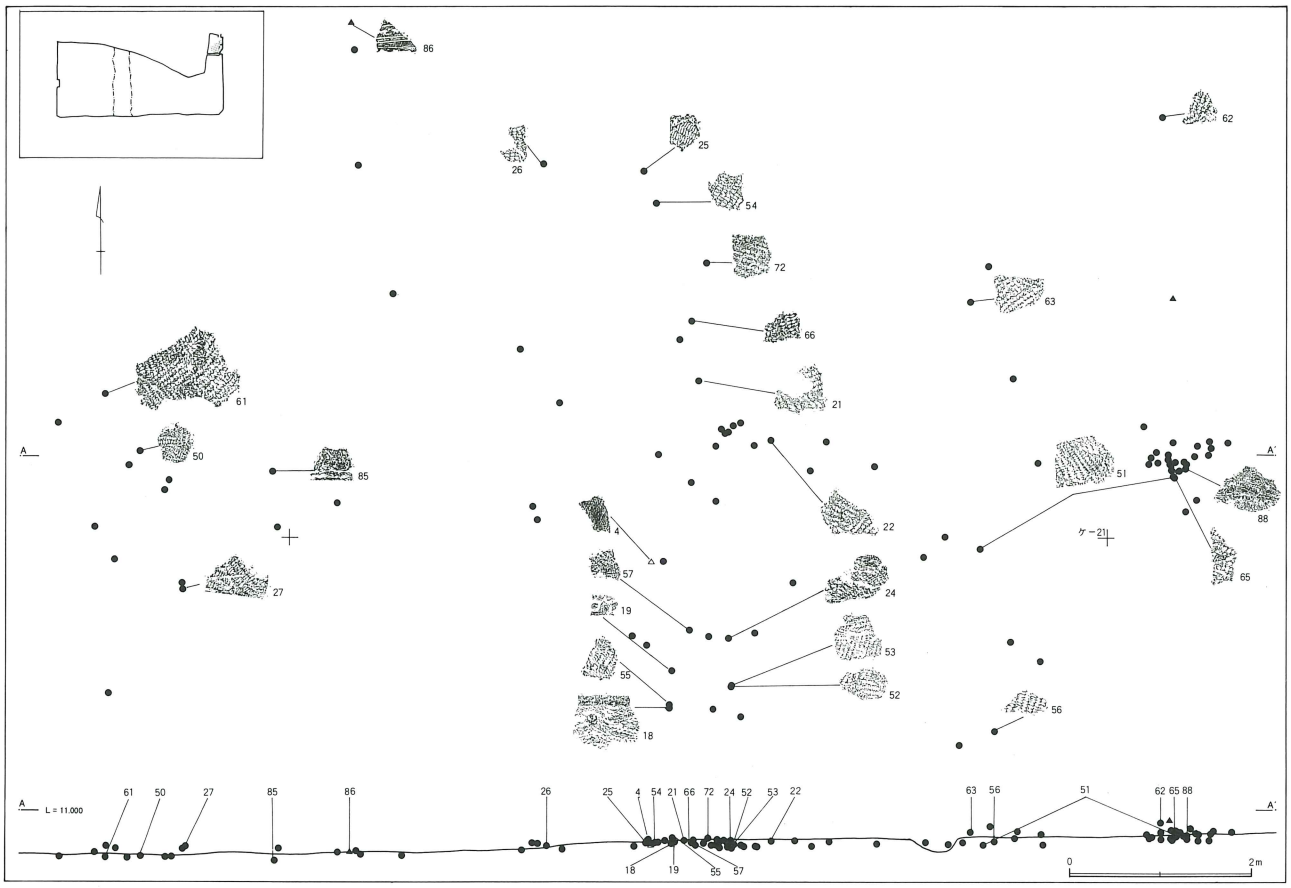
第15図　包含層出土遺物分布図(1)



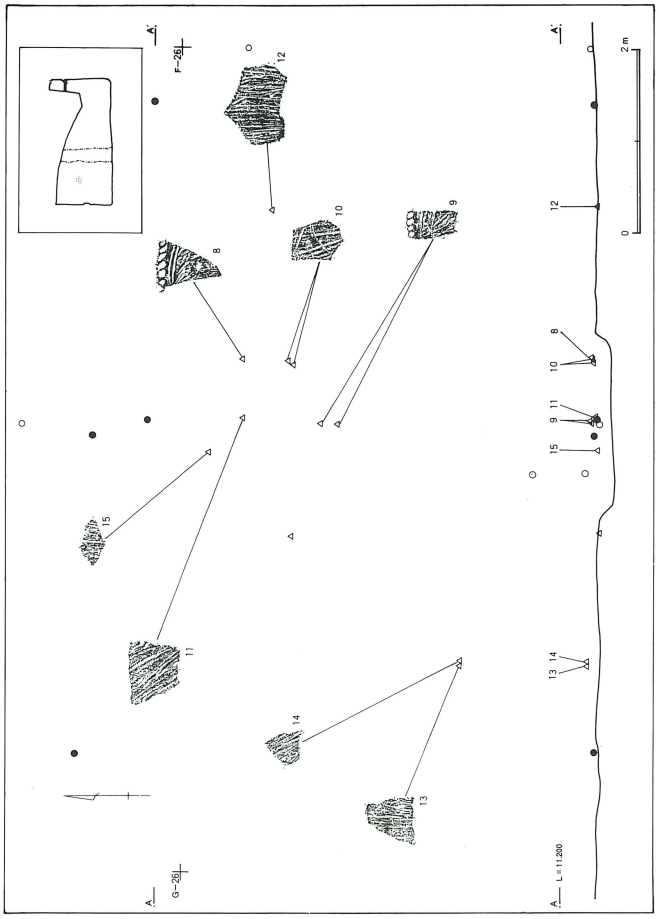
第16図　包含層出土遺物分布図(2)



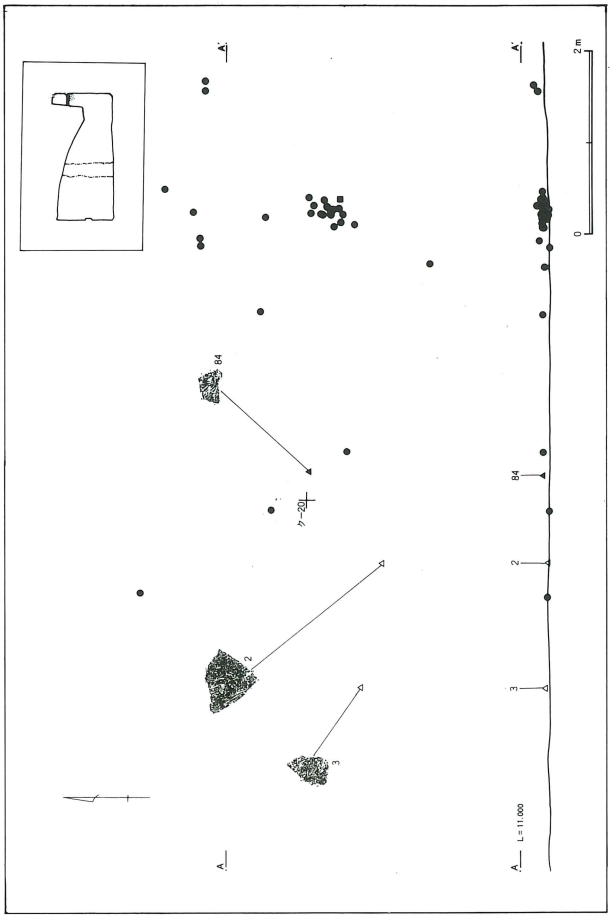
第17図　包含層出土遺物分布図(3)



第18図　包含層出土遺物分布図(4)



第19図　包含層出土遺物分布図(5)



(2) 包含層出土遺物

小沼耕地遺跡では、早期前半から後期中葉までの土器が出土したが、前期末葉を除き、遺構に伴ったものはない。第15～19図に示すように、調査区内では3箇所で関山式土器の集中出土があったが、住居跡と認定することはできなかった。

ここでは、小沼耕地遺跡から出土した縄文土器を以下のごとく分類記載することとした。

第Ⅰ群土器（第20図1～4）

撚糸文系土器を本群とした。施文の特徴から2分される。

1類（1）

器面に原体LRが縦位回転施文される土器。厚さ6～9ミリで、砂粒を多く含み灰黄褐色を呈する。稲荷台式に比定される。

2類（2～4）

撚糸文系最末に比定される土器群である。厚さ9ミリ前後で、いずれも砂粒を多く含むが、丁寧な器面整形である。暗灰黄褐色を呈する。

第Ⅱ群土器（第20図5～7）

沈線文系土器を一括した。細砂粒を多く含み暗黄褐色を呈する焼成堅緻な土器である。器面には細沈線で格子目状のモチーフが描かれる。三戸式に比定される。

第Ⅲ群土器（第20図8～17）

条痕文系土器群を一括した。8～9が口縁部破片で、口唇端が面取りされた後に棒状工具で押圧が施される。8は口唇直下に平行沈線が巡る。口唇下には斜位～縦位の貝殻条痕が施文される。何れも繊維を含む。

第Ⅳ群土器（第20図18～41、第21図42～78）

前期初頭から前葉の羽状縄文系土器群を本群とした。モチーフ・施文原体の特徴から2分される。

1類（18～27）

花積下層式土器を本類とした。18～20は原体圧痕文の口縁部破片、21～27は撚りの異なる0段3条原体による羽状縄文である。いずれも繊維を含む。

2類（第20図28～第21図78）

関山Ⅱ式土器を本類とした。28～35・38・68～70・74～76は組み紐施文の破片で、28～31・35はコンパス文を有する。74～76は上げ底状の底部破片である。36は直前段合撚り原体施文で、本例のみである。37・39～57・61～66・78は0段乃至は1段3条原体施文の土器で、不確定ながら、羽状施文されるものと思われる。40・42～45・48～49には多層のループ文帯を持つ。46～47・50～53は撚りの異なる非結束の原体による羽状施文である。58～59・68～69・74～76は前々段合撚りの原体施文例である。いずれも繊維を含み、器面の風化が進んだ破片が多い。

第Ⅴ群土器（第21図79～85）

前期後半から末葉にかけての土器群である

1類（79～81）

諸磯b式末からc式土器に相当する。横位の細密沈線が施されている。79は口縁部、81は屈曲して口縁部にいたる破片で、屈曲部に細かな円形刺突が施されている。

2類（82～85）

広義の十三菩提式に位置付けられる土器を一括した。82は口縁部破片で、隆帯と沈線によって区画された文様帯内に鋸歯状の沈線文が施文される。84には斜行する粗い擦痕がある。85は底部破片。全体に小礫混じりで暗褐色を呈する。

第Ⅵ群土器（第21図86～90）

後期の土器群を本群とした。さらに2分される。

1類（86～88）

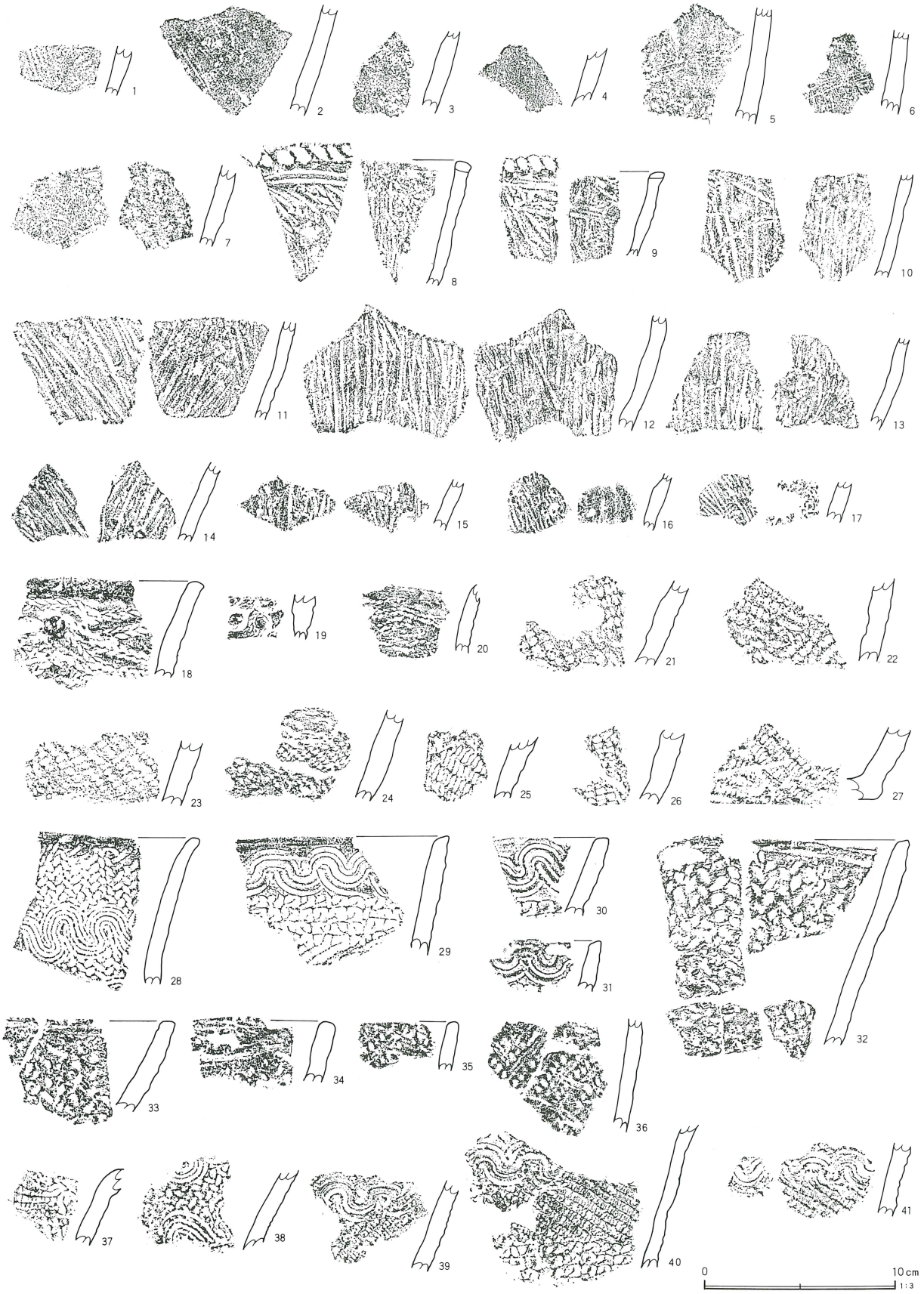
堀之内Ⅰ式土器である。86は沈線文、87は縄文施文の胴部、88は底部破片である。

2類（89・90）

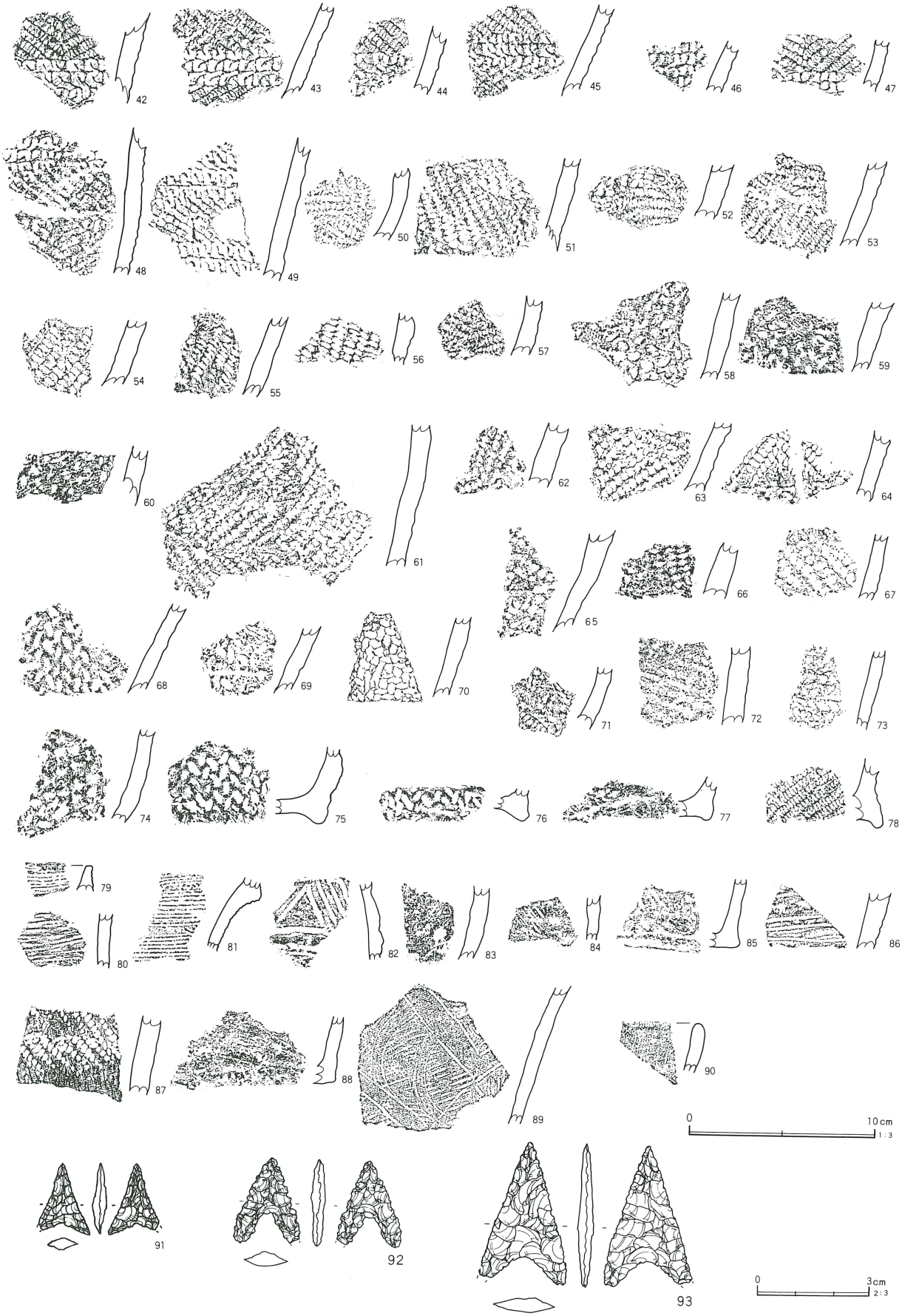
堀之内Ⅱ式土器である。89は外反気味に開く深鉢形土器で、細い沈線で文様が描かれた後にLR縄文が施文され、さらに磨消しが施されている。90は細い沈線で格子目文が描かれた土器である。

91～93は石鏃である。91は第43号溝跡、他はJ―26グリッドからの出土である。91・93はチャート、92は黒曜石である。重さは、0.41g、0.93g、2.32gである。

第20図　包含層出土遺物(1)



第21図　包含層出土遺物(2)



2．古墳時代

(1) 住居跡

住居跡は２軒検出された。所謂、「周溝を持つ建物跡」の可能性があるが、この種の遺構については関東地方においては検討が始まったところであり、ここでは「住居跡」として報告しておき、具体的な検討はＶ章で行うこととする。

第３号住居跡（第22図）

Ｊ―23グリッドに位置する。第46号溝が東隅から南東辺の半分にかけて、第55号溝が北隅から南隅にほぼ対角線状に重複している。これらより古い。平面形は、長方形を呈する。炉及び貯蔵穴は確認されなかった。柱穴が４基検出された。明瞭な柱痕は確認できなかった。覆土はしまりのない黒色土を主体とするものであった。Ｐ２は第55号溝の底面にわずかに残っていた。Ｐ１・Ｐ３は２段に掘り込まれていた。深い部分の直径は25～30cmである。深さは、Ｐ１は38cmで他の柱穴よりやや浅い。以下、順に（55cm)、58cm、52cmである。壁溝は全周すると考えられる。内側北西辺はやや乱れているが、他は直線的である。底面も平坦でほぼ同じ深さである。幅は35～45cm、深さは12～15cmである。規模は外側で、長軸4.45m、短軸3.9m、内側では長軸3.5m、短軸3.2mである。主軸方向はN―42°―Eである。

遺物は、第55号溝覆土中から鉢形土器のほぼ完形品が出土した。第55号溝は、中世以降の所産であることから、遺物は本遺構のものと考えられる。他には壁溝南隅から、甕の口縁部破片等が４点出土した。

第４号住居跡（第23図）

Ｋ―24・25グリッドを中心に位置する。第７号周溝と重複し、これより新しい。平面形は、方形を呈する。検出面で既に床面は消失していると考えられる。炉については注意して検出に努めたが、焼土を伴うような遺構は確認できなかった。貯蔵穴も検出されなかった。壁溝は南辺中央の東側及び北辺の西側約２/３が切れる。北辺以外は幅広である。幅は、西辺で50cm、一番幅の狭い北辺で16cmである。深さは５～10cmと浅い。内側には複数のピットが存在する。Ｐ１～Ｐ４を遺構に伴う柱穴と考えた。直径は、Ｐ３の場合30cmである。深さはＰ２が一番浅く58cm、一番深いＰ３は75cmである。いずれもしっかりしている。全体の規模は、外側で東西5.7m、南北5.6m、内側で同じく4.8m、5.1mである。主軸方位はN―30°―Eである。

遺物は極端に少なく、Ｐ１の壁の上部に貼りついた状態で勾玉が出土した。他にはＰ４付近から甕破片が出土した。

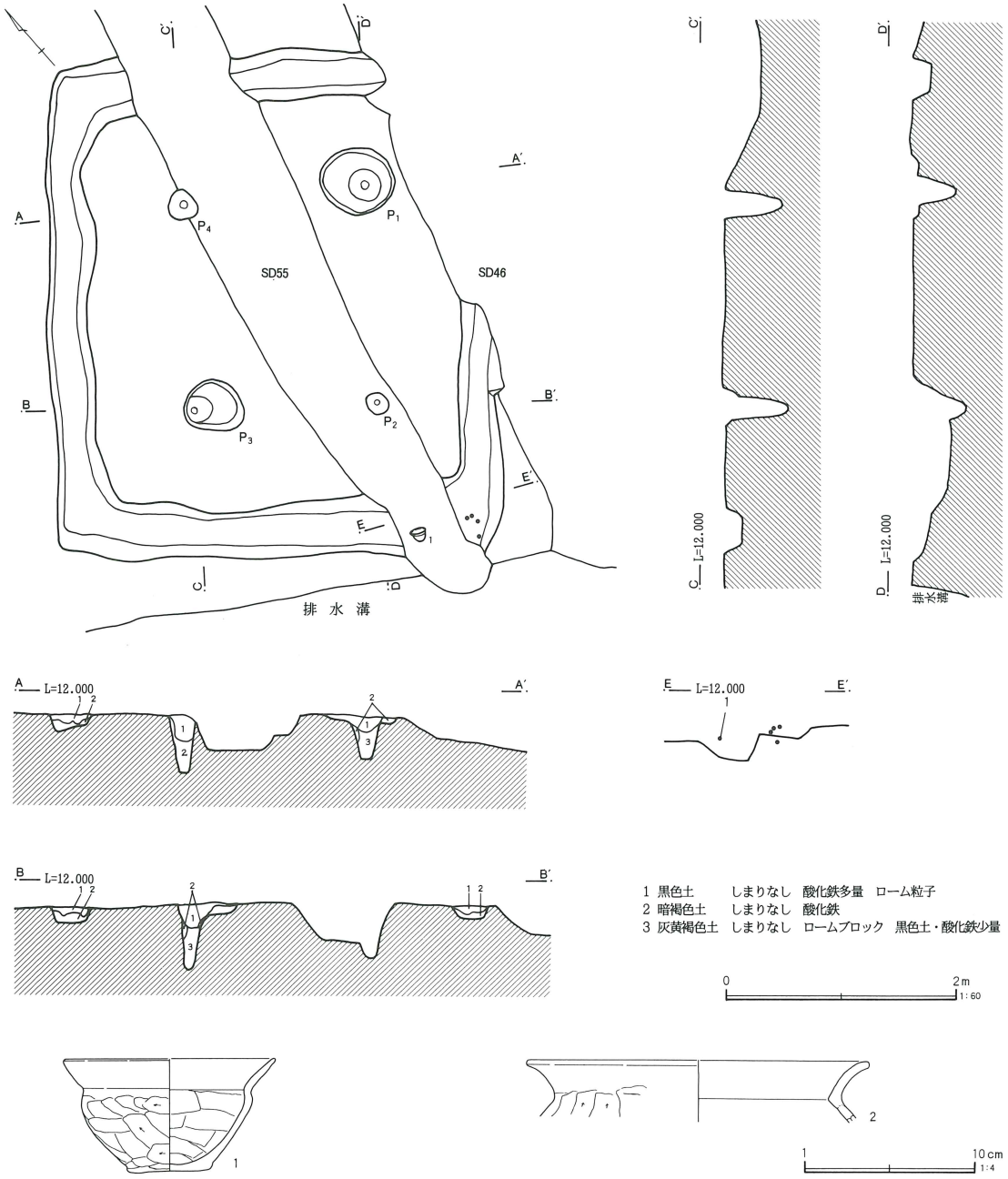
(2) 竪穴状遺構

竪穴状遺構は２基検出された。遺構確認時には、竪穴住居跡と推定して調査を進めたが、平面形がはっきり捉えられず、また、溝との重複部分も多く、竪穴住居跡と断定するに至らなかったため、竪穴状遺構とした。いずれも調査区西側の高い部分で、住居跡及び周溝の存在する地域内にある。

第１号竪穴状遺構（第24図）

Ｊ―25・26グリッドを中心に位置する。南側を第53号溝と重複している。これより古い。西側は排水溝によって壊されていた。検出時には、第115号溝の南側にある第71・72号土壙に続く可能性があると考え、竪穴住居跡と予想して調査を進めたが、結果的には竪穴住居跡となる確証を得られなかった。そのため第53号溝の南側の土壙とは別のものと判断した。北辺と東辺をわずかに検出した。平面形は、溝に壊され不明である。北辺は外側にやや湾曲し、東辺との角はやや鋭角となる。覆土は、暗褐色から黒褐色で、比較的しまりの弱いものであった。検出した部分は、北辺の長さ5.7m、東辺は1.05mである。深さは10cm前後である。底面はやや凹凸がある。底面で北辺に平行して長さ3.3m、幅23～42cm、深さ10cmほどの溝状の掘り込みを検出した。溝の東端は竪穴状遺構の壁にかかっているため、

第22図　第３号住居跡・出土遺物



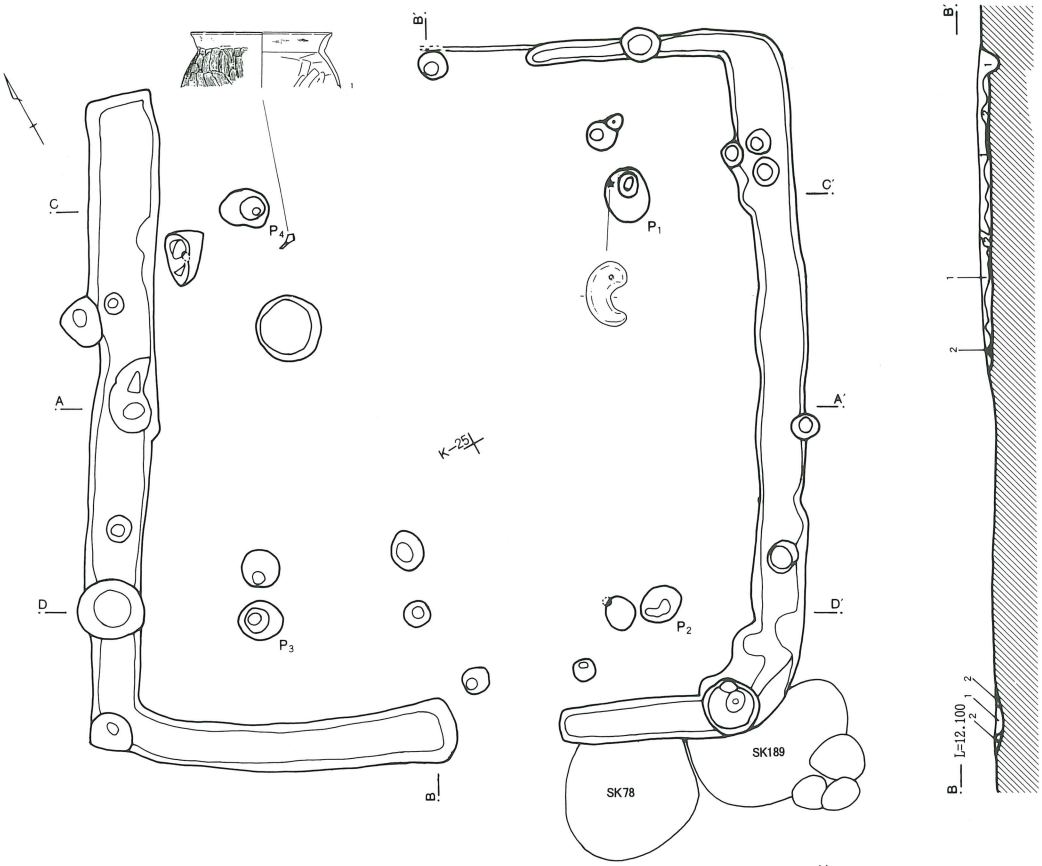
第１表　第３号住居跡出土遺物観察表

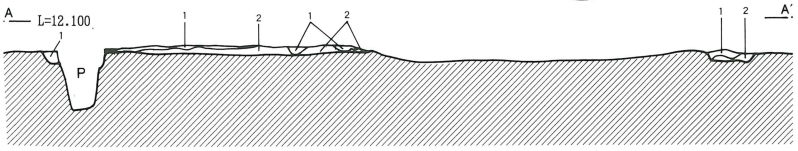
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	鉢	12.4	6.6	4.8	BDHJ	II	鈍い褐	100	
2	甕	(20.0)			HJ	III	灰黄褐	10	

第２表　第４号住居跡出土遺物観察表

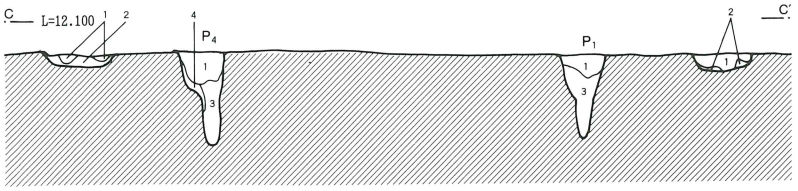
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	甕	(15.0)			HJ	II	灰黄褐	20	
2	勾玉	長さ3.45cm　孔径0.15cm　重さ10.01ｇ					灰オリーブ	100	石材：蛇紋岩？

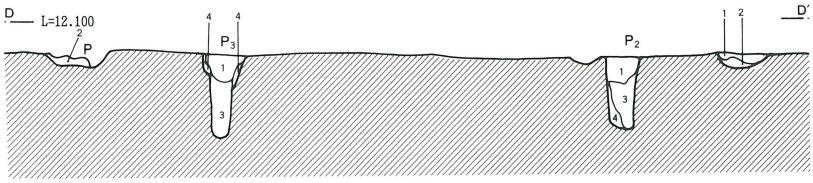
第23図　第４号住居跡・出土遺物



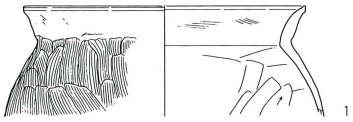


1 黒褐色土　しまり弱　酸化鉄斑 褐色土ブロック
2 褐色土　しまり弱　酸化鉄少量
3 暗褐色土　しまり弱　酸化鉄少量　1層と2層の混合土
4 褐色土　しまり弱　酸化鉄少量　2層類似　やや明るい

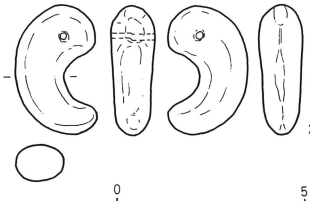




0　2m　1:60

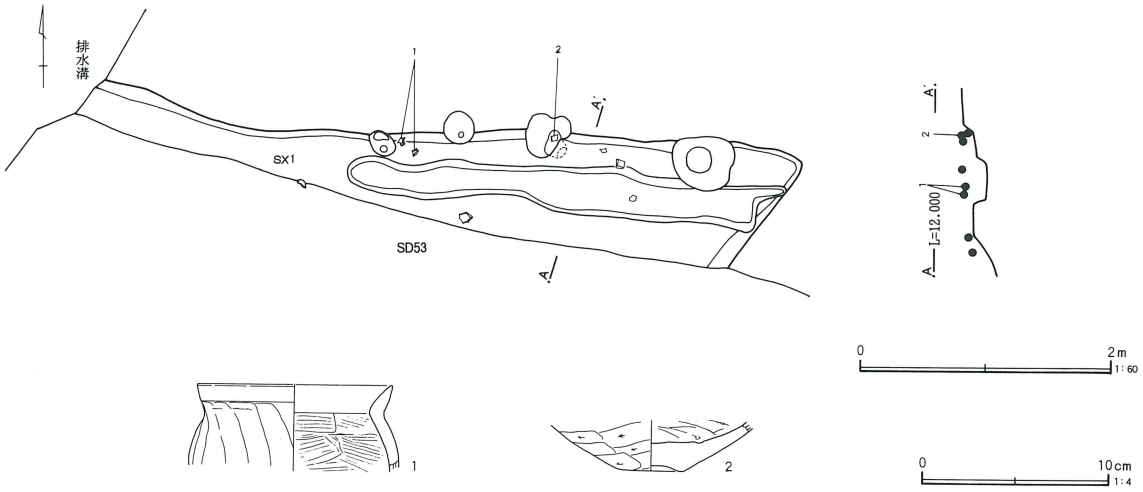


0　10cm　1:4



0　5cm　1:2

第24図　第１号竪穴状遺構・出土遺物



第３表　第１号竪穴状遺構出土遺物観察表

番号	器　種	口 径	器 高	底 径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	甕	(10.4)			BHJ	II	鈍い橙	25	
2	壺			3.0	BHJ	II	鈍い黄橙	70	

遺構に伴うものかどうかは不明である。ピットは壁にかかり、全て後世のものである。

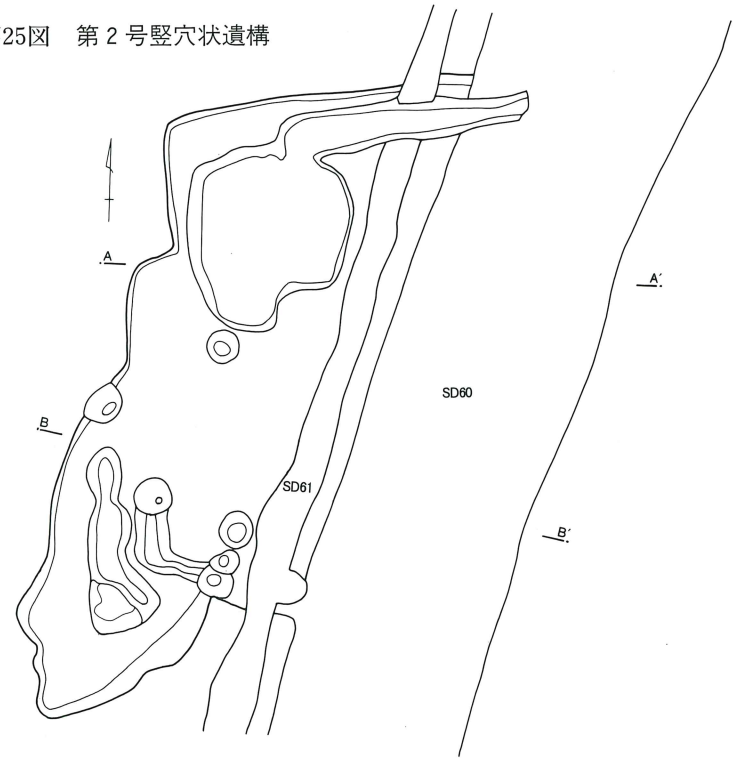
遺物は、覆土中から８点検出された。壁際から出土したものが多い。出土状況からは流れ込みと考えられる。図示できたのは２点である。

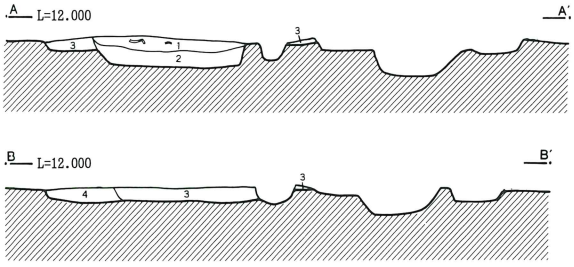
第２号竪穴状遺構（第25図）

Ｊ・Ｋ―24グリッドを中心に位置する。東側が第60・61号溝と重複している。これより古い。検出時には複数の竪穴住居跡の重複として捉え、壁溝、柱穴などを意識的に確認するよう努めたが、あまりうまく確認できなかった。平面形は、不正形を呈する。深さは10cm前後である。底面は比較的凹凸があり、特に南側では顕著である。底面北側に不整方形とでも言うべき土壙状の掘り込みが確認された。断面観察では竪穴状遺構を切りこんでいるように見えた。この掘り込みに接続するように北壁に沿って壁溝状の掘り込みが見えた。南側では溝状の掘り込みが２条検出された。１条はほぼ直角に曲がり壁溝を思わせるものがある。両端にはピットが掘り込まれている。他の１条は不整形の掘り込みである。ピットは５基確認された。中央部のピットは柱穴の可能性がある。

遺物は、145点記録した。細片が多く図示できたものは22点である。北寄りの土壙状の掘り込み上面及び南寄りのピット上面の２ヵ所にまとまって出土した。殆どが確認面からの出土で、底面からのものはない。両地点の破片が接合しており、一括して廃棄されたものと考えられる。また、掘り込み上面からは炭化材が出土した。

第25図　第２号竪穴状遺構





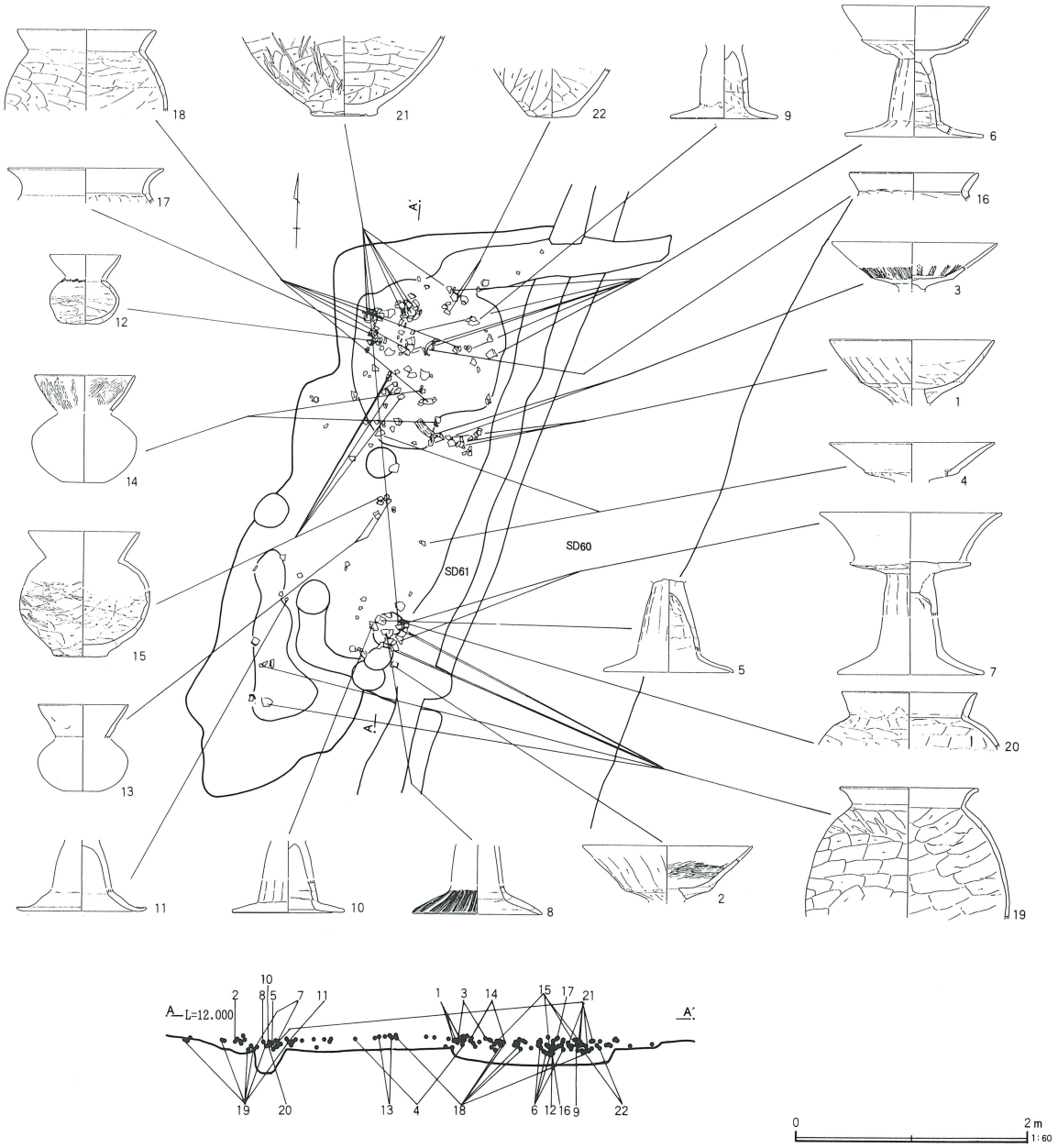
1　黒 色 土　　しまり弱、酸化鉄
2　暗褐色土　　しまり弱、ローム・黒色土ブロック
3　暗褐色土　　しまり弱、酸化鉄少、ロームブロック
4　暗褐色土　　しまり弱、酸化鉄・黒色土ブロック少

0　2m
1:60

第４表　第２号竪穴状遺構出土遺物観察表

番号	器　種	口 径	器 高	底 径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	高坏	(19.0)			ABEHJ	II	鈍い赤褐	20	
2	高坏				HJ	II	鈍い橙	40	
3	高坏				AHJ	II	鈍い橙	55	
4	高坏	(19.0)			BEHJ	III	明赤褐	20	
5	高坏				ABHJ	III	鈍い橙	90	
6	高坏				BHJ	II	明赤褐	60	
7	高坏				ABHJ	II	鈍い橙	30	
8	高坏			(15.0)	HJ	II	鈍い橙	20	
9	高坏			(12.4)	BHJ	III	鈍い橙	30	
10	高坏			(13.0)	BHJ	II	鈍い赤褐	20	
11	高坏			(15.0)	ABDHJ	III	鈍い褐	20	
12	小形壺			5.0	BHJ	II	鈍い橙	100	
13	小形壺	(10.4)			HJ	II	鈍い黄橙	20	
14	小形壺	(11.6)			BHJ	II	鈍い褐	15	
15	壺			6.1	BHJ	II	鈍い橙	75	
16	甕	(15.0)			BEHJ	II	鈍い赤褐	30	
17	甕	(18.0)			BHJ	III	鈍い橙	10	
18	甕	(16.0)			BDEHJ	III	鈍い赤褐	40	
19	壺	(16.0)			ABHJ	II	灰褐	40	
20	甕	(15.6)			EHJ	II	鈍い黄橙	40	
21	壺			7.8	BHJ	II	鈍い褐	60	
22	甕			(5.4)	ABHJ	III	鈍い橙	15	

第26図　第２号竪穴状遺構遺物分布図



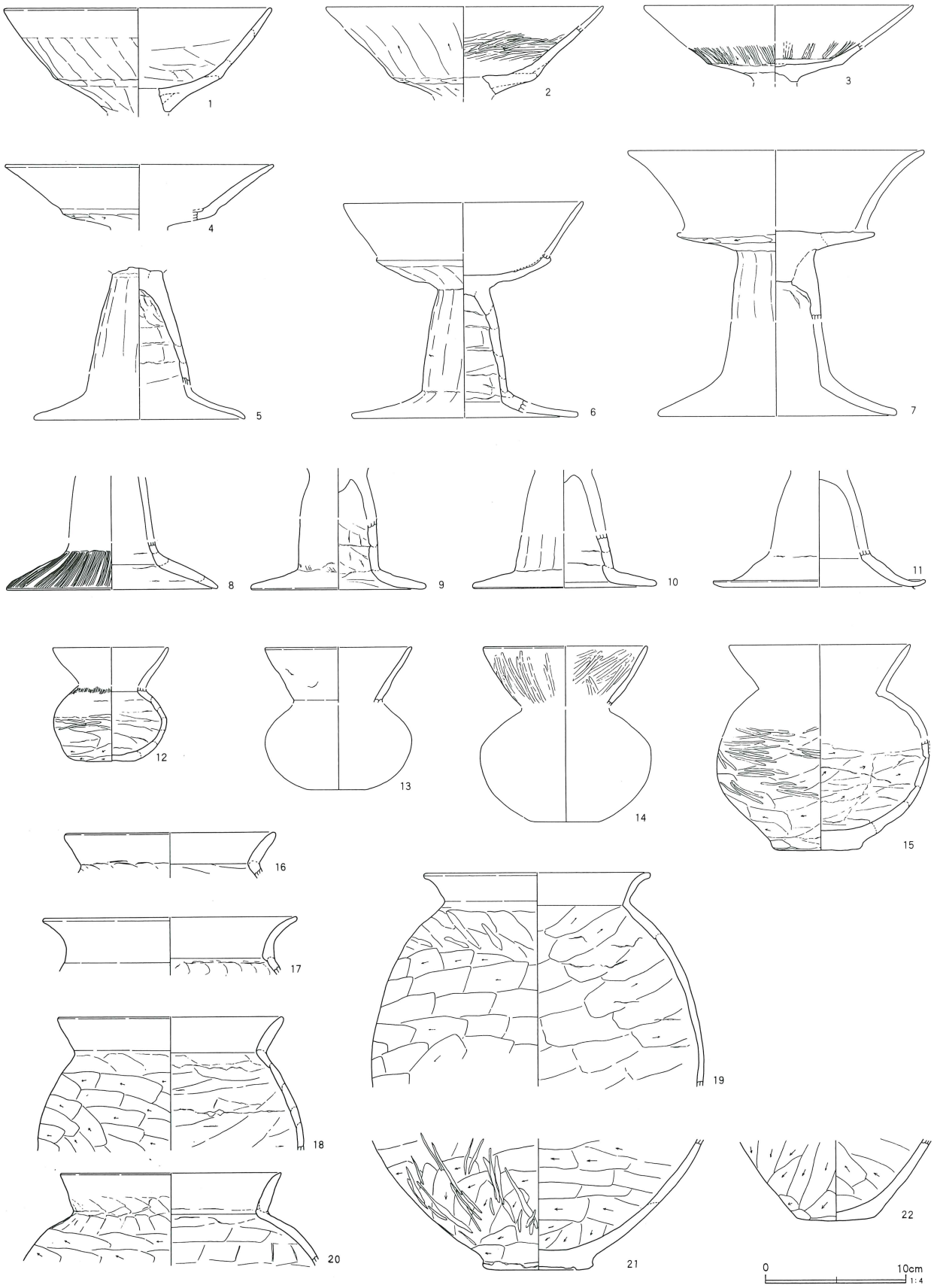
(3)　周溝

周溝としたものは、調査時には、「方形周溝墓」或いは「溝」として捉えたものである。ここでは、最近のこの種の遺構に対する議論を踏まえて「周溝」として扱うこととした。ただし、遺構番号については、凡例にも記したように前回の報告書の続き番号を踏襲している。周溝の分布は、西側のやや高い部分に認められる。特に道路部分に多く存在するが、調査幅が狭いために全容がわかるものはない。この分布は、さらに南の、平成元年の事業団の調査区及び平成５・７年の騎西町の調査区に広がる。

第６号周溝（第29図）

K―24・25グリッドに位置する。検出されたのは南側及び西側の南半部である。西側北半部は排水溝にかかり、北側は第55・62号溝によって、東側は第60・61

第27図　第２号竪穴状遺構出土遺物



号溝によって壊されていると考えられる。第73・74号土壙としたものは、周溝底部の残存とも見えるが、調査時には断定できなかったため、土壙として取り扱った。いずれにしても重複が激しく全容は詳らかでないが、残存部からは、周溝の南側が陸橋状に切れるものであることが読み取れる。重複する遺構は、前述の溝の他に南側で第98号土壙と重複し、これより新しい。第２号竪穴状遺構は調査時には平面形の把握が極めて困難であった。西側にある本周溝と対になる位置にあり土壙状の落ち込みがそれにあたる可能性も考えられる。ただし、調査時には断定できなかったため、竪穴状遺構として扱った。周溝内部には、第７号周溝、第４号住居跡及びピットが複数存在する。周溝は屈曲部が狭く、丸みを帯びている。南側の途切れる部分は土壙状に広がっている。底面は凹凸があり、特に土壙状に広がる部分では凹凸が激しい。検出面での幅は0.6～1.55mである。深さは12～20cmである。全体の規模は不明であるが、東側を第60・61号溝あたりで計ると、おおよそ10～12mほどと推測される。

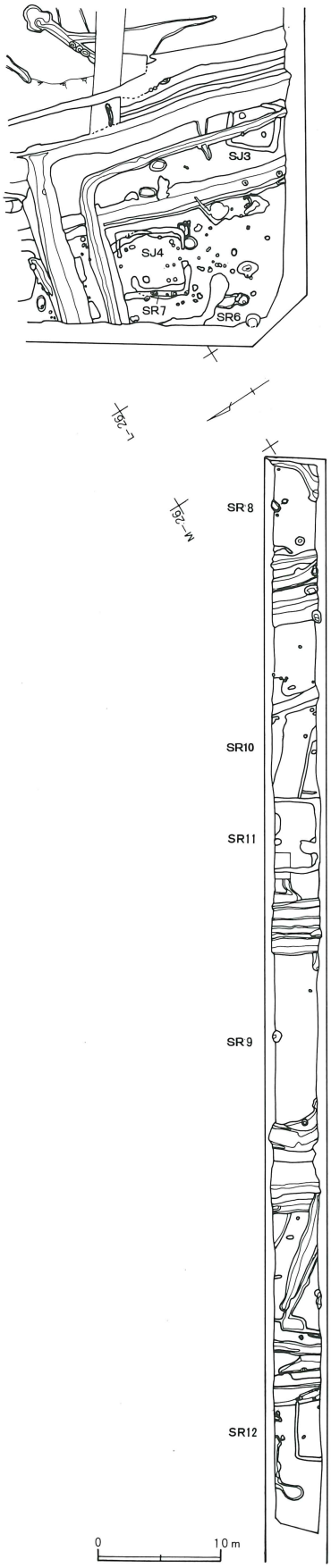
遺物は、西側に１ヵ所纏まりがあり、周溝の切れる部分からもやや多く出土した。出土状況は底面から10～15cm浮いた状態であった。破片数で59点記録した。高坏が多く、甕・小形壺等がある。図示できたのは９点である。

時期は和泉式期と考えられる。

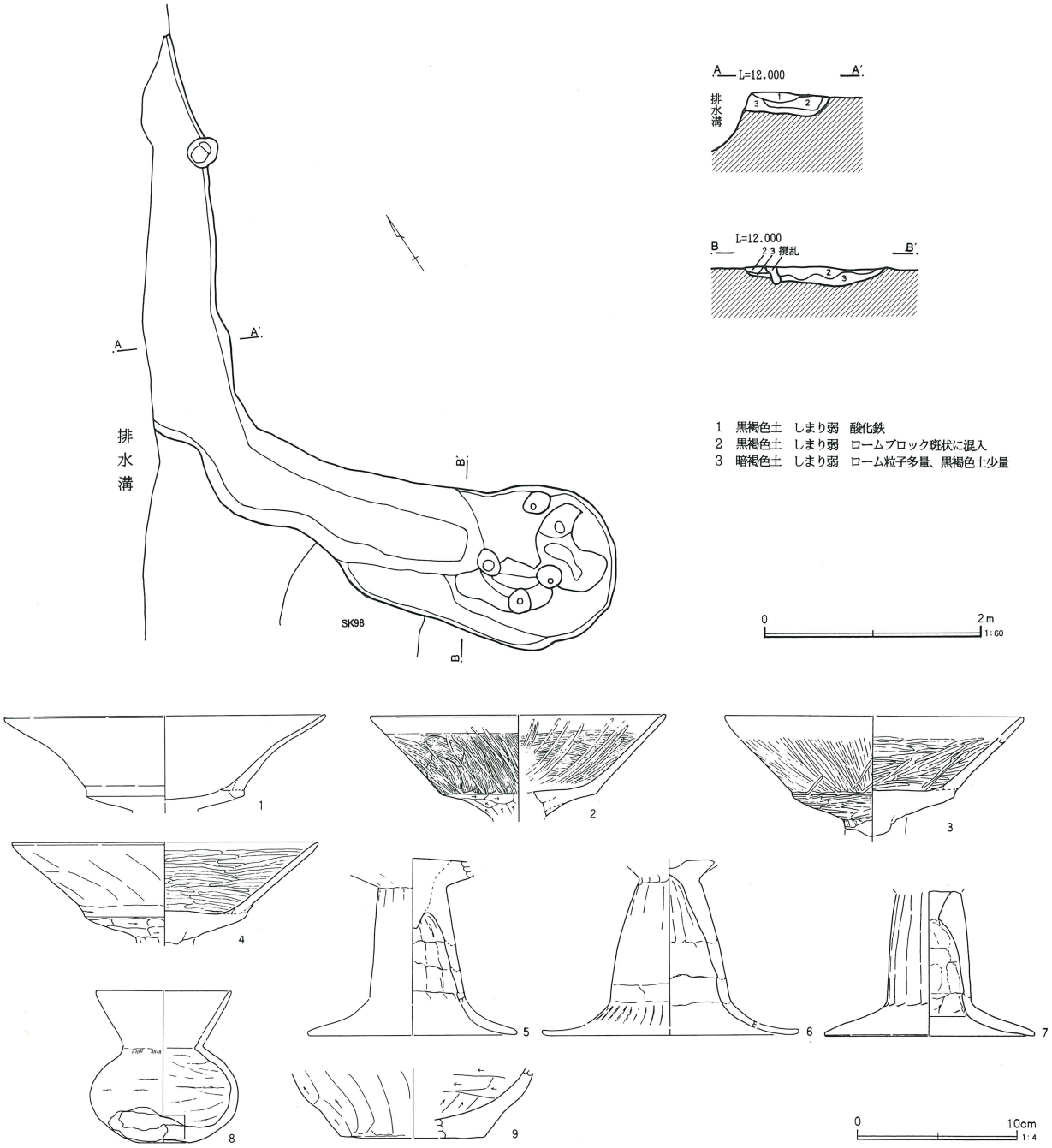
第７号周溝（第31図）

K―24・25グリッドを中心に位置する。第11号周溝・第62号溝と重複し、これらより古い。平面形は南北中央が切れるものである。西側は角が丸みを帯びた「コ」字状を呈するが、中央の外側が膨らむ。東側は乱れており、南側は屈曲するものの北側は斜めに延びている。周溝内部には複数のピットが存在するが、周溝に伴うものは特定できなかった。陸橋状に切れている部分は、東側の残りが悪いために、よくわからないが、約１～1.5mほどと考えられる。周溝幅は0.32～1.05mである。深さは、最大で15cmである。周溝全体の規模は、東西方向外側で5.5m、内側４m。南北方向は西側の周

第28図　周溝分布図



第29図　第６号周溝・出土遺物



第５表　第６号周溝出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	高坏	(20.0)			BHJ	Ⅲ	鈍い褐	15	
2	高坏	(18.4)			HJ	Ⅱ	鈍い褐	20	
3	高坏				ABHIJ	Ⅱ	鈍い黄橙	60	
4	高坏	(19.0)			BHIJ	Ⅱ	鈍い橙	20	
5	高坏				BHJ	Ⅱ	鈍い橙	90	
6	高坏				ADHJ	Ⅱ	橙	90	
7	高坏			(13.0)	EHJ	Ⅱ	鈍い黄橙	60	
8	小形壺			3.0	BHJ	Ⅲ	鈍い黄橙	100	焼成後穿孔
9	甕			(9.0)	EHJ	Ⅱ	灰黄褐	15	

溝部分で計ると、外側５ｍ、内側3.85ｍである。主軸方位はＮ―27°―Ｅである。

遺物は出土しなかった。

第８号周溝（第32図）

Ｍ―25グリッドを中心に位置する。道路部分のため全体の南側約半分程度を検出したものと思われる。第81・82号溝と重複し、これらより古い。東側の周溝は西に屈曲したところで膨らみを持ち止まる。これが周溝の端部と考えられる。西側の周溝は東に緩く屈曲しているが、端部が検出されないことから、平面形は、南辺中央部が切れるものと考えられる。また、周溝南辺の端部は対にならず、食違いになるものと考えられる。角は、両角ともかなり丸みを持っている。内側にピット、土壙、井戸等が検出された。ピット以外は本遺構に伴うものかどうか不明である。東側周溝の端部は、検出面から40cm、底面からは約25cmの高さの段を持つ。底面は平坦である。西側の周溝底面には、約５～10cm程の高さの掘り残しがあり、溝中土壙状になる。周溝幅は検出面で0.85～1.2ｍ、底面幅は0.35～0.8ｍ、深さは0.55～0.7ｍであるが、土層断面を観察すると掘り込み面での幅は1.3ｍ以上あることがわかる。なお、遺構の掘り込み面はⅧ層上面である。周溝全体の規模は、東西方向内側で9.2ｍである。

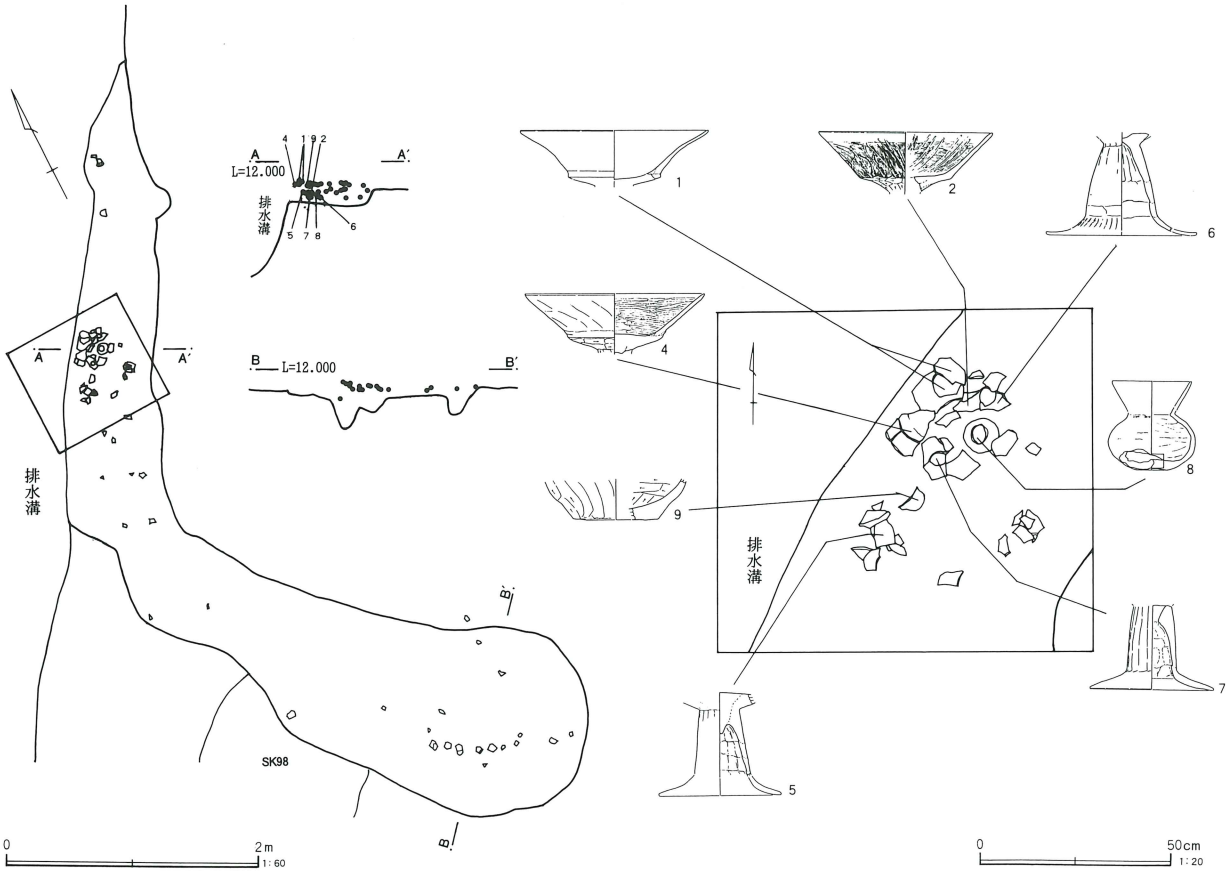
外側はおよそ11.5ｍ前後と推測される。主軸方位はＮ―30°―Ｅ前後と思われる。

遺物は周溝覆土中からの出土が殆どである。小破片が多く、周溝底面からの出土は殆どない。遺物の分布は東側周溝の端部付近が最も多い。この部分の垂直分布を見ると、周溝内側から流れ込んでいる状況が読み取れる。第81・82号溝からも出土しているが、殆どが本周溝のものである。また、内側にあるピットからは、壺の胴部破片が出土した。記録した破片数は154点であるが、細片が多く図化できたのはわずかである。時期は、五領式の新しい段階と考えられる。

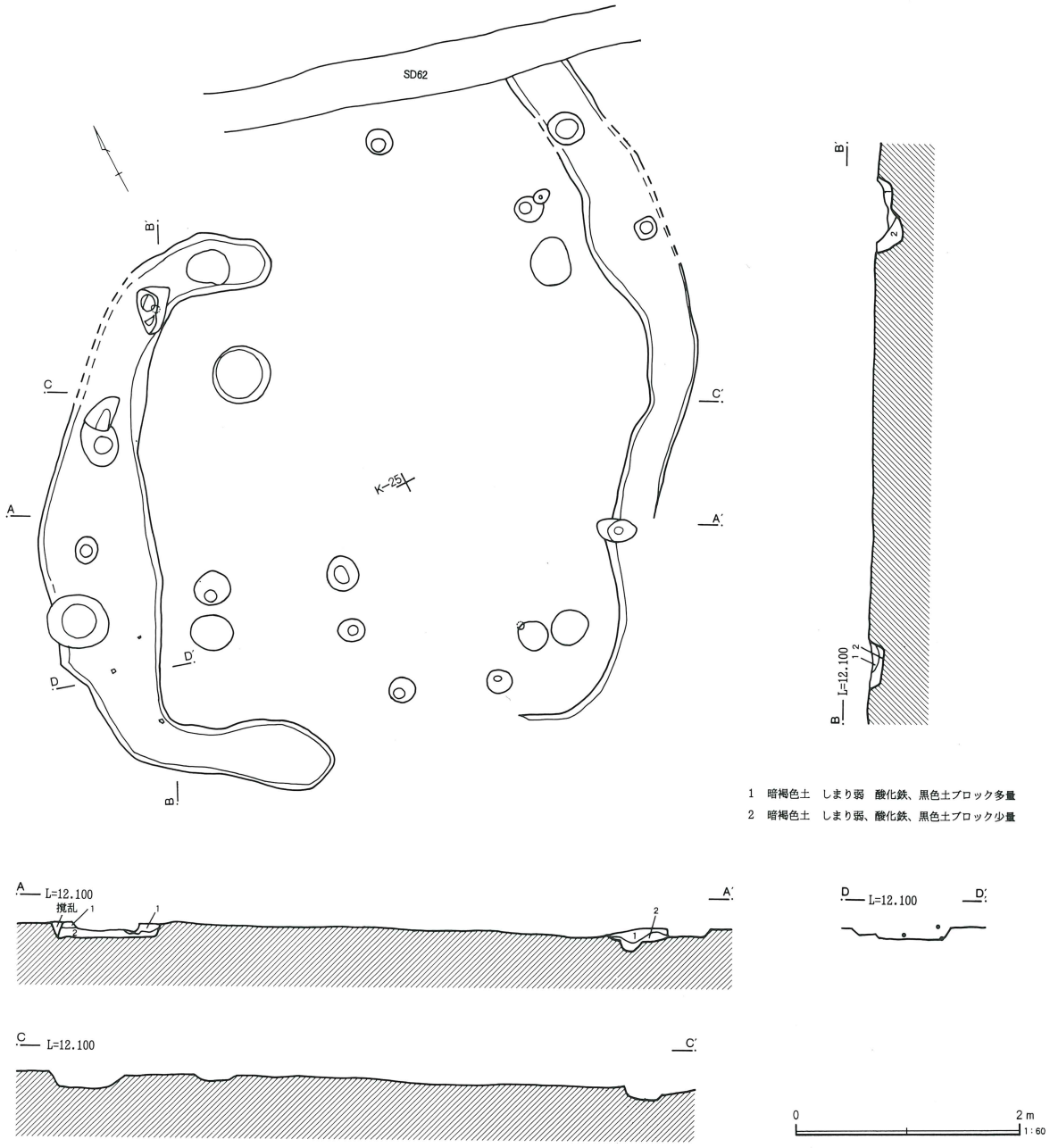
第９号周溝（第35図）

Ｑ―27・Ｒ―28グリッドを中心に位置する。調査時

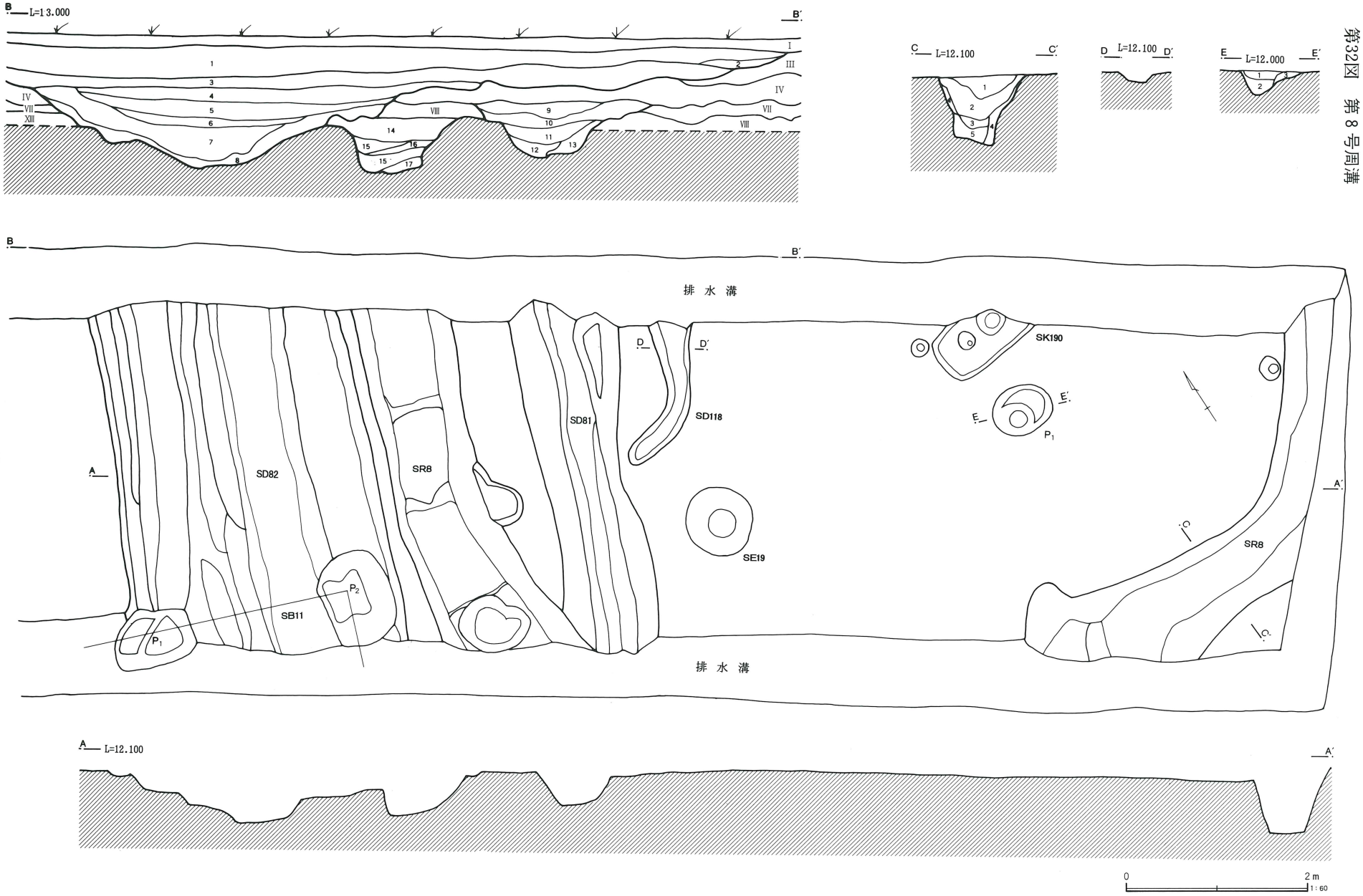
第30図　第６号周溝遺物分布図



第31図　第７号周溝



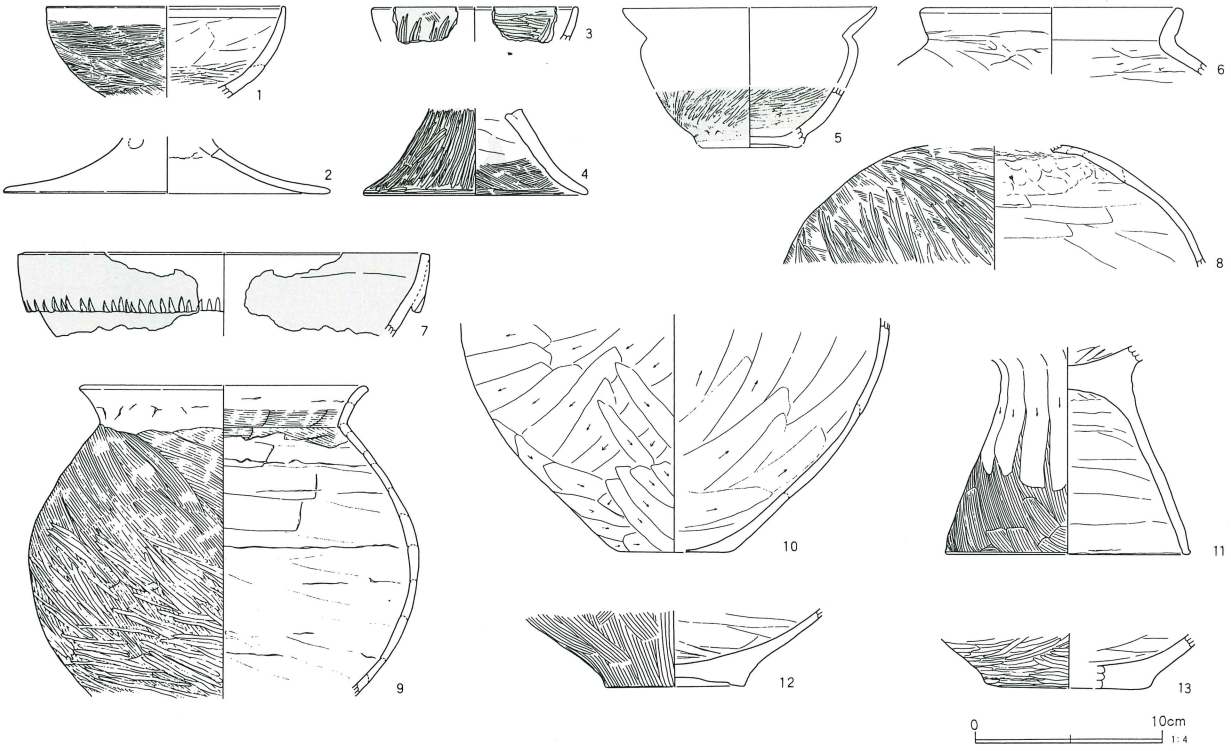
には第89号溝としたものである。第８号周溝と同じく南側を検出した。東側で第84号溝と重複し、これより古い。平面形は、第８号周溝と同じく南側が切れるものと考えられる。西側の周溝は調査区際で東に屈曲し、やや膨らみ、約２ｍほどのところで切れるようである。東側の周溝は、殆どが第84号溝に切られているが、西側に屈曲した部分が1.2ｍほど検出された。内側には直径70cmのピットが１基検出された。深さは28cmである。本周溝に伴うかどうか不明である。西側の周溝は、屈曲部で内側に浅い段を持ち、深さ10cmほどのピットが１基検出された。また、屈曲部が終わるあたりから、長方形の土壙状の掘り込みが検出された。周溝底面との段差はない。底面は、北側はほぼ平坦であるが、南側は凹凸があり、中央部がやや高くなっていた。底面の幅は85cm～１ｍである。周溝の幅は検出面では1.45～1.9ｍである。深さは、40～60cmである。土層断面では、幅2.2ｍ、深さ90cmである。東側の周溝については、第84号溝に大部分を壊されているが、西側に屈


B
L=13.000
B′
C
L=12.100
C′
D
L=12.100
D′
E
L=12.000
E′
排 水 溝
SK190
SD118
SD81
SR8
SD82
SB11
SE19
P1
P2
A
A′
L=12.100
0
2 m
1:60

第32図　第8号周溝

1　灰色土　しまり強　粘性有　Mn・酸化鉄少量
2　灰色土　砂層
3　暗灰色土　しまり強　砂・酸化鉄少量
4　灰色土　しまり強　粘性有
5　灰褐色土　しまり強　粘性有　砂
6　青灰色土　しまりなし　粘性有　酸化鉄多量
7　青灰色土　しまり有　粘性やや有　砂少量
8　暗褐色土　しまり弱　青色粘質土ブロック　酸化鉄少量
9　黒褐色土　しまり有　粘性なし　酸化鉄　ローム粒子
10　暗褐色土　しまり有　粘性やや有　ローム粒子　粘質土ブロック少量
11　暗褐色土　しまり有　粘性有　青白色粘質土が斑状に混入
12　暗褐色土　しまり有　粘性なし　ロームブロック多量
13　暗褐色土　しまり有　粘性やや有　青白色粘質土ブロック混入
14　黒褐色土　しまり有　粘性なし　ローム粒多量
15　暗褐色土　しまり有　粘性なし　ローム粒多量
16　明黄褐色土　ローム粒子多量
17　青灰色土　ローム粒子多量　ハードロームブロック混入

第33図　第８号周溝出土遺物



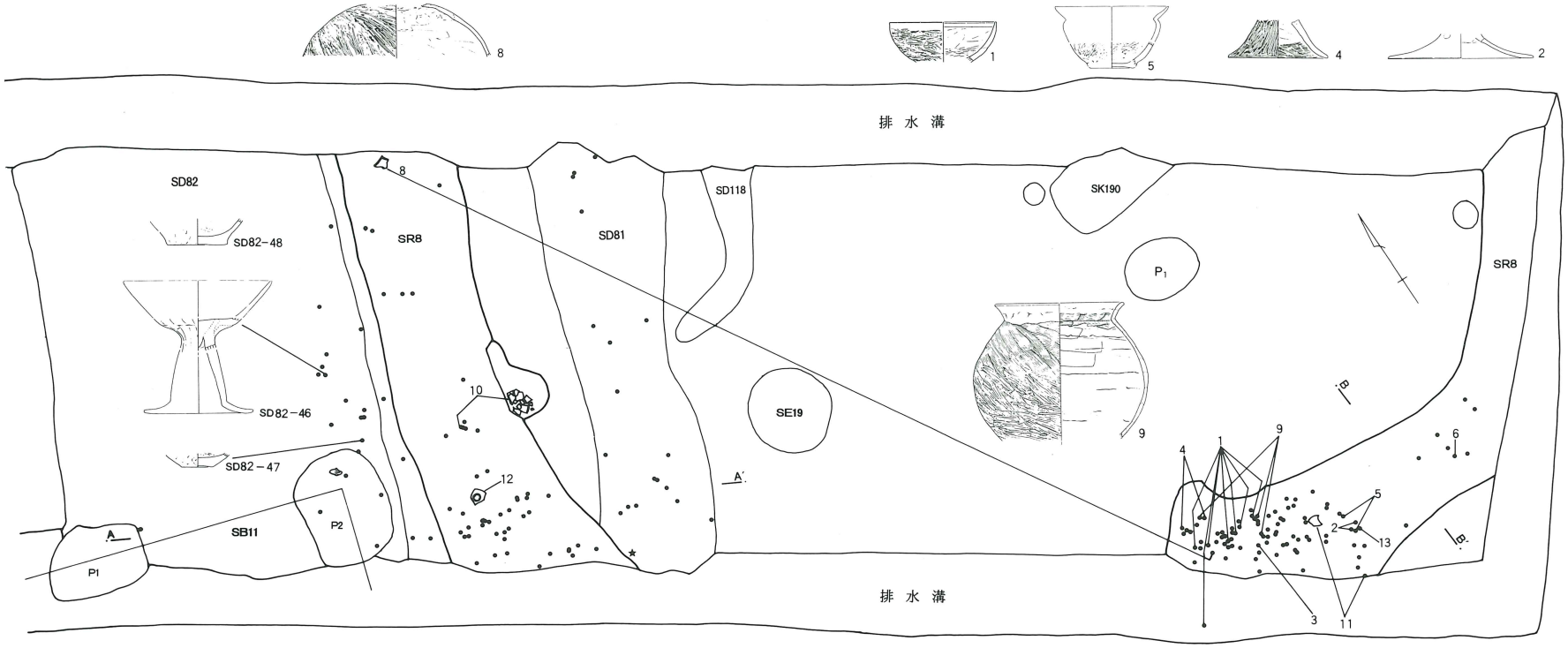
第６表　第８号周溝出土遺物観察表

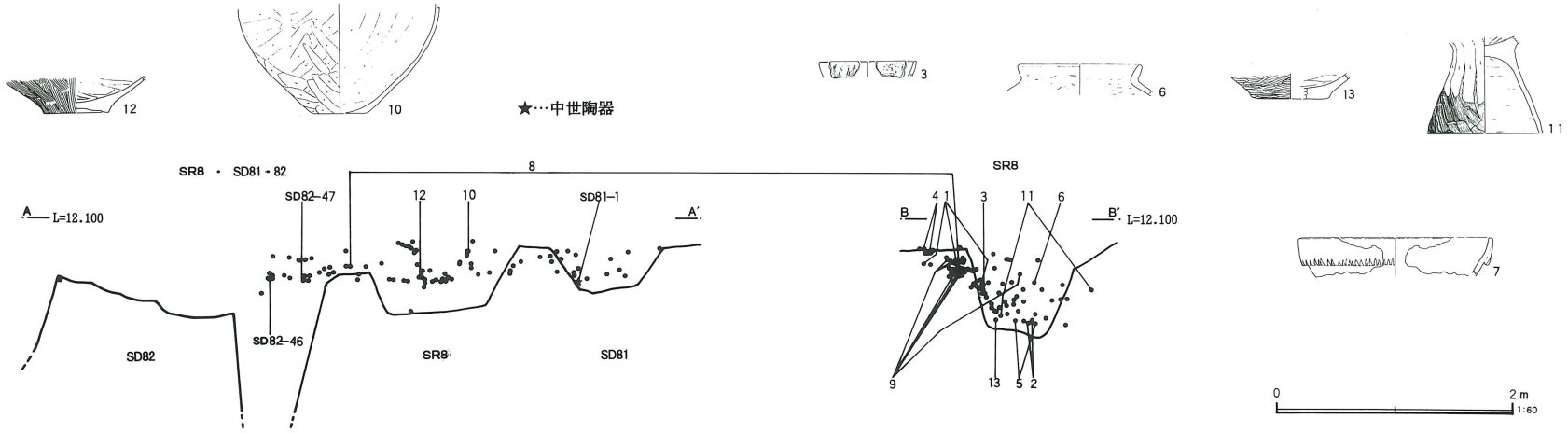
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	椀	(12.8)			BHJ	II	橙	20	
2	器台			(17.4)	ABHJ	III	褐灰	25	
3	小形壺	(11.0)			HJ	II	鈍い赤褐	5	内外面赤彩
4	高坏			(12.0)	BHJ	II	赤褐	10	内外面赤彩
5	鉢				BHJ	II	鈍い赤褐	10	内外面赤彩
6	甕	(14.0)			AEHJ	II	橙	10	
7	壺	(22.0)			HJ	II	鈍い黄橙	10	内外面赤彩(痕跡程度)
8	壺				HJ	II	鈍い黄褐	30	
9	台付甕	(15.0)			AHJ	II	鈍い黄橙	25	
10	甕			(6.0)	HJ	II	鈍い黄褐	30	
11	台付甕			(13.0)	BHJ	II	鈍い黄褐	40	
12	甕			7.4	BHJ	II	褐灰	80	
13	壺			(8.8)	HJ	II	褐	20	

曲する南辺の一部を確認した。検出面では1.6mほどの長さであるが、排水溝に切られているため、実際にはもう少し長くなるであろう。これらを加味して推測すると、南側の開口部は８～９ｍほどと思われる。周溝全体の規模は不明であるが、東西方向で内側は13.9ｍ残存している。外側は19ｍ前後になると思われる。

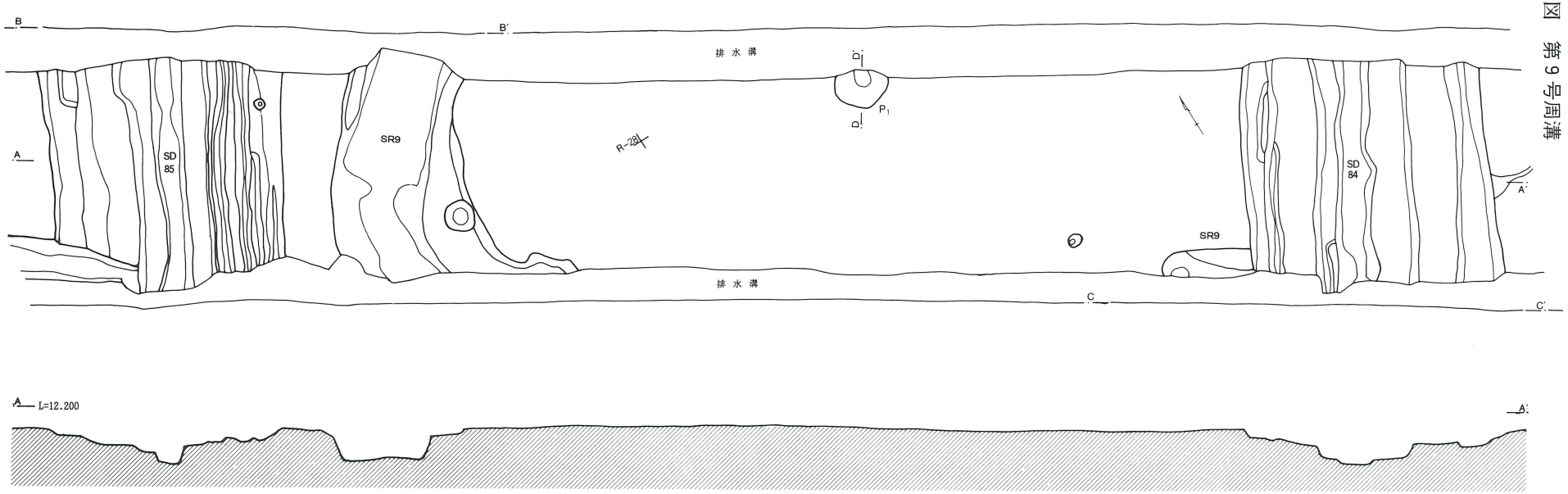
遺物は、破片数で576点記録した。これに本遺構のものと思われる、第84号溝出土遺物を合わせると、総数

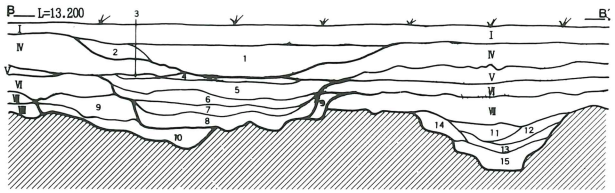
第34図　第８号周溝遺物分布図

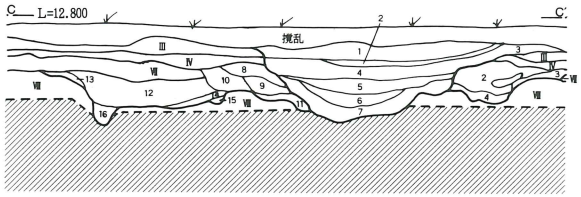


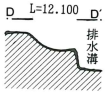


第35図　第９号周溝







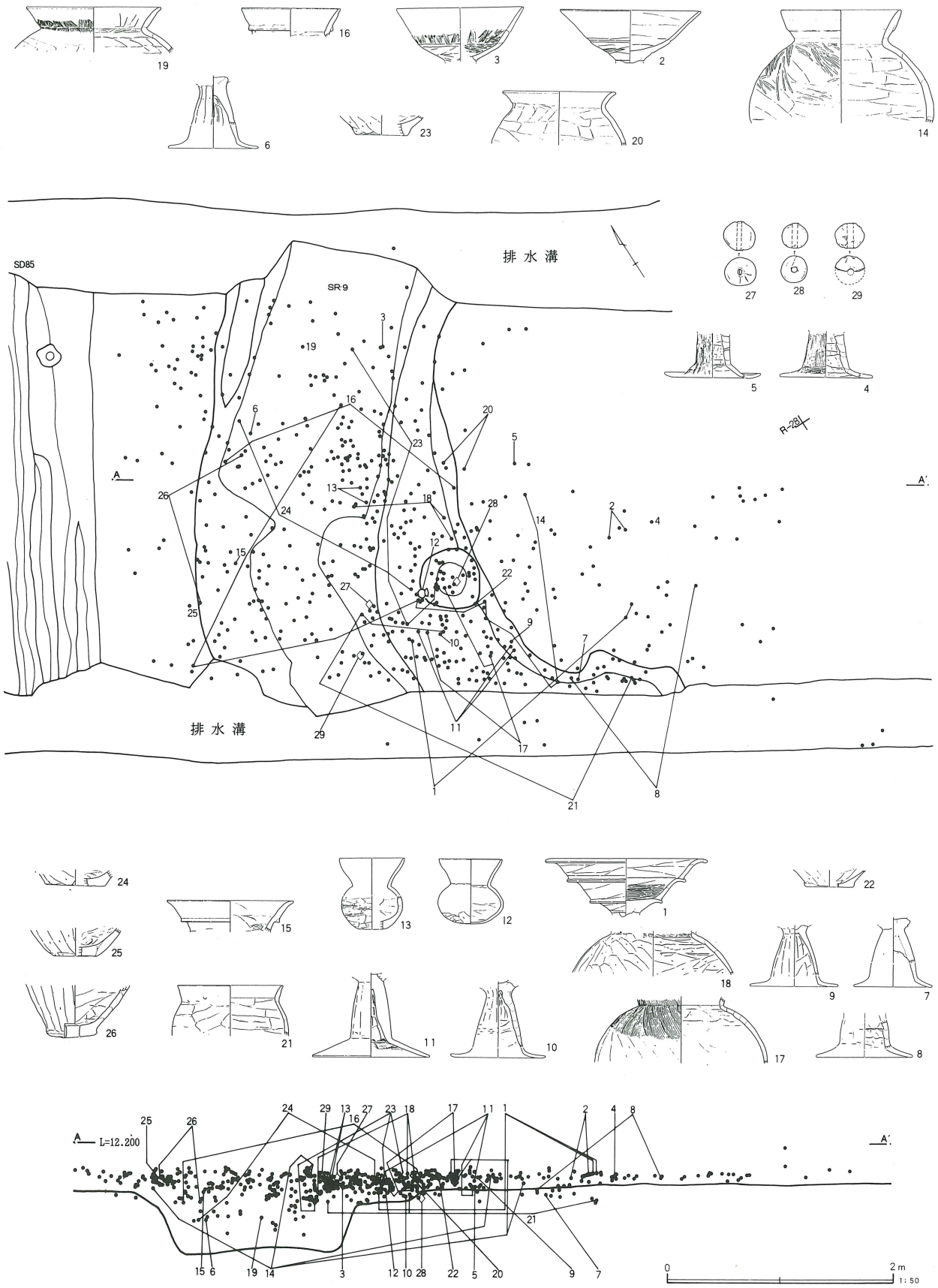


1 灰色土　しまり強 粘性有　Mn 少量　酸化鉄少量
2 灰色土　砂層
3 暗灰色土 しまり強 砂・酸化鉄少量
4 白灰色土 しまり強 粘性有
5 灰色土　しまり強 粘性有
6 灰褐色土 しまり強 粘性有　砂
7 青灰色土 しまり有 粘性やや有　砂少量
8 褐色土　しまり弱 青色粘質土ブロック　酸化鉄少量
9 暗褐色土 しまり弱 粘性やや有　青色粘土ブロック
10 暗褐色土 しまり弱 粘性やや有　青色粘質土　ローム粒子
11 黒色土　しまり有 粘性なし
12 暗褐色土 しまり有 粘性なし　酸化鉄少量
13 黒褐色土 しまり有 粘性なし　ローム粒子少量
14 黒色土　しまり有 粘性なし　ローム粒子少量
15 暗褐色土 しまり有 粘性なし　ローム粒子

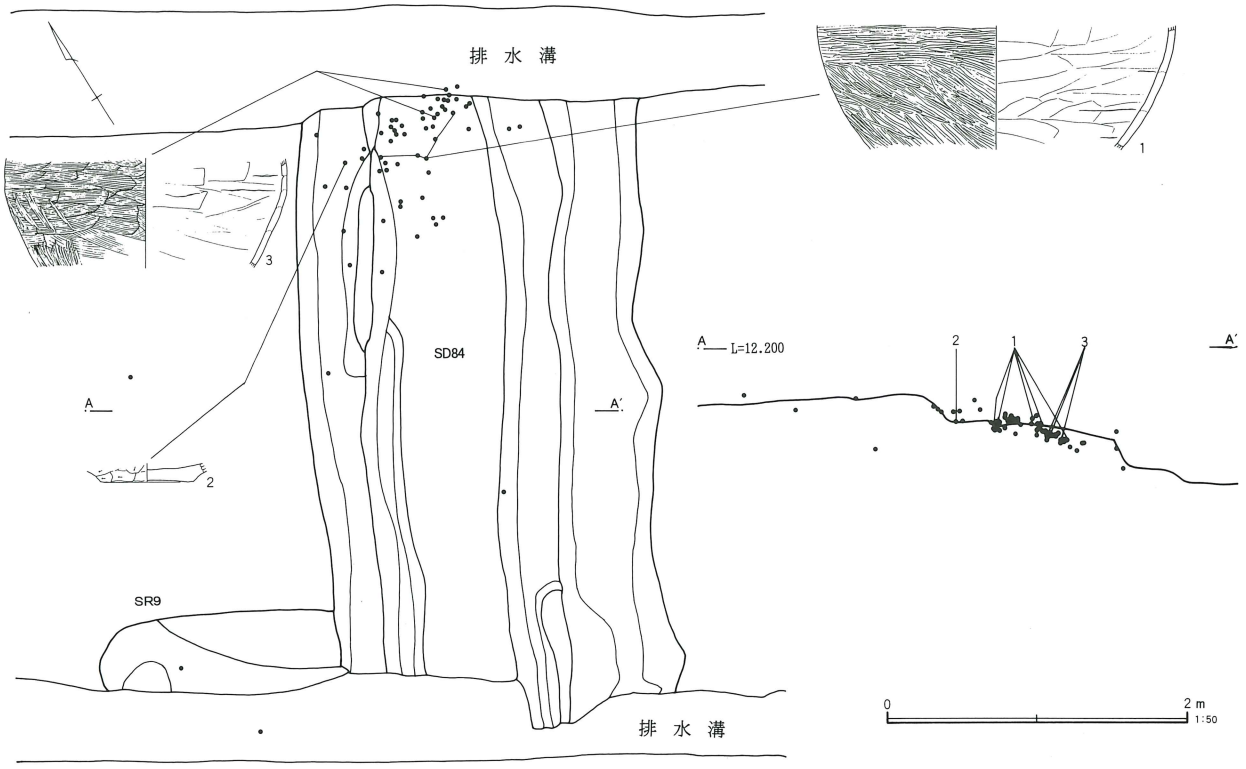
1 灰色土　しまり強 粘性有　Mn 少量　酸化鉄少量
2 白灰色土 しまり強 粘性有　混入物形どなし
3 暗灰色土 しまり強 粘性有　Mn 少量　酸化鉄少量
4 灰色土　しまり強 粘性有
5 灰褐色土 しまり強 粘性有　砂
6 青灰色土 しまり有 粘性やや有　砂少量
7 暗褐色土 しまり弱 青色粘質土ブロック　酸化鉄少量
8 暗褐色土 しまり有 粘性やや有　暗水色…
9 暗褐色土 しまり弱 粘性やや有　青色粘土ブロック
10 暗褐色土 しまり弱 粘性やや有　青色粘土ブロック
11 暗褐色土 しまり弱 粘性やや有　青色粘質土　ローム粒子
12 黒色土　しまり有 粘性なし
13 暗褐色土 しまり有 粘性なし　酸化鉄少量
14 黒褐色土 しまり有 粘性なし　ローム粒子少量
15 黒色土　しまり有 粘性なし　ローム粒子少量
16 暗褐色土 しまり有 粘性なし　ハードローム含む

0　4m
1:110

第36図　第９号周溝遺物分布図(I)



第37図　第９号周溝・第84号溝跡遺物分布図(2)



644点となる。出土状況は、西側の屈曲部周辺に比較的集中しているものの、周溝内側及び外側にも散布が見られる。垂直分布は、確認面前後での分布が最も多く、周溝内に落ち込んでいるものは多くない。周溝内に検出されたものも、覆土中位までで底面から出土したものはない。第36図の垂直分布を見ると、遺物は周溝が殆ど埋まった時期に廃棄されたものであることが窺える。

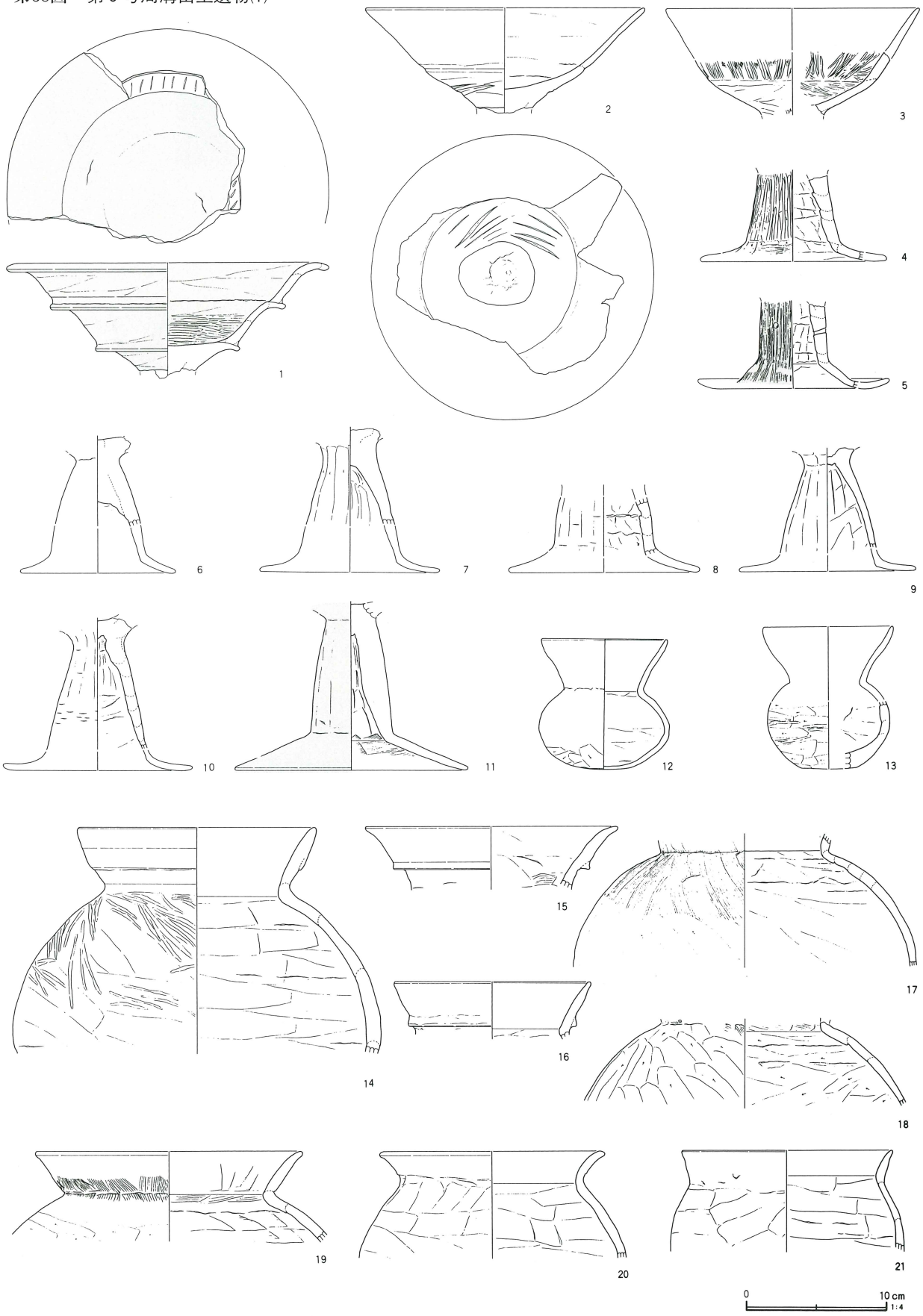
時期は、和泉式期と考えられる。

第10号周溝（第41図）

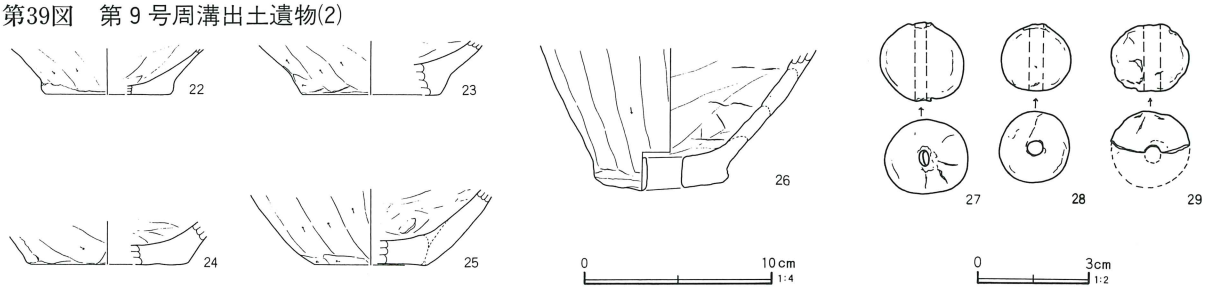
O―26グリッドを中心に位置する。調査時には第91号溝としたものである。第83・92号溝と重複する。調査時の所見では第83号溝のほうが新しく見えたが、第83号溝もⅦ層下の遺構であり大きな時期差はないものと推定される。周溝は浅い溝状で第83号溝の東に伸びている。幅は1.2mまで残存していたが、北側は排水溝に壊されている。深さは10cmである。検出された長さは8.7mほどである。第83号溝は、西側に浅い段が検出された。当初は同溝の一部と認識していたが、土層断面を見ると、これより古い可能性も考えられる。よって、これを第92号溝とした。第10号周溝は、検出時には第83号溝の東側に伸び、そこで止まるものと考えていた。遺物の出土状況を見ると、第10号周溝及び第83号溝の両方に遺物が広がっており、出土状況だけで遺構を決定できない。可能性としては、第92号溝とした部分も周溝とすることもできるだろうが、その場合、西側に対応する部分が検出されない。もうひとつの可能性としては、調査当初の認識どおり第92号溝を第83号溝の一部として捉え、第10号周溝は、北側に伸びると考えるものである。いずれにしても、調査区の幅が限られており、詳しいことはわからない。ここでは、周溝の可能性として後者の考え方を取っておきたい。

遺物は、第10号周溝で205点、第83号溝で133点、第92号溝で14点で総数は352点記録した。出土する傾向

第38図　第９号周溝出土遺物(1)



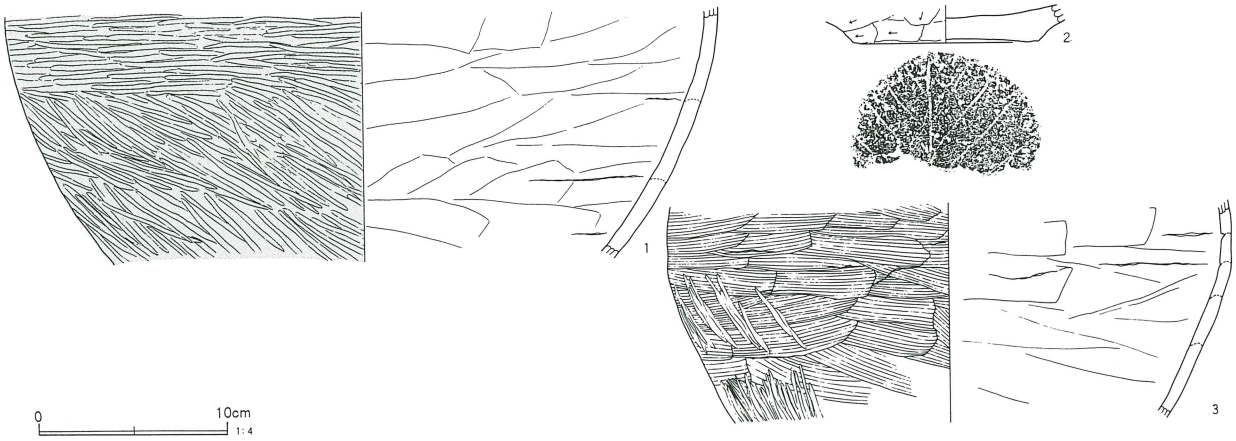
第39図　第９号周溝出土遺物(2)



第７表　第９号周溝出土遺物観察表

番号	器　種	口 径	器 高	底 径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	高坏	(23.0)			ABEHJ	II	赤褐	40	内外面赤彩
2	高坏	(20.0)			AEHJ	III	橙	60	砥石に転用
3	高坏				BDHJ	II	鈍い褐	25	
4	高坏				HJ	II	灰黄褐	40	
5	高坏				HJ	II	赤褐	90	内外面赤彩　脚柱部穿孔３ヵ所
6	高坏				HJ	III	鈍い橙	50	
7	高坏				BHJ	II	鈍い赤褐	60	
8	高坏				HIJ	II	鈍い橙	15	
9	高坏				EHJ	II	鈍い赤褐	60	
10	高坏				BHJ	II	鈍い橙	80	
11	高坏			(16.6)	BHJ	II	赤褐	60	外面・坏部内面赤彩
12	小形壺	9.0	9.2	4.2	BHJ	II	鈍い橙	100	
13	小形壺			(3.8)	HJ	II	鈍い褐	15	
14	壺	(17.0)			BHJ	II	鈍い橙	30	
15	壺	(18.0)			AHJ	II	鈍い褐	10	
16	壺	(14.0)			BHJ	II	鈍い黄橙	10	
17	甕				BHJ	II	鈍い褐	20	
18	甕				HJ	II	灰黄褐	15	
19	甕	(19.0)			BHJ	II	鈍い黄橙	15	
20	甕	(16.0)			EHJ	II	黒褐	15	
21	甕	(15.0)			HJ	II	鈍い黄橙	15	
22	甕			(7.0)	AEHJ	III	鈍い橙	20	
23	甕			(7.4)	EHJ	III	褐	20	
24	甕			(8.6)	EHJ	III	灰褐	15	
25	甕			(6.0)	EHJ	II	鈍い橙	15	
26	甑			7.1	BHJ	III	鈍い黄橙	60	孔径1.9cm
27	土玉	直径2.20cm	孔径0.30cm		HJ	II	鈍い黄橙	100	重さ8.42ｇ
28	土玉	直径1.85cm	孔径0.40cm		HJ	II	鈍い黄橙	100	重さ4.19ｇ
29	土玉	直径2.00cm	孔径0.40cm		HJ	III	灰黄褐	50	重さ3.20ｇ

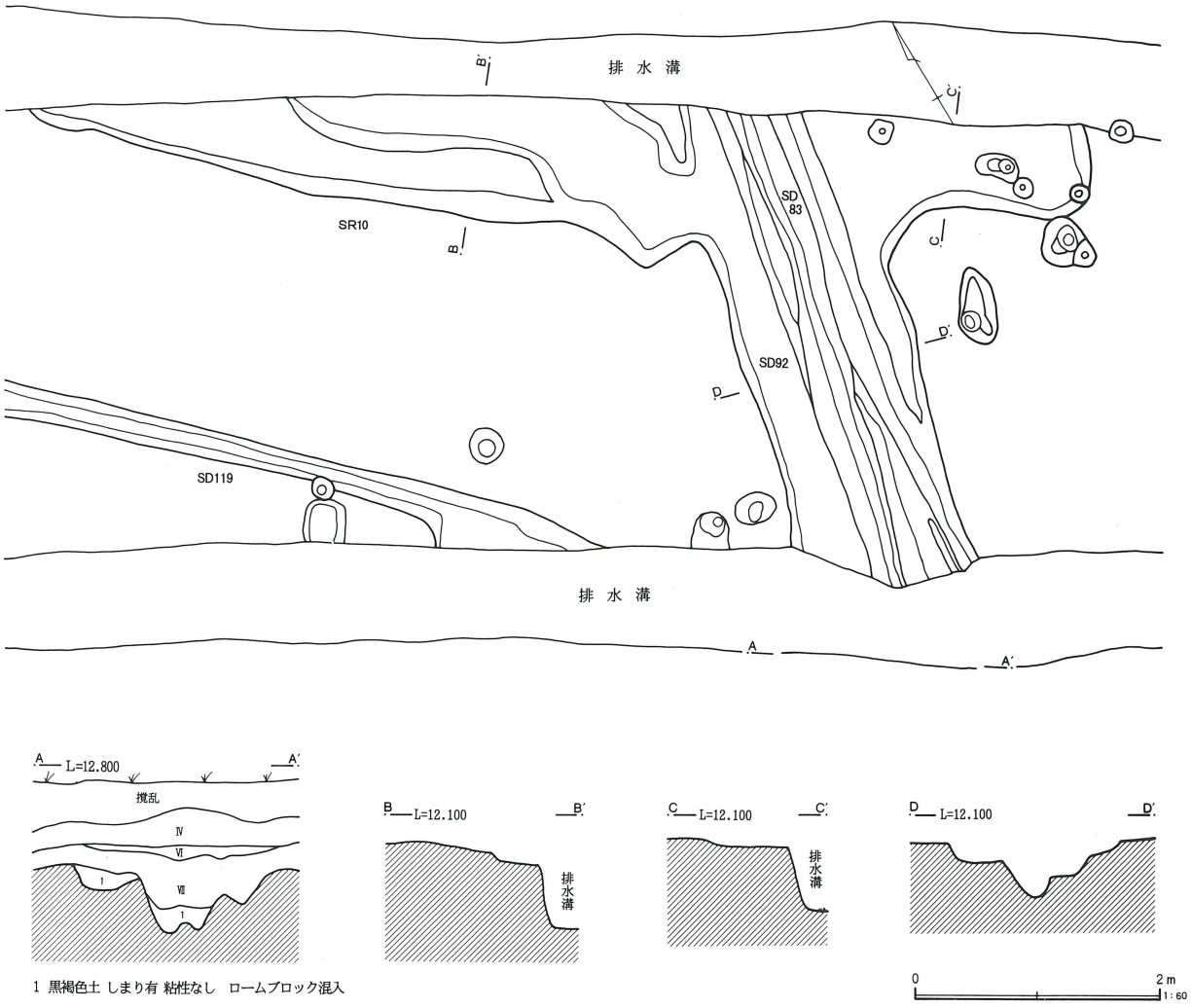
第40図　第84号溝跡出土遺物



第８表　第84号溝跡出土遺物観察表

番号	器　種	口 径	器 高	底 径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	壺				HJ	II	赤褐	15	外面赤彩
2	甕			9.8	BHJ	III	鈍い褐	50	底部木葉痕
3	甕				HJ	III	褐	10	

第41図　第10号周溝



1 黒褐色土 しまり有 粘性なし　ロームブロック混入

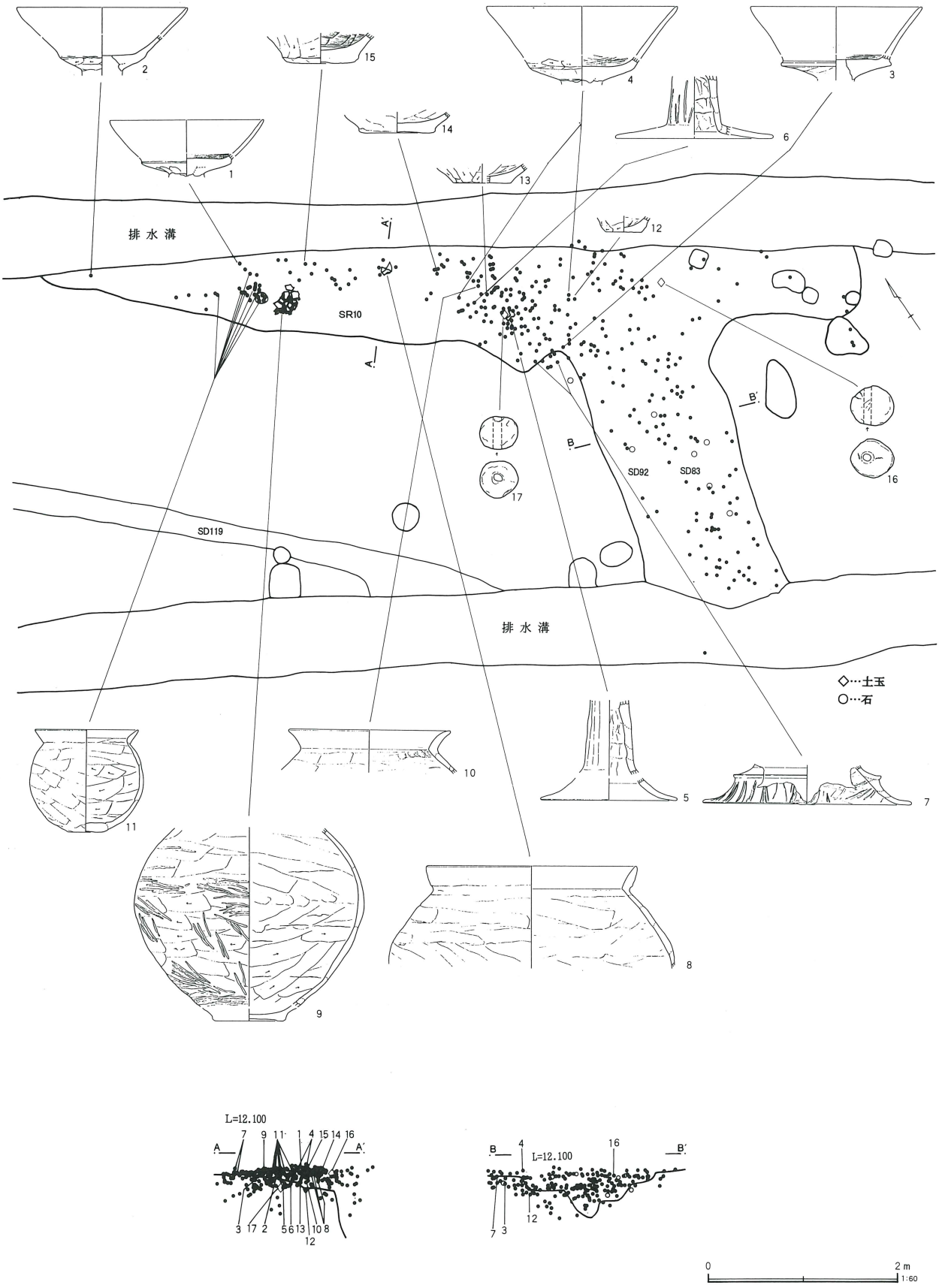
は他の周溝と同様である。内容は、高坏・甕・壺・土玉などであるが、高坏が多いのが特徴である。

時期は和泉式期と考えられる。

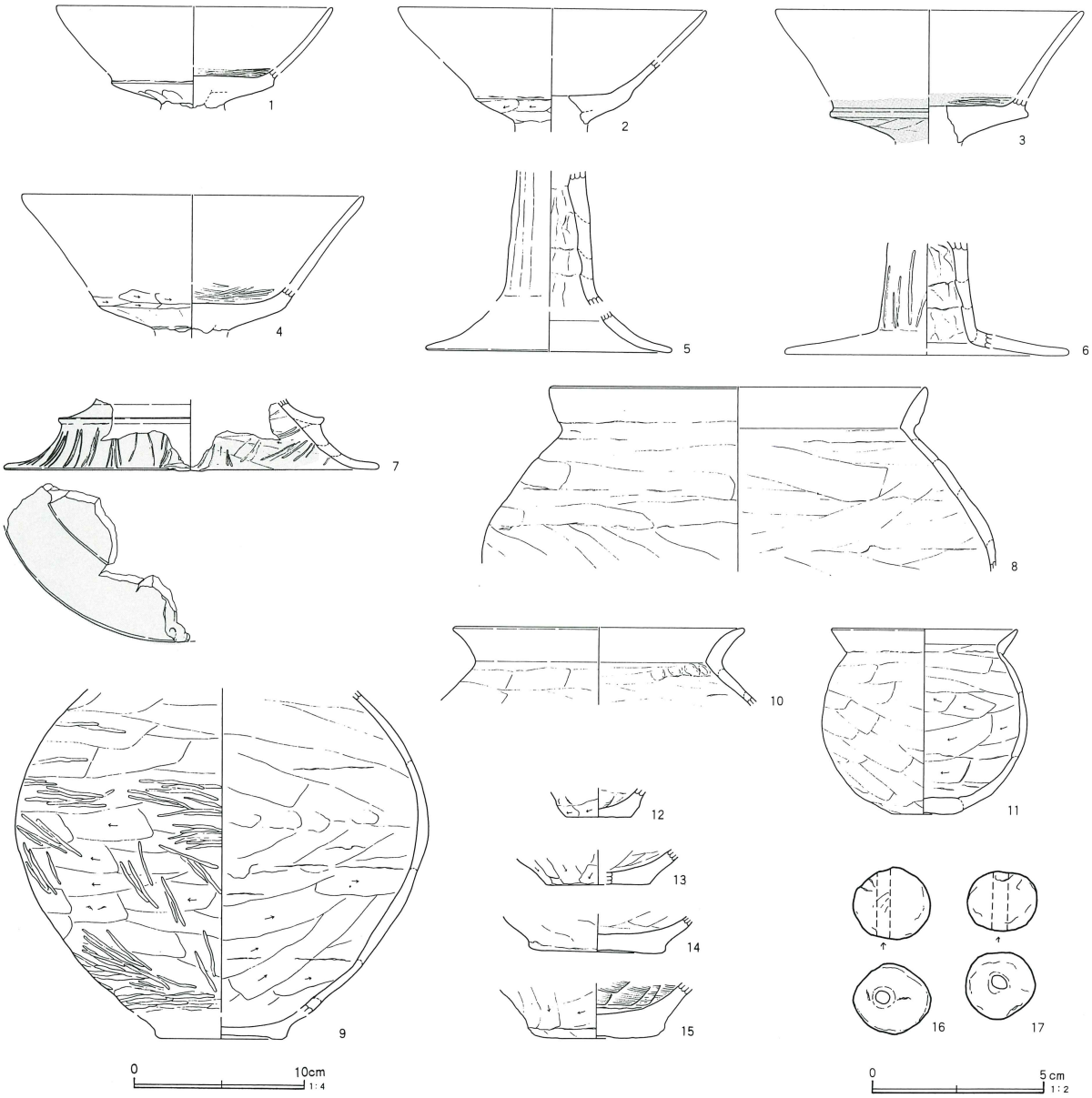
第11号周溝（第45図）

Ｐ―26グリッドを中心に位置する。南側約半分の検出である。南辺も外側がわずかに排水溝にかかっていた。平面形は、方形乃至長方形を呈すると考えられる。周溝が方形に廻るものである。角はほぼ直角に曲がる。東側に第119号溝が接続している。第119号溝は西側に延びないため、本遺構に関連するものと考えられる。南辺内側に第182号土壙と呼称した土壙状の浅い落ち込みが確認された。覆土が周溝のものと同様であるこ

第42図　第10号周溝遺物分布図



第43図　第10号周溝出土遺物



第９表　第10号周溝出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	高坏				HJ	II	鈍い赤褐	30	
2	高坏				BHJ	II	明赤褐	15	
3	高坏				HJ	II	鈍い赤褐	30	内外面赤彩
4	高坏				HJ	II	鈍い赤褐	50	
5	高坏			(14.4)	HJ	II	鈍い橙	15	
6	高坏				HJ	II	鈍い橙	20	
7	高坏			(22.0)	HJ	II	明赤褐	20	内外面赤彩　脚裾部補修痕
8	甕	(22.0)			HJ	II	鈍い褐	15	
9	壺				ABHJ	II	鈍い橙	60	
10	甕	(17.0)			HJ	II	鈍い褐	20	
11	甕	(10.8)	10.8	3.6	HJ	II	鈍い赤褐	55	
12	甕			(3.8)	BEHJ	II	褐灰	40	
13	甕			(6.0)	HJ	II	灰褐	20	
14	甕			(8.0)	BHJ	III	鈍い橙	40	
15	甕			(8.0)	EHJ	II	鈍い黄橙	30	
16	土玉	直径2.30cm　孔径0.40cm			HJ	II	灰黄褐	100	重さ7.55ｇ
17	土玉	直径2.00cm　孔径0.45cm			HJ	II	黒褐	100	重さ5.70ｇ

と、遺物の出土状態から、第119号溝と同じく本遺構に関連するものと考えられる。内側にはピットと土壙がそれぞれ1基検出されたが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。周溝は、幅28～50cm、深さ5cmである。第119号溝と接続する部分の、周溝内南側は堰状にわずかに掘り残してあった。検出された規模は東西方向外側で6.2m、内側で5.5mである。主軸方位は、仮に南北方向を主軸とするとN—32°—Eである。第182号土壙は、南辺西寄りに周溝に接して検出された。検出時には重複関係は見られなかった。平面形は、長方形を呈する。南側は周溝に接続し、開口していたものと思われる。底面は周溝に向かってやや下がっている。長さは周溝まで1.2m、幅95cm、深さは10～15cmである。

遺物は土壙の検出面を中心に出土した。

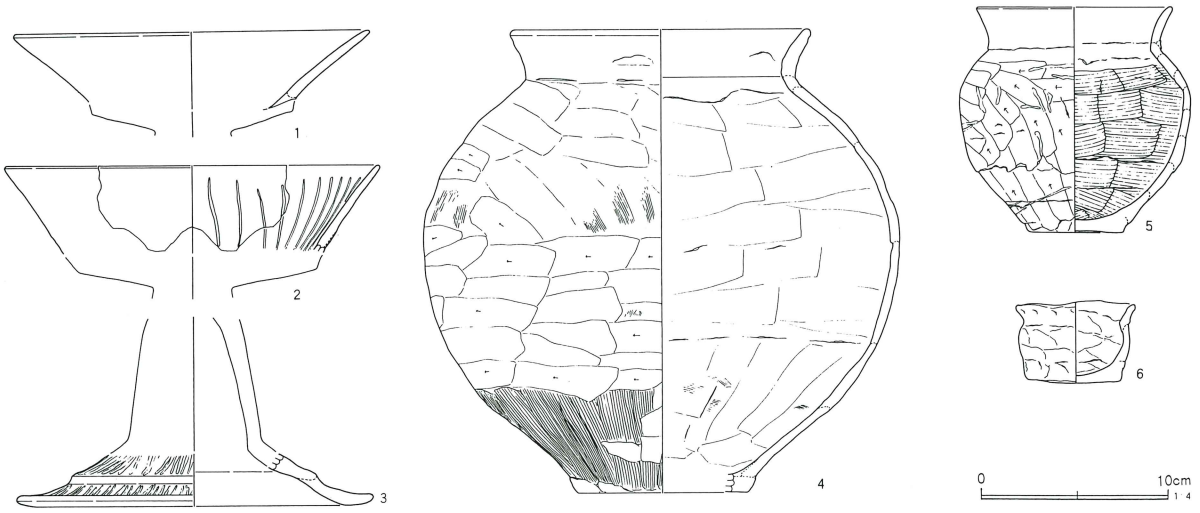
時期は和泉式期と考えられる。破片数は46点で、実測できた個体は高坏・甕・手捏ね土器など6点である。

第12号周溝（第46図）

T—29グリッドを中心に位置する。東側は第86号溝と重複し、壊されていた。南側は調査区外になる。平面形は，第11号周溝と同じく、方形乃至は長方形になるものと考えられる。検出されたのは北側の角にあたり、直角に曲がる。内側には小ピットが2基検出された。排水溝にかかるピットが、その位置から本遺構に伴う柱穴の可能性がある。ピットの深さは60cmである。周溝の幅は16～31cm、深さは10cmである。全体の規模はわからないが、検出された範囲では東西方向外側で5m、南北は2.15mである。主軸方位は、南北方向に取るとN—37°—Eである。北側1.2mほどの間隔を置いて第122号溝が検出された。また、西側には同溝につながって第186号とした土壙が検出された。確認時にはもやもやした染み状のもので、それぞれ別の遺構として認識していたが、本遺構の外側を廻る「周溝」として一体のものである可能性が考えられる。

遺物は、本遺構からは出土していないが、第186号土壙から土師器細片が少量出土した。

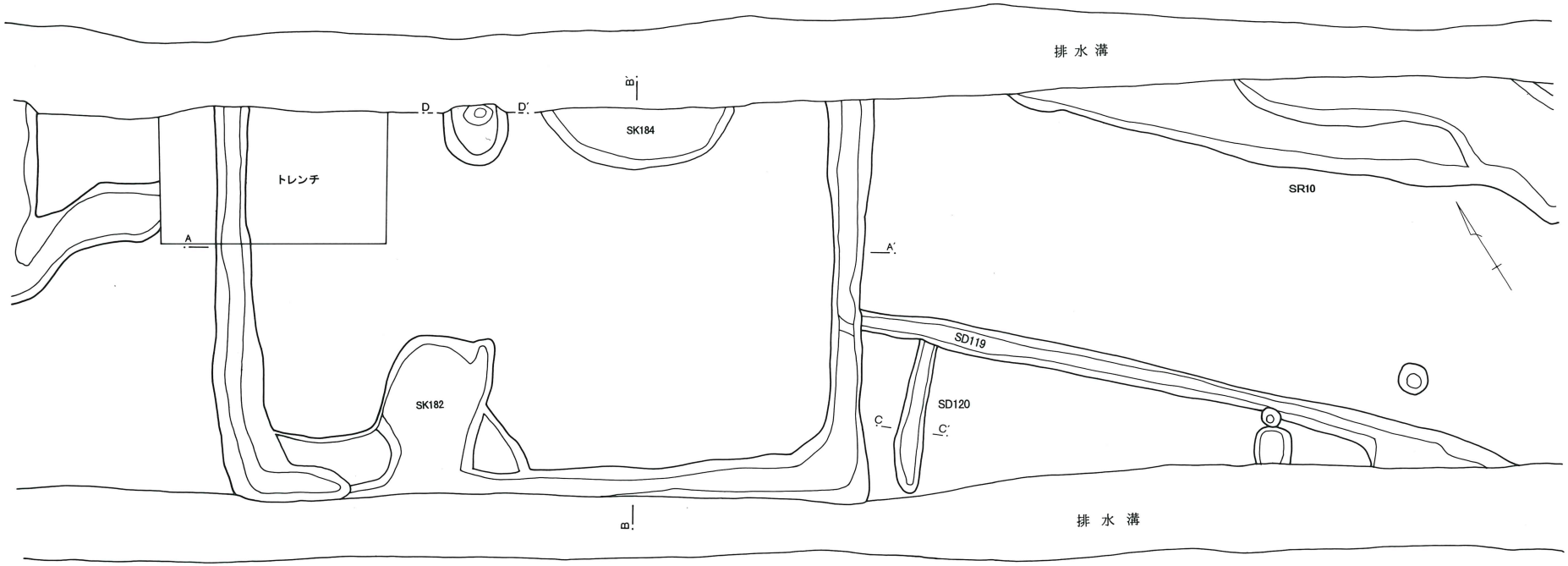
第44図　第182号土壙出土遺物

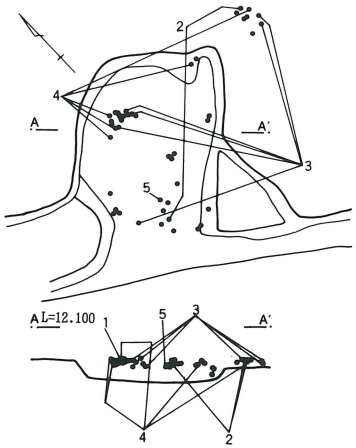


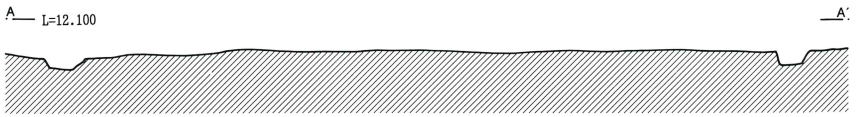
第10表　第182号土壙出土遺物観察表

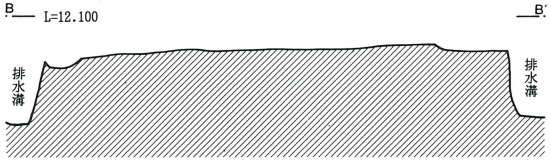
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	高坏	(19.0)			BHJ	Ⅲ	明赤褐	10	
2	高坏	(20.0)			BHJ	Ⅱ	鈍い赤褐	10	
3	高坏			(19.0)	BHJ	Ⅱ	鈍い橙	20	
4	甕	(16.0)	24.4	(9.0)	HJ	Ⅱ	灰褐	30	
5	甕	(10.4)	11.9	5.0	BHJ	Ⅱ	鈍い褐	55	
6	手捏土器	6.4	4.3	5.0	HJ	Ⅱ	明褐	90	

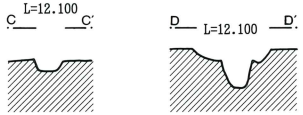
第45図　第11号周溝







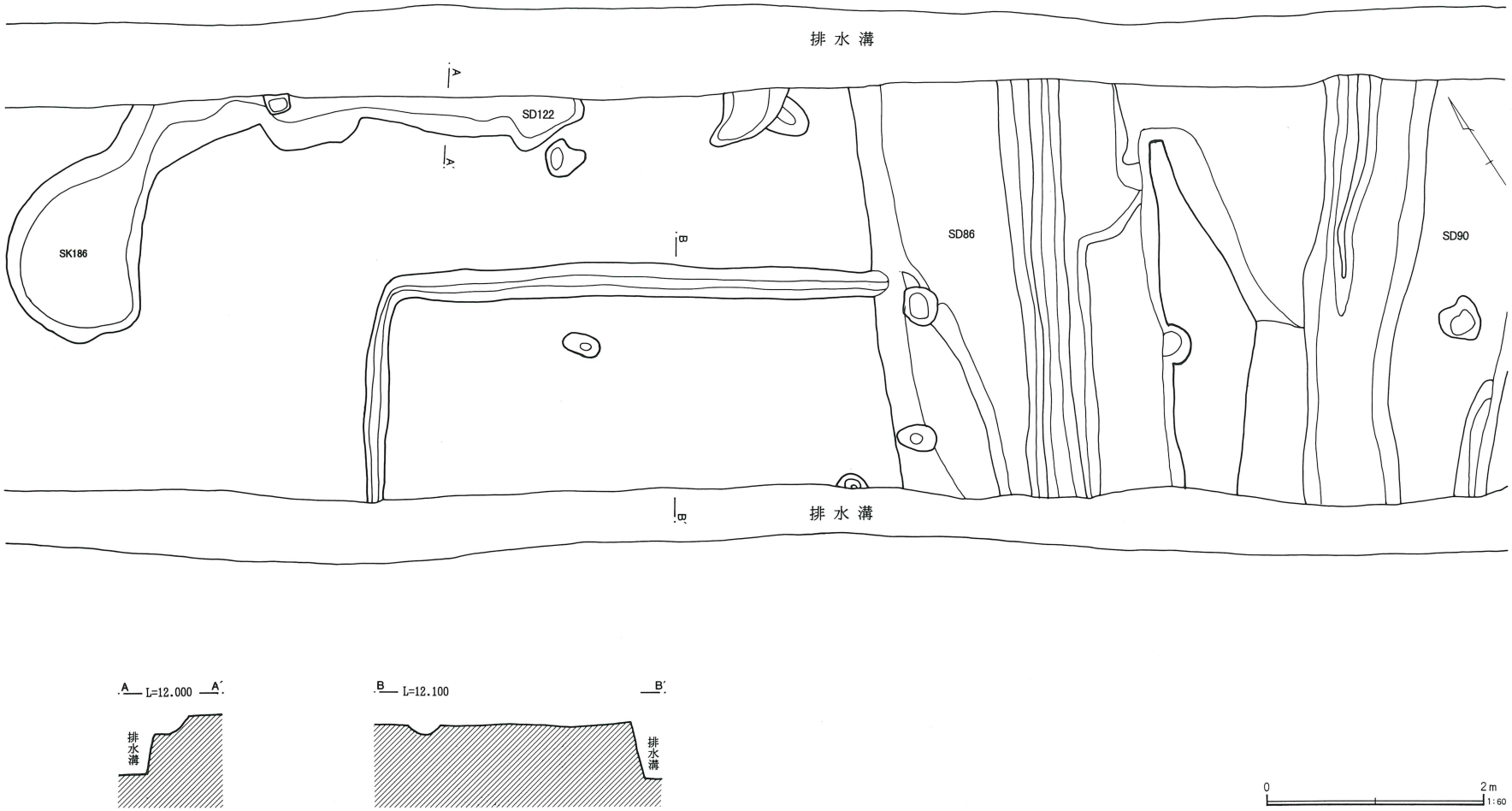




0　1m　1:50

0　2m　1:60

第46図　第12号周溝


排水溝
SD122
SK186
SD86
SD90
排水溝
A
A'
B
B'
A L=12.000 A'
排水溝
B L=12.100 B'
排水溝
0
2m
1:60

(4) 掘立柱建物跡

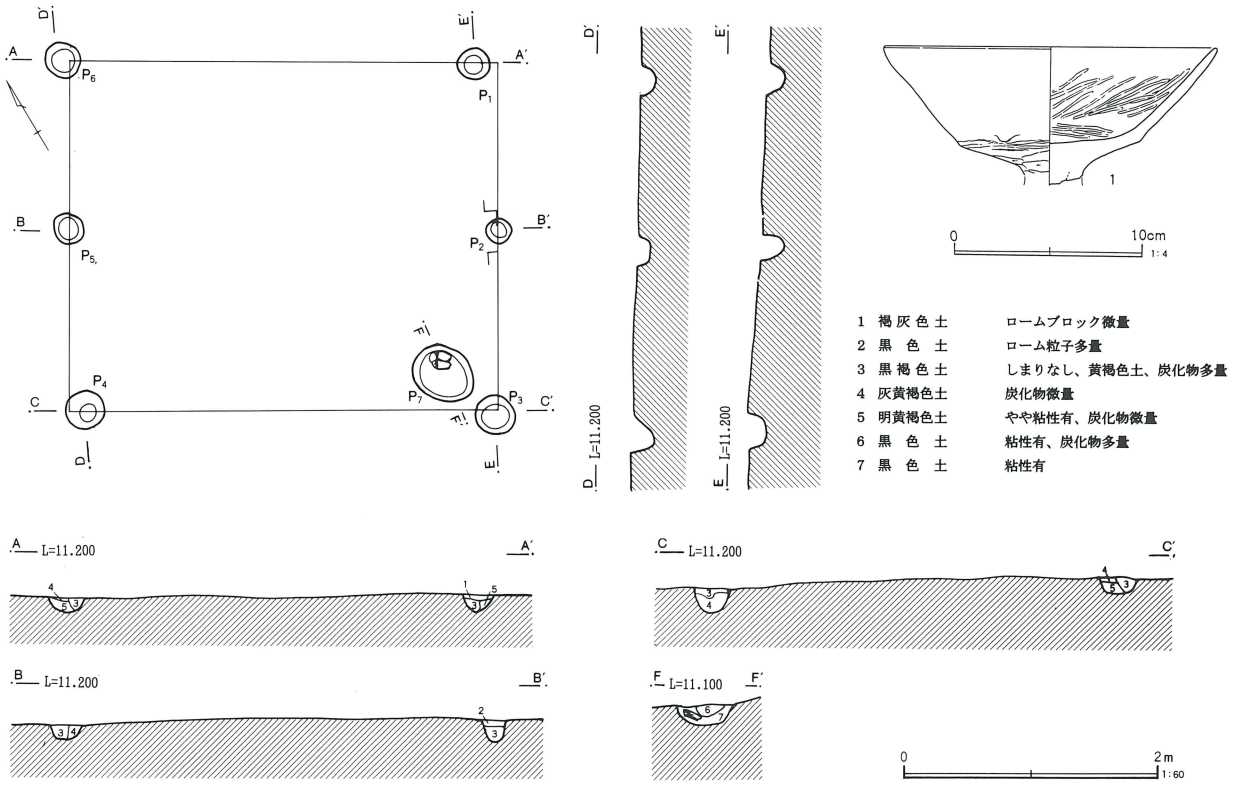
掘立柱建物跡は１棟検出された。住居跡や周溝から北東方向に約30m離れている。周囲には同時期と判断できる遺構はなく、建物跡も根拠は薄いが他の遺構との関係からこの時期のものと思われる。

第10号掘立柱建物跡（第47図）

G―29グリッドで検出された。調査区北側寄りにあたる。この部分は、検出面が低いため、柱穴は底部しか残っていなかった。規模は２間×１間である。柱間は桁行3.3m、梁行2.7mである。軸方位はN―31°―Eである。この数値は住居跡や周溝の示す値に近いものと考える。柱穴はいずれも円形で、検出面での直径は20～40cm、深さは10～18cmである。柱穴からは遺物の出土はなかった。建物内側の南隅部分にピット（Ｐ７）が検出された。楕円形を呈し、大きさは52×41cm、深さは16cmである。ここからは土師器高坏の坏部が出土している。直接的な根拠ではないが、位置関係から建物に伴うものと考えたい。

建物は、位置的には第47号溝の延長上にある。第47号溝はこの部分では消失しているが、これは確認面が下がっているためで実際には調査区外に続いている。したがって、本建物と第47号溝は重複してしまうため、同時期に存在したとは考えられない。また、溝廃絶後は、周辺は水田として利用されていたと考えられることから、溝廃絶以降の所産とは考え難い。可能性としては第47号溝以前の遺構と考えるのが妥当と思われる。

第47図　第10号掘立柱建物跡・出土遺物



第11表　第10号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口 径	器 高	底 径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	高坏	17.7			HJ	II	黒褐	95	

(5) 井戸跡

第17号井戸跡（第48図）

H—23グリッドで検出された。遺構との重複はない。方形を呈する。底面は段を持ち、西半分が約20cmほど深くなる。規模は、90×90cmで、深さは88cmである。覆土の堆積状況は自然堆積と思われるが、検出面から約60cmの所で地下水位に達したため、一番底の土層は不明確である。

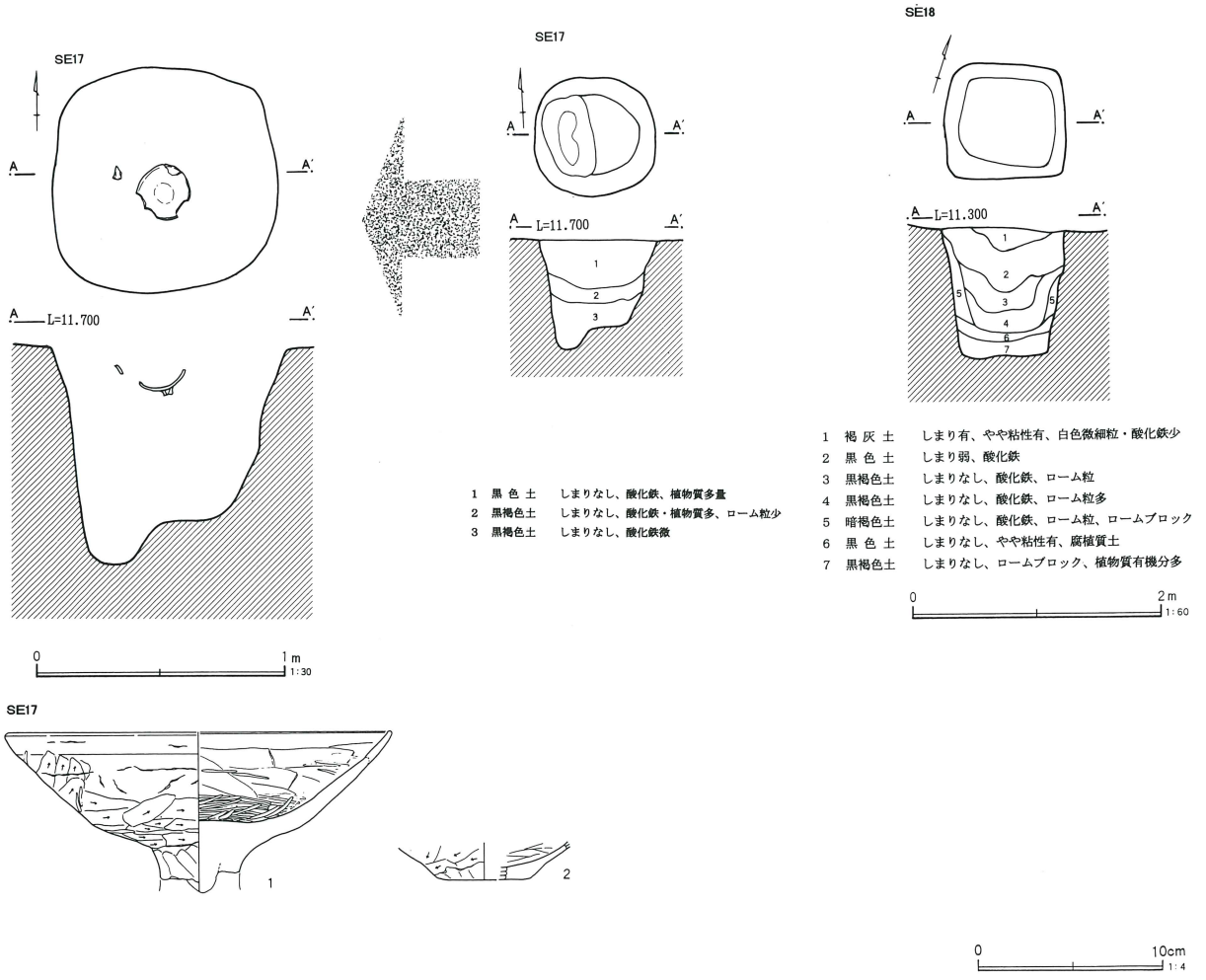
遺物は、覆土上層で高坏の坏部と甕の底部と思われる破片が出土した。

第18号井戸跡（第56図）

H—28グリッドで検出された。第46号溝と重複し、これより古い。平面形は方形を呈する。大きさは1.0×0.94mである。深さは、1.05mである。底面は、断面図では西側がやや下がっているが、ほぼ平坦といっていい。平面、断面形態ともに、井戸の掘り方は前2者とは明らかに異なっている。

遺物は、土師器甕と思われる細片が2片出土した。

第48図　井戸跡・出土遺物



第12表　井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	高坏	21.0			BHJ	II	鈍い赤褐	90	SE17
2	甕			(5.0)	BHJ	II	鈍い黄橙	15	SE17

(6) 溝跡

第83号溝跡（第44図）

O—25・26グリッドで検出された。第10号周溝・第92号溝跡と重複する。第10号周溝より新しいと思われるが時期差は少ないと考えられる。長さ４ｍ、幅１ｍを検出した。深さは40cm前後である。底面はほぼ平坦である。

遺物は、第10号周溝で述べたように、破片数で133点記録したが、細片が多く図示できたものはない。

第87号溝（第49図）

R—28からS—29グリッドで検出された。北西から南東に伸びる溝である。北西端は第90号溝の手前で止まる。第85・88号溝と重複し、第85号溝より古く、第88号溝よりは新しいと思われた。長さ10.2m、幅0.4～0.9m、深さ20～27cmである。

遺物は、土師器高坏脚部、甕底部破片等23点が出土した。

第88号溝（第49図）

道路部分S—28・29グリッドで検出された。北西から南東方向に伸びる溝である。第87号溝とほぼ並行する。北西端は第90号溝にぶつかる。第85・87号溝と重複している。第85号溝より古く、第87号溝より古いと思われる。長さ6.4m、幅0.3～0.45m、検出面からの深さ10cm前後である。

遺物は、土師器小片が５点出土した。

第90号溝跡（第49図）

S—29・T—29グリッドで検出された。調査区を南北方向に横断する。土層断面を見ると他の周溝と同じくⅧ層上面から掘り込まれており、覆土も類似するものであることから、本遺構も同時期のものである。検出面での長さ４ｍ、幅は2.5m、深さは40cmである。底面は、東側が５～10cmの段を持ち浅くなる。東側に第88号溝が接続している。第88号溝も同時期と考えたい。

遺物は86点記録した。分布は比較的散漫である。垂直分布は覆土上位に多い傾向にあり、底面及び底面近くからの出土は少ない。図示できたのは６点である。

第92号溝跡（第44図）

O—25・26グリッドで検出された。第10号周溝、第83号溝と重複する。第83号溝より古い。第10号周溝との新旧は不明である。幅55cm、長さ４ｍを検出した。深さは20cm前後である。

遺物は第83号溝とともに小破片が出土した。

第119号溝（第24図）

O—26グリッドで検出された。北西から南東に伸びる溝で、北西側は５号住居跡に続く。関連するものと考えたい。南東側は調査区外に続くが、調査区際でやや広がっている。第120号溝と覆土が同じことから同時期と思われる。検出された長さ6.3m、幅0.25m、深さは10cm前後である。

遺物は、出土しなかった。

第120号溝（第24図）

O—26グリッドで検出された。南側は調査区内で止まる。北側は第119号溝と直角にぶつかる。覆土が同じであることから同時期と思われる。他に重複する遺構はない。検出された長さ1.4m、幅0.22m、深さは９cmである。

遺物は、出土しなかった。

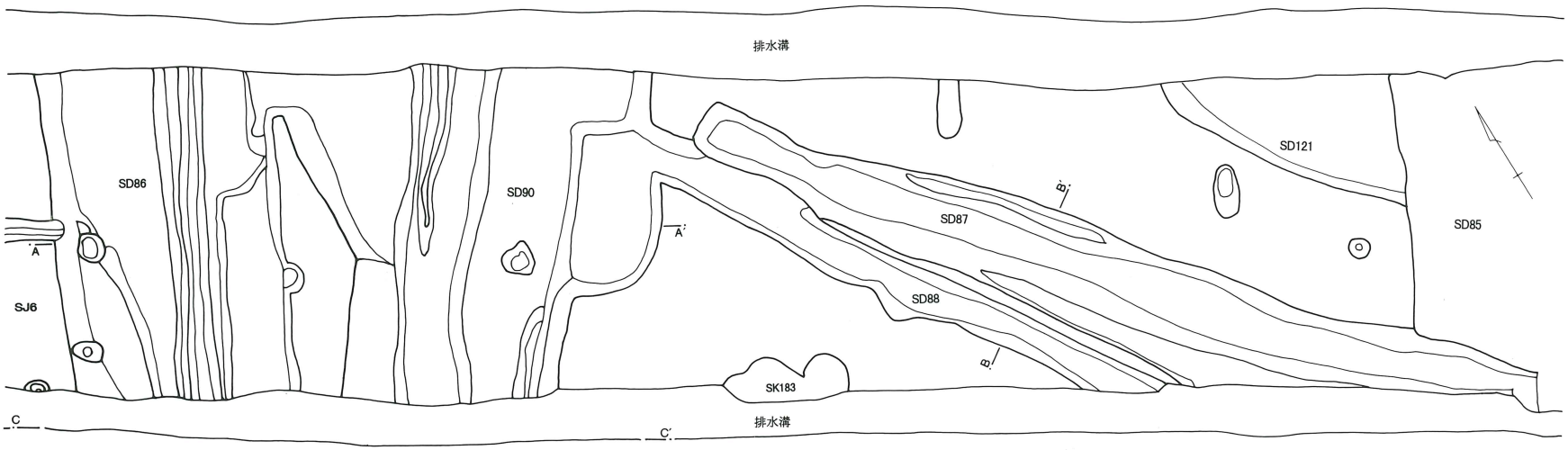
(7) 土壙

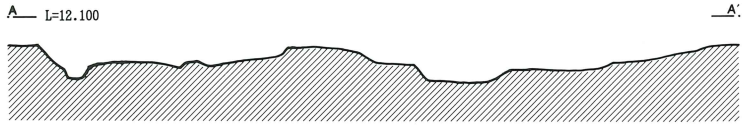
第77号土壙（第51図）

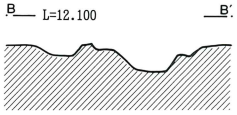
J—23グリッドで検出された。第60号溝の下から検出された。平面形は隅丸方形を呈する。大きさは0.52×0.46mで、深さは56cmである。覆土上位で特に遺物の出土が多く、土層断面は記録できなかったが、覆土は比較的しまりの弱い暗褐色土でローム粒をわずかに含んでいた。深さの割には上下の土層の変化は殆ど見られなかった。

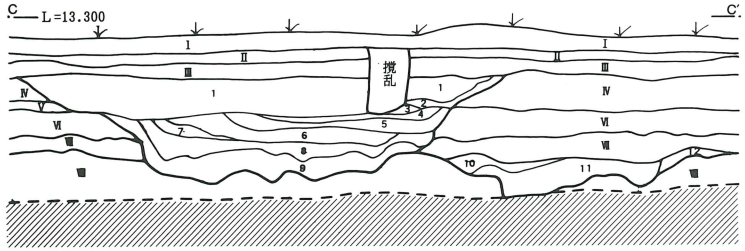
遺物は、覆土上位で破片がぎっしり詰まった状態で検出された。記録を取りながら掘り下げたところ、高坏及び甕の大型の破片が出土した。遺構の大きさに対する遺物の量や内容からは、住居跡の貯蔵穴を思わせ

第49図　第86・87・88・90号溝跡





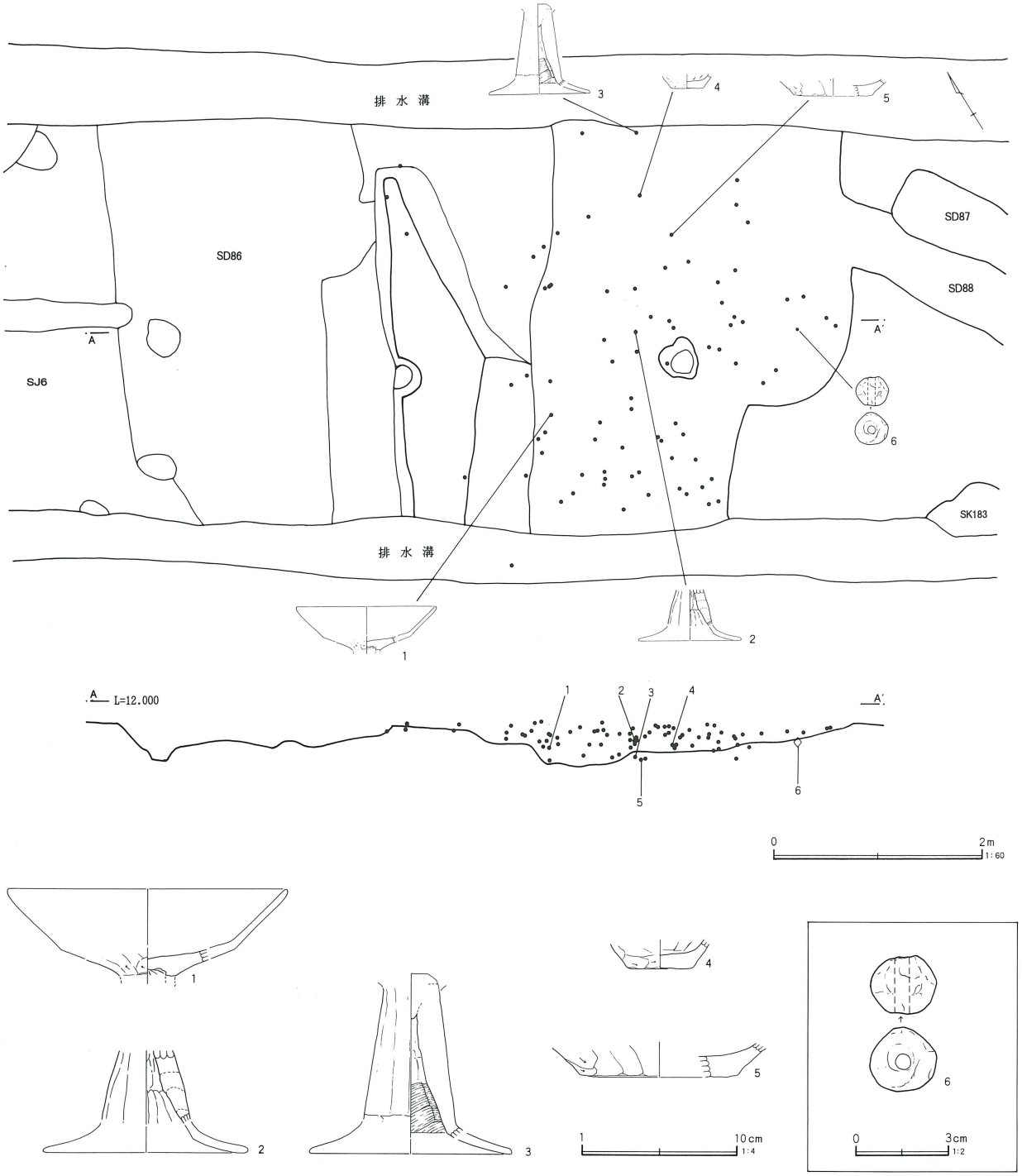




1 灰色土　しまり強　粘性有　Mn・酸化鉄少量
2 灰色土　砂層
3 暗灰色土　しまり強　砂少量　酸化鉄少量
4 白灰色土　しまり強　粘性有　混入物少ない
5 灰色土　しまり強　粘性有　混入物少ない
6 灰褐色土　しまり強　粘性有　砂混入
7 青灰色土　しまり有　やや粘性有　砂混入
8 暗褐色土　しまり弱　青色粘質土ブロック混入　酸化鉄少量
9 暗褐色土　しまり弱　やや粘性有
10 黒褐色土　しまり弱　青色粘質土粒子少量　ロームブロック混入
11 暗褐色土　しまり弱　ロームブロック混入

0　2 m
1:80

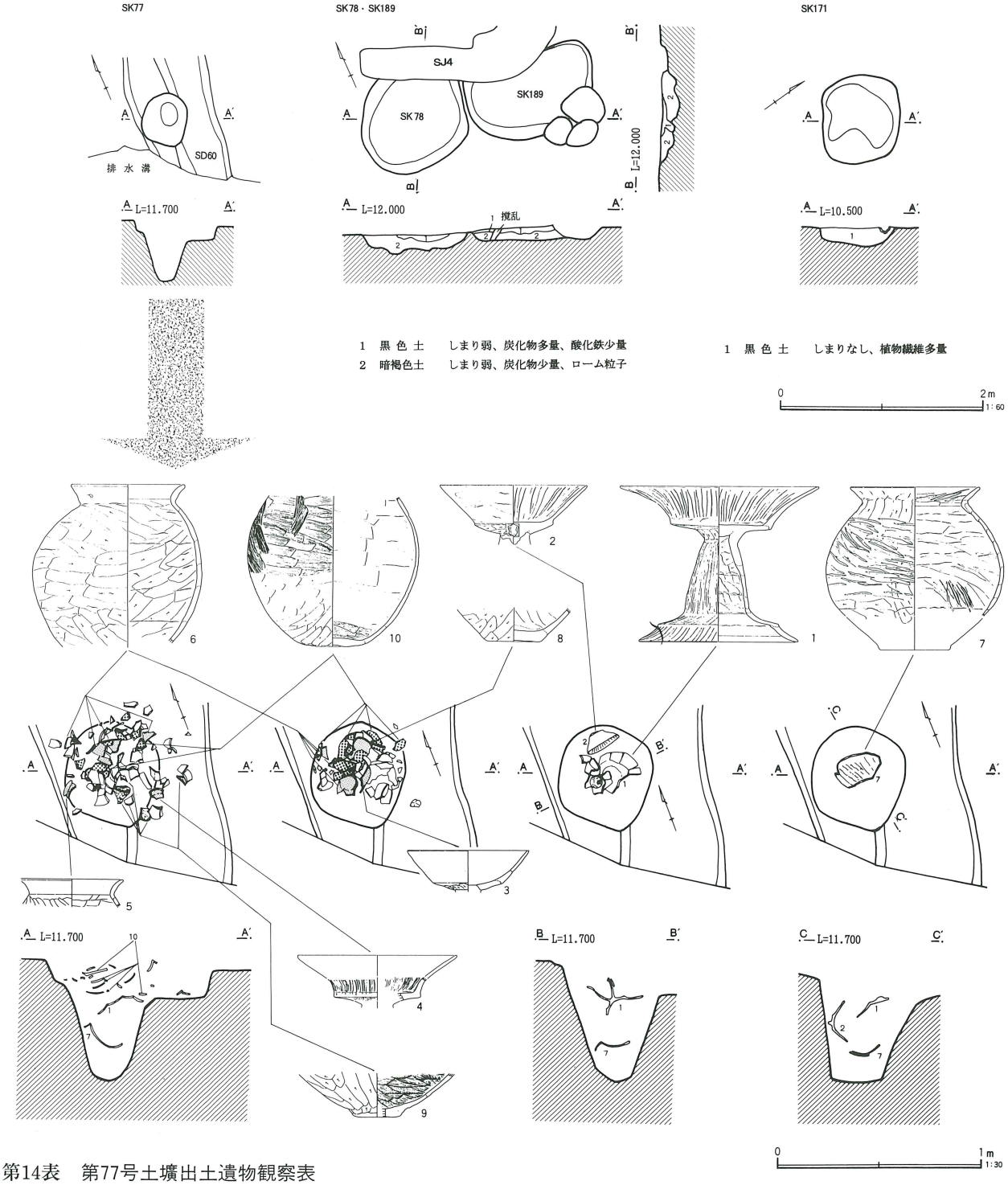
第50図　第90号溝跡遺物分布図・出土遺物



第13表　第90号溝跡出土遺物観察表

番号	器　種	口 径	器 高	底 径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	高坏				BHJ	Ⅲ	鈍い赤褐	40	
2	高坏				BHJ	Ⅲ	鈍い褐	20	
3	高坏				BHJ	Ⅱ	鈍い赤褐	90	
4	甕			(4.2)	HJ	Ⅱ	鈍い橙	20	
5	甕			(10.0)	BHJ	Ⅲ	褐	15	
6	土玉	直径2.10cm　孔径0.50cm			HJ	Ⅱ	鈍い褐	100	重さ5.91ｇ

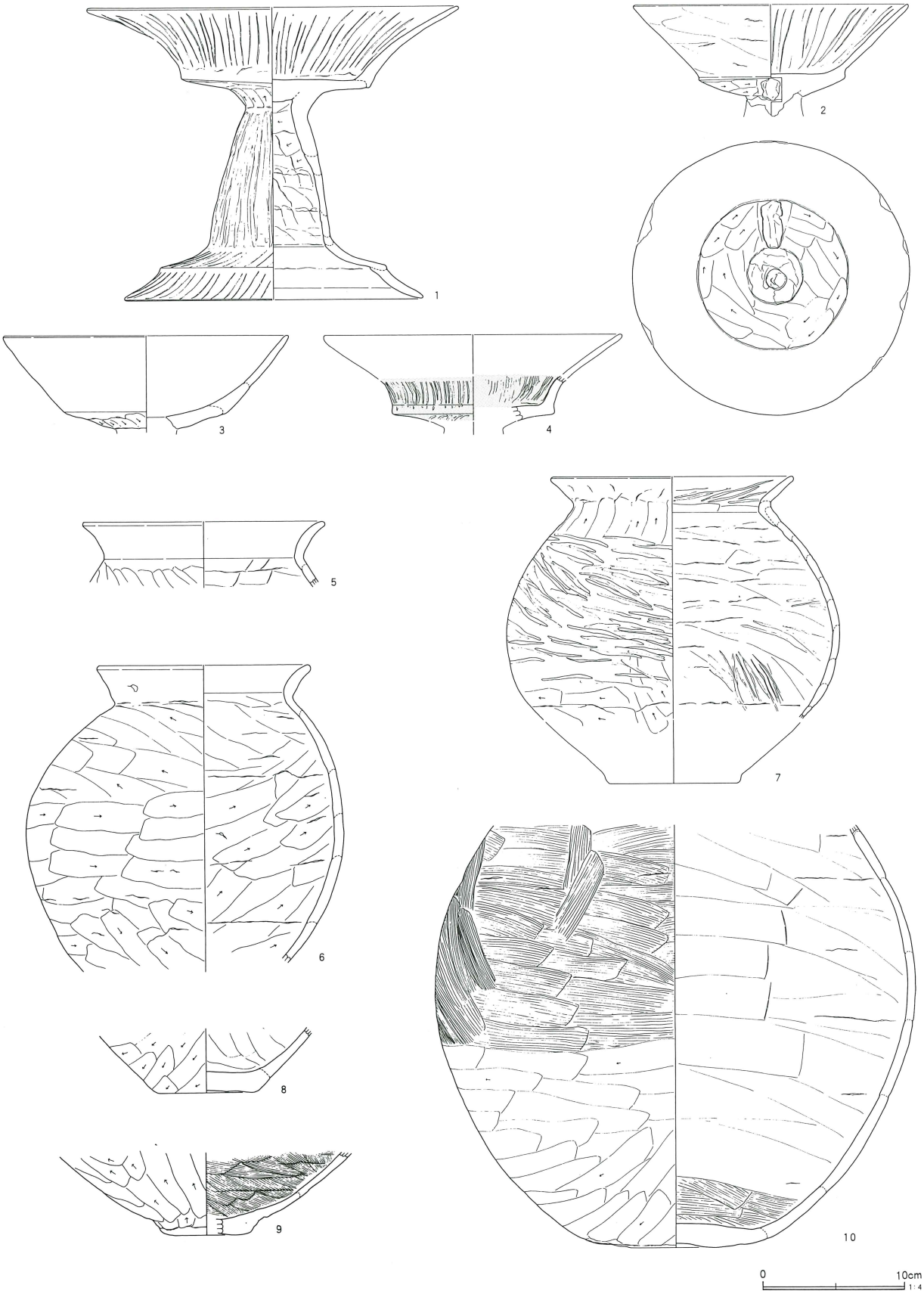
第51図　土壙・遺物分布図



第14表　第77号土壙出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	高坏	(26.0)	20.5	21.2	EHJ	II	鈍い赤褐	75	
2	高坏	19.3			EHIJ	III	鈍い黄褐	100	坏部に粘土帯添付
3	高坏	(20.0)			BHJ	III	鈍い橙	30	
4	高坏				HIJ	II	鈍い赤褐	15	内外面赤彩
5	甕	(17.0)			EHJ	II	鈍い褐	15	
6	甕	(15.0)			HJ	II	鈍い褐	40	
7	壺	(17.0)			ABHJ	II	鈍い黄橙	40	
8	甕			(7.0)	HJ	II	鈍い黄橙	60	
9	甕			(6.0)	HJ	II	鈍い黄褐	30	
10	甕			9.0	BDHJ	III	鈍い黄褐	40	

第52図　第77号土壙出土遺物



るものがあるが、完形になるものはなく、出土状況もある程度埋まってからの転落あるいは投げ込みと思われる。調査時にも竪穴住居跡の存在を予想して周辺を確認したが、関連するような遺構は確認できなった。

時期は和泉式期である。

第78号土壙（第51図）

J・K—24グリッドで検出された。ほぼ円形の土壙である。北側を第4号住居跡と重複する。平面確認では同住居跡より古いと考えられた。底面はやや凹凸がある。確認面での直径は1.02m、深さは22.2cmである。

遺物は、S字口縁甕片等が出土している。

第171号土壙（第51図）

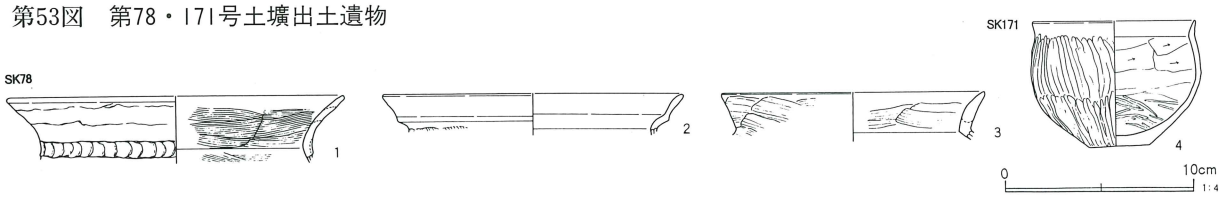
G—30グリッドで検出された。不整方形の土壙である。残存状況はあまり良くない。底面はやや凹凸がある。遺構との重複はない。確認面での規模は、0.85×0.74m、深さは19.2cmである。

遺物は、確認面で鉢形土器の完形品が出土している。

第189号土壙（第51図）

J・K—24グリッドで検出された。楕円形の土壙である。北側を第4号住居跡と重複する。平面確認では同住居跡より古いと考えられた。規模は1.29×0.75m、深さは7cmである。遺物は、出土しなかった。

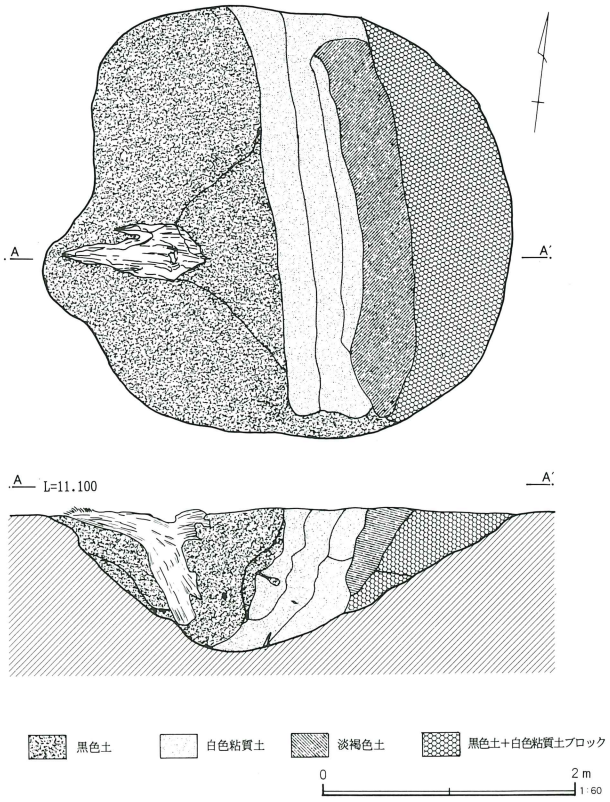
第53図　第78・171号土壙出土遺物



第15表　土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	甕	(18.0)			HJ	Ⅲ	褐	10	SK78
2	甕	(16.0)			BHJ	Ⅱ	鈍い黄橙	10	SK78
3	甕	(14.0)			HJ	Ⅱ	褐灰	10	SK78
4	鉢	8.7	6.7	3.2	HJ	Ⅱ	灰黄褐	90	SK171

(8)　風倒木痕

調査では風倒木痕が総数87基確認された。第8～11図における破線で示したのがそれである。大きさは様々で、小さいのは60cmから、大きいものは7mに及ぶものもある。これらには重複関係も見られ、1時期のものではないことがわかる。全てについて倒れた方向がわかるわけではないが、おおよそ、東西方向を示すものと、北東から南西方向を示すものがある。分布は東側の低くなる部分に多く、遺構のある高い部分には殆ど見られない。西側の道路部分では1基も検出されなかった。このことは当時の生活空間—集落域とその周りに広がる森—を表していると考えられないであろうか。風倒木痕については、その全てを調査する余裕はなく、典型的なもの2基について半裁した。内1基は木根が遺存していた(第54図)。この木根について年代測定を行ったところ、およそ古墳時代前期頃の結果が得られた。詳しくは付編を参照されたい。

第54図　第1号風倒木痕